

---

# アーカイブスの本マニア

マオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アーカイブスの本マニア

### 【Nコード】

N0674E

### 【作者名】

マオ

### 【あらすじ】

古本屋アルバイトのルル、その店の常連である冒険者・剣士であるテト。二人は超のつく本好き。ある日、テトが発見した本がきっかけで行方不明者が出る。本の謎を解くために、彼らは魔術師ギルドに忍び込む。が、しかし、そこにあった本に吸い込まれて……！  
？お約束にツツコめ！なツツコミあほ小説です。

## プロローグ・本好きなんですどこまでも

コルトローグという国がある。人口は小さな村まで含めて約十万人。国王はリンデン三世で、二人息子がいる。王太子も決まっており、継承権をめくりよくある陰謀や策謀もこの国ではお目にかかれない。王宮もある首都の名はアーカイブス。人口は二万人ほど。

国一番の魔法学院、魔術ギルド、賞金首ギルドが存在しており、ウワサでは闇組織の本部もあるというのだが、それを確かめた人間はいないし、街の住民も気にしていない。基本的に国民性は非常にのん気な国なのである。

街の南側には飛空艇の発着所である飛空場があり、西には船が行き来する大きな港もある。海と空と陸とが混ざり合う街なのだ。

活気溢れる場所には当然人もあふれる。陸海空が混ざり合う場所だけあって、人の種類もいろいろだ。街中を歩けばエルフやらホビットやらを見かけることも特別珍しくなく、時には羽の生えた小さな種族、妖精ともすれ違うことがある。

なんでもあり。ごちゃごちゃといろんなものが混じり、それを誰も拒絶しないおらかな場所。

それがアーカイブスなのである。

何も否定せずに受け入れるフトコロの深い街の一角に、一軒の古本屋があった。

看板には『古書の家』とある。店構えは当たり障りなく、何の変哲もない古書店だ。

しかし、ここはとある輩からは『伝説の店』と呼ばれている。ココに来れば望む本が必ず手に入る、とまで言われているのだ。

店主の人脈がすさまじいので、探して欲しいと訴えるとはば百中に探し出してくれるらしい。それを信じ込んでこの店にやってくる者は多い。ウワサの真偽も調べずに、だ。人の口に上るウワサ

とは恐ろしいものである。

そんなウワサのある店の中を、元気よく走る一人の少女がいる。年のころは十六、七。茶色のぶつとい三つ編みが、走るたびに背中ポーンはねている。決してたくましい体型ではないのに、重い本を十冊近く抱えても元気に動いている。

そばかすの浮いた顔はなかなか可愛らしい。瞳に活力が溢れているからだろう。接客をする言葉もハキハキしており、よどみがなく、印象はとても良い。

一生懸命働く彼女に、入ってきた客の一人が声をかけた。  
「すみません、距離と日数の成り立ち関係の本を探しているのですが」

店内は細長く奥行きがあり、本棚はたくさん並んでいる。一見ただけでは目当ての本はともじやないが見つからない。どこに何があるのか素人目にはサッパリ分からないが、少女は元気よく答えた。

「はい、いらつしやいませ！ 距離と日数関係ですね？」

客の目の前にまでやってきて、彼女は人好きのしそうなあたたかい笑顔を浮かべた。

「現在うちの店には、レラート・ゴード dias 著の『三兄弟とその両親』と、ファミナス・デランド著の『ミール・アーグ・リーフと父トーム』と、コルトローグ暦203年に書かれたアーネット産の『距離と日の親子』があります、どれがお好みでしょうか？」

一瞬も迷わず、一息で言い切った。店内の膨大な書物を全て管理、理解しているかのような口ぶりだ。

「え、ええと。どれがおすすめなんでしょうか？」

彼女の勢いに、客は戸惑いながらもそう返す。

「そうですね、レラート・ゴード dias 著のものは、日数の成り立ちを決めた三兄弟と父と、距離を定めた母の伝記的な本です。ファミナス・デランド著のものは、距離と日数を彼らがどうやって決めたのかまでを調べています。アーネット産のものはですね、この二

つを足して三で割ったような内容です。本をどのような目的でお探  
しですか？ それによっておすすめが変わってきますけれど」

心の底から嬉しそうな彼女の説明に、客もなんとなく笑って答え  
た。

「あ、ええと、教室で使っんです。その、勉学小屋で教師をやっ  
ておまして、今日は教材を探しに……」

「勉学小屋の先生でしたか。はい、分かりました。勉学小屋の素材  
にするには一番分かりやすいので、アーネット産のものをすすめ  
します。お値段もお手ごろですし、こちらなら子供にも分かりやす  
い素敵な説明がされていますから」

「そうですか。じゃあ、それをください」

「はい、少々お待ちくださいませ」

にっこり笑って頭を下げて、少女はまっすぐにたくさんある本棚  
の一つに向かった。目的の本がどこにあるのか、しっかりと把握し  
ているのだ。ほとんど間を置かずに彼女は戻ってきた。手にはし  
っかりと分厚い本を抱えている。古本屋とは思えない対処の早さで  
ある。

「こちらになります。お値段は二百五十リン（二百五十円）ですね  
彼女の言うとおり手ごろな値段だと客は判断し、支払いを済ませ  
た。

「ありがとうございます！」

「こちらこそありがとうございます。いやあ、お若いのに凄いで  
すね。さすが伝説の店の店長だけあります」

客の言葉に、彼女は首をかしげ、それから笑っていいのか困って  
いいのか分からないような微妙な表情を浮かべた。

「えと、申し訳ないんですが、あたし店長じゃないんですよ」

「え」

客は目を点にしている。あの対応を見て、すっかり彼女を店長だ  
と思い込んでいた。

「あたし、ただの店員です。店長は今、本の買いだしに出ていて不

在なので」

「ええ！」

客の反応に、彼女も今度は明確に苦笑を浮かべた。誤解されるのも無理はないと理解していても、こうあからさまだと苦笑するしかない。

「て、店長さんだと思ってました」

「間違われること多いですよ。あたし一ミール中（＝一日中）店番してますから」

苦笑を微笑みに変えて、彼女は言った。

「またどうぞ。あたしがいるときなら、店内の本は全てご案内できますから」

自信たっぷりな態度は、とてもただの店員とは思えないくらいだ。そして実際、彼女はただの店員ではありえないくらいの知識量を誇っていた。

にこやかに客に笑いかけ、重い本を何冊も持ち、テキパキと働く少女。

伝説の古本屋と呼ばれる店。そこで働く少女も知識量の多さから伝説の店員と呼ばれている。

彼女の名はルル・ホートント。

誰よりも本が好きで、本を愛している、本のトリコの少女である、

アーカイブスにある、伝説の古本屋『古書の家』。

店長はさえない四十男で、名をマイヤー・ハルクエイトという。

ごく普通の男性なのでこれといった特徴もなく、店に来る客など彼の名を知らず、店長としか呼ばない者も多い。

客にもあまり覚えられていない店主よりも、客に覚えられている少年がいる。

彼は今日も店の外で本に紙ヤスリをかけているところを目撃された。腰にはそこそこに立派な剣が下がっており、古びた鎧を身にまとっていることから、一般人ではないことは分かる。その辺を歩い

ている冒険者とさほど変わらない格好だ。

年頃は十八前後くらいか。黒い髪、青い瞳の、顔つきだけを見ているとなかなかに精悍なものを感じさせる少年だ。

しかし、全身像を見ると受ける印象は一変する。古びた鎧を身にまとっているものの、それが歴戦の冒険者の証というよりは、ただ単に貧乏くさいという雰囲気だ。上級の冒険者のような熟達した印象は、これっぽっちもない。金がない、と、蛍光色の看板を背負っているかのようである。全身で赤貧と訴えかけているようにも思える。

「やあ、今日も手伝いかい？」

通りすがりの男が、彼に声をかけた。ヤスリをかけていた少年は顔を上げ、力の抜けた笑みを浮かべる。

「毎日よくやるね」

「ははは」

なんと返答したものが迷い、少年は多少乾いた笑い声を上げた。

彼は店員ではない。店員ならば彼より百倍頼りになるルルがおり、店主のマイヤーもこの道ではプロ中のプロである。それなのに店員でもない少年が店の外で、本の手入れをしているわけ。

それは、本である。古本屋にということと分かるとおり、少年もまた本好きなのだ。そして、その風貌から発散されている雰囲気のとおり、彼は貧乏で、古本もろくに買えないような財産状況だった。

そもそも、冒険者というものは平均して危険度と収入が比例している。危険を避けると収入が低くなり、収入を求めると相応に危険度が高くなる。冒険者としての名声が高くなれば、更に収入は上がるだろう。しかし、貧乏くさを全身から発している少年を見ると、それほど高名な冒険者ではないと見当はつくし、あまり危険な冒険をしてもいないだろうと察しもつく。

ここまで考えると、店員でもない冒険者の本好き少年が、店先で本の手入れをしている理由も結論が出るだろう。

買えないから、手伝っているのだ。ちょっとしたアルバイトといったところか。

「おい、このくらいでいいか？」

少年は手入れを終え、髪まで白くなっているのを払いながら、店先から店内に声をかける。

「はい。どれどれ？」

ルルが店から出てきて少年がヤスリをかけた本を手にとった。手垢がついていた箇所はヤスリをかけたおかげで、それなりに綺麗に見えるようになっていた。

「うん。これくらいなら上出来。上手になったね」

「まあ、最近毎日やつてるから」

鎧のホコリを払い、くたびれたヤスリをルルに返す。

「で、あと何冊やればいい？」

「あ、今日はもういいよ。あとは拭いて値段つけて棚に入れるだけ」

「じゃあ拭くまでやるよ。布貸してくれ」

少年が差し出す手に、ルルがエプロンから布を出して渡した。これで表紙を吹いて汚れを落とすのだ。

「ありがとね」

「いいよ。そのかわり、あの本取つといてくれな。次に仕事見つけて稼いでくるまで」

「分かってる。ちゃんと取ってあるから」

少年の申し出にルルは苦笑を浮かべて店に戻っていった。見送って、彼はまた本を手にする。手にしているというだけで嬉しそうな彼の名は、テト・ペタヘイト。

戦士のクセに本好き。実はいっぱい本の読めそうな魔術師か魔法師になりたかったのだが、致命的なまでに魔力を扱う能力がなかったのであきらめたという、筋金入りの本好きである。本好きが高じて、長期間拘束されることが多い高額の冒険に出られず、実力はあるのに貧乏という悪循環に陥っているのだった。大量に本を買っては読み終わると売りに来る『古書の家』の常連、お得意さんであり、



欲しい本が多いときなど、一括で買えないので分割払いにしろ、い、ときおりこうして労働で利子分を返しているのである。

拭き終わって綺麗になった本を手にテトは店内に入り、テキパキと働いているルルに目をやった。棚にしまうのはいいが、その前に値段をつけなければならない。その辺は店員であるルルでなければ出来ない作業だ。

掃除中だった彼女は、すぐにテトに気がついてハタキ片手に寄ってきた。

「終わったの？」

「おう。で、これどこにしまうんだ？ 値段は？」

「えーっと、これは幻想絵巻の隣の棚なの。値段は三百リン（三百円）っと」

鉛筆で裏表紙の内側に値段を書き込み、受け取った本を目当ての本棚に持つて行く。途中、立ち読みをしている客にぶつかりそうになったが、そこは慣れているルルだ。難なく避けて目的の棚にたどりついた。大事そうに本を棚に納め、良い人を買われていくようにと祈る。少なくとも、店側の迷惑を考えずに立ち読みを長時間続けるような人間に買われることのないように、と。

多少めくって内容を確かめるくらいならいいけれど、そうでない長時間の立ち読みは迷惑だ。店は何人も立ち読みできるほど通路が広いわけではないし、そもそも仕事と商売の邪魔である。

そんなことを考えながらルルはカウンターに戻った。テトはおあずけをくらった犬のような雰囲気をもたせて、カウンターの後ろの棚を見ている。

彼が取っておいてくれと頼んだ本が入っている場所なのだ。彼の本好きはよく知っているので、ルルはヤンチャ坊主を見守る姉のよくな表情で促した。実際は彼女のほうが彼より年下なのだが。

「いつもみたいに分割でもいいよ？ 店長には言っておくから」

「や、この間もそうしてもらったし……今度はちゃんと仕事してか

ら買いに来る。楽しみに取っとく」

「テトがいいならいいけど、我慢しすぎて禁断症状起こしたりしない？」

「あんな、俺は麻薬中毒者か？」

「え、あたしは長いこと本読むのを我慢してると、イライラする禁断症状出るけど、テトは出ないの？」

「……出る」

同じ穴のムジナである。店員と常連が、しょうもない会話をしている間に本棚の間に入っていった男がいた。目ざとくルルがその客を視線で追う。

彼女の様子にテトも気付いた。

「……やりそうか？」

言葉の意味を明確に理解し、ルルはちょっと考える。まだ相手は本棚の影に入っただけだ。カウンターからの死角に入っただけからといって、警戒するのは早い。

「ちよっと、気になるの。テト、あっち回ってくれる？」

「分かった」

一も二もなくテトは頷き、カウンターから離れて店の奥に行ってくれた。ややあって、棚の奥から男が出てくる。手に本を持ってはいなかった。ただ本を探してただけなのだろうか。それにしては探している様子もない。大体、店内のことに詳しい店員であるルルがいるのだ。彼女に聞けばそれで済む用件なのである。もっとも、『大人向けの本』が欲しい場合、店員とはいえ年頃の女の子に尋ねるのは男性にとっては心苦しいことだろう。

ひよっとして『その手の本』が欲しいけれど、カウンターにいるのがルルなので買うのが恥かしいのだろうかと考えたとき、男は店を出て行った。

「ルルッ！ やったぞあいつ！ 腹に隠した！」

即座にテトが奥から走り出てきた。そのまま彼は出て行った男の後を追いかける。ルルは他の客がいるので店を空けられない。店長

マイヤーはまだ戻ってきていないのだ。

「ごめん、任せていい!？」

「おう!」

テトの返事は店の外からだった。店員でもない彼は寸分の迷いもなく男　万引き犯を追いかけていったのだ。店内にいた客が、何が起こったのか分からないのか呆然としている。

「あ、お気になさらないください。普通にお買い物してください。お客様は大事にするのがうちの店の方針ですから」

にこやかにルルは言い切る。普通に買い物をしない、そもそも窃盗である万引き犯には不親切な店なのだと。

外からは派手な物音が響いている。どうやら大捕り物に発展しているようだ。万引き犯が抵抗しているのかもしれない。ルルは心配していなかった。

冒険者としてテトの名は高くないが、実力のほうはかなりのものと知っているからだ。

だから彼女はいつものとおり接客を続けた。少しの時間がすぎ、何かを引きずる音が近付いてくるのを聞きとめ、彼女は捕り物が終わったことを知った。

「捕まえたぞー」

「はあい。お疲れ様ー」

万引き犯の男を引きずって、テトが戻ってきた。彼のほうは無傷で、万引き犯の方は顔にまともにアザができている。多分予想していた通りだろうが、一応聞いてみた。

「テト、ケガは？」

「俺はない。本も無事。こっちは大分。かなり抵抗されたから」

テトにはやはり怪我はない。余計な心配はしていなかったけれども、ホッとしたルルである。店員でもない彼に万引き犯を追ってもらった上に、ケガでもされた日には後悔で眠れなくなるだろうから。「ごめんね、ありがとう。店長帰ってきたら官憲呼ぶことになるだろうから、その辺に座らせといて」

「おう。見張ってるから安心しろ」

「うん。ありがとう。安心できる」

「あ、これ、こいつ取って行こうとした本」

かなり高価な『大人向けの本』である。買う金がなかったのか、買うのが恥かしかつたのか。それにしたって、ここまでの大騒ぎになるくらいなら買ったほうがよっぽど恥かしくないだろうに。

そう思うのは、ルルが女性だからなのかもしれない。

買い取りから帰ってきた店主のマイヤーは、カウンターの脇にアザのついた男が座り込み、テトに見張られているのを見てすぐに察したようだった。ルルも余計なことを言わずに単刀直入に訊く。

「店長。こういうことなんですけど、どうしましょうか」

「うん。官憲呼ぶからね。どの本盗もうとしたんだい？」

「これです」

「あー、そう。これが。まあでも、官憲呼んで来てもらえるかな。万引きは窃盗だからねえ。テトくんもいつもありがとう。今度君の欲しい本がウチの店に入ったら、できる限り割引してあげるからね」のんびりと言いながら、マイヤーは万引き犯に向き直った。いつもの説教が始まりそうなので、後はマイヤーに任せ、ルルは官憲を呼びに店を出た。これから彼女が官憲を連れて戻るまで、マイヤーは万引き犯にトクトクと説教を続けるだろう。

万引きは犯罪、立派な窃盗なのだ、と。大抵の万引き犯は、たかが万引きで何故官憲を呼ぶのだと騒ぐ。しかし、たかが、ではないのだ。本一冊でも値段がついており、売り物だ。古本屋として仕入れている品である。元手がかかっているのだし、あそこの店は盗り放題などと評判にでもなれば、店の死活問題にも直結する。だから『古書の家』では万引き犯にはとても厳しい。

それでいいと、ルルも思う。本が大好きだからこそ、読みたい本はお金を出すべきだと思うし、何よりも書いた人に対しても失礼だと思う。大切に大事に読んで、確かな何かを感じることを楽しみた

い。純粹に楽しむためには、盗んではいけないと思う。  
本が大好きだから、ルルはそう思っている。おそらくは、テトも。

## 一章・新しい本見つけた！・1

古本屋『古書の家』。晴れても曇っても雨が降っても、店番をしているのはルルだ。今日も彼女はいつもの時間に店を開け、カウンターで本の手入れを始めた。ちよつとしてから店主のマイヤーが顔を出し、おはようの挨拶を交わしてから、こう言った。

「引越しをするお宅が本を買い取って欲しいっていうから、行ってくるよ。その間店番頼むね、ルルちゃん」

「はい、分かりました」

にこやかに返事をし、ルルはマイヤーを見送った。店番を任されるのは慣れている。ここに勤めだして早一トーム（＝一年）。今ではよほど専門的な本でなければ、買い取りも出来るようになった。専門書はまだマイヤーの知識に及ばない。その辺りもしつかり学ぼうと思っているルルだ。アーカイブスに訪れて一トーム。こうして古本屋の店員をしているのも悪くないと思い始めているけれど、当初の目的を忘れてもいなかった。

彼女がこの店に来た目的は、一冊の本だ。遥かな過去、古刻時代と呼ばれる古代に存在したという、伝説の書。

実在は確認されている本で、数年前に『古書の家』で取り引きされたというところまでは確認していた。

その本は『アウローラ』と呼ばれている。どんな内容なのか、持ち主は決して語らず、そして手放している本。ひとつ所に留まらない本。題名からして古刻語で書かれており、一般市民では読めないシロモノだ。

古刻語を不自由なく読めるのは魔術師か魔法師と相場が決まっている。一般生活には必要ないものだからだ。古代の魔術知識、魔法知識に研究熱を燃やす魔術師たちにしか意味がないものなのである。それでも、ルルは『アウローラ』を読みたいのだ。次々と持ち主が手放す本を、読んでみたくてたまらない。

実際に取り引きをしたマイヤーも『アウローラ』と知らずに取り引きしたらしい。一般市民の店主は古刻語が読めないのだった。魔術師や魔法師とも『古書の家』は取り引きがあるが、取り引き自体に古刻語が読めるかどうかは必要ない。古刻語で書かれているというだけで高く買おうとするマニアもいるのだし、マイヤー自身は特に困ったことがないので、古刻語を勉強する気もないらしかった。はんばでなくコネが広いので、古刻語を知らなくてもやってこれたと言っのもあるのだろう。

『アウローラ』を扱ったという自覚もなかったようで、一トーム前『古書の家』を訪れたルルが『アウローラ』のことを尋ねると、マイヤーは奥さんと一緒に笑ったものである。

伝説の本を扱ったことがあったら、帝都ゴールゴディアの図書館みたいに大きな店にしているよ、と。

ところが、実際に知られている本の表紙などをルルが説明すると、確かにその本を取り引きしたと思い出し、マイヤーは青くなった。普通の古刻語の本相場で売ってしまったのだ。それでも半トームくらいの収入に値するくらいの値段ではあったが、物が『アウローラ』となると、その数倍から十倍は取っても良かった。青くなったマイヤーだが、そのうちあきらめた。半トーム分でも大きな収入に変わらないから良かったと、前向きに考えたらしい。おっとりした性格がここに出ている。これでよく伝説の古本屋といわれるほどのし上がったと思ったルルだ。

しかし、はるばるアーカイブスにまでやってきた彼女としてはあきらめきれない。手がかりも『古書の家』で最後だったのだ。あきらめたらここまでの努力が無駄になる。ちょうど人手を募集していたマイヤーに頭を下げて、雇ってもらったのである。最後に取り引きされた場所ならば、また誰かが売りに来るかもしれない。近くにマイヤー夫妻のコネで部屋も借り、今は一人暮らしをしている。趣味と実益と生活を兼ねた職なのだ。天職といえば天職だろう。本好きから見ればヨダレの出そうな環境だ。

本好きそのもののルルとしては夢のような生活である。問題は、油断すると給料が飛んでいくと言うところか。しかも、給料をもらっている勤め先に消えていく可能性が高い。食費を削るか、本代を削るか……悩んだことも実は一度や二度ではない。日給は三千リンで、一リーフの収入は約七万八千リン。一人暮らしには何不自由ない収入なので、本さえ無理に購入しなければ立派に生活できる。無理に購入しなければ、の話なのだが。

本マニアにはなかなか難しい話だ。実は昨日も気になる本を見つけてしまい、買おうかどうか迷っていたりする。給料日まではまだ遠く、ちよつと決心がつかない。

常連の誰かさんのように取りおきを頼もうかと悩んでいると、その常連の誰かさんが来店した。

「いらっしやい、おはよう」

「はよ。今日は何か手伝うことあるか？」

「うーん、今店長が買い取りに行ったから、それまではいつもどおりかな」

「買い取り？ どこで？ どのくらいだ？」

どんな相手で、どのくらいの量なのか、どんなジャンルの本なのか、気になるらしい。そのあたりはルルとしても気になるところだが、マイヤーが詳しいことを言い残していかなかったので、答えようがない。

「分からないよ。でも、引越する家みたいだから、量は結構多いんじゃないかな」

「おお！ それは期待できるな！」

テトは嬉しそうだ。ルルとしても心境はよく分かる。先ほど見送ったばかりだというのに。マイヤーが帰ってくるのを心待ちにしているのだから。

「ルル」

さっきまで本棚の前で難しい顔をしていたテトが本を差し出して



きた。けっこう分厚い本で、タイトルは『エンケドラスとエルビナの姫』と書かれている。店に並べる前に目を通していたルルは、幻想小説の一種だと知っていた。

「あ、買うの？ 大丈夫？ 買えるの？」

本を抱えたまま本棚の前で唸っているテトを見ていたので、そう尋ねた。テトの経済事情を熟知しているので、買えるのかなとも思っている。

「いや、でも買うから取っておいてほしい」

彼の返答に、ルルは苦笑した。常連の必殺技、取り置き。貧乏なテトには喉から手が出るほどありがたいだろう裏技だ。

「いいけど、あまり長くは取っておけないよ？」

一応、そう釘を指す。新しい本を扱う書店ではないのだから、一ヶ月程度ならまだしも半年や一年は取り置いて置けない。

「分かっている。金稼いでくるから、取っておいてくれ」

「はい。無理しないようにね」

受け取った本をカウンターの後ろの棚に入れ、ルルは店を出ていくテトを見送った。彼はこれから、冒険者が交流の場に行っている酒場に行くのだろう。普通の人もそこに依頼を張り出したりするので、彼らのような人たちが仕事を探すのなら、酒場に行くのが一番いい。上手くすれば目的を共にする仲間も見つかる。テトは行動を共にする仲間を持っていない。仕事のたびにパーティーを組んで、仕事が終われば解散する、そういうタイプの冒険者だ。理由は、頻繁に冒険に出るわけではないからである。彼は冒険に出るくらいなら本を読んでいたという人間なのだ。だが、本を読むためには金がいる。金を稼ぐためには働かなくてはならず、テトに出来ることといえば戦うことくらい。したがってやれることといえば冒険者。そういう理屈が彼の中で成立しているらしい。選択肢ならば本屋とか学者とか、本に関わる職はいろいろあるのだと思うのだが。

「……テトは学者か何かになった方がいいんじゃないのかなあ」

ルルは口の中で呟いた。あれだけ本が好きなのだから、学者にで

もなければいいのだ。職業選択を誤っているとは思えない。

「ただいま戻りましたよー」

そんなことを考えていると、買い取りにいつていたマイヤーが店内に入ってきた。

ルルはマイヤーに笑いかけ、先ほど買い手がついた背後の本を示す。

「あ、店長。お帰りなさい。この本、テトが取り置きお願いします  
って」

「はいはい。テトくんね。一リーフ（一月）くらいかな？」

「多分そのくらいだと思いますけど……でも三リーフくらい見ておいたほうがいいかもしれませんね」

これから仕事を探してもすぐ見つかるか分からないし、仕事を見つけても短期間で終わるとも限らない。冒険の場所によっては遠出するのも珍しくないことだ。

「そうだね。まあ、テトくんなら頼んでおいて逃げるってことはないだろうし、買いに来るまで置いといてもかまわないよ」

「そうですか。一応あまり長くは取っておけないよって言うてあるんですけど」

常連なので信頼度も高いのだ。テトは買うと言ったら本当に買うだろうとルルとマイヤーは知っている。しかも、手元に置くことに執着しているタイプではないので、読み終わったらまた売りに来るだろうことまで予想は出来た。

「大丈夫でしょ、彼なら。取っておいてあげよう。それよりルルちゃん、買い取ってきた本運ぶから手伝ってくれるかい？」

「はい」

本好きにはたまらない瞬間がやってきた。ルルは喜色満面で腰を上げる。今回マイヤーが買い取りに行ったのは、引っ越すので荷物を少なくしたいから本を買ってくれという家だった。わざわざロバを借りていったので、量はかなりのものだろう。

ルルは腕まくりをしながら店の外に出た。これからが楽しいのだ。

彼女はうきうきとしているが、楽そうに見えて結構力仕事であることもよく知っている。何せ、本は量があると重い。一冊二冊ならたいしたことはないが、紙というものはまとまるとかなりの重量になるのだ。ここに勤めてから、二の腕がかなりたくましくなったと思う。長く勤めたら、きつとももの凄くたくましくなるだろうなどと考えながら、ロバのところへ行く。

まずは買い取って来た本を店内に運ぶのだ。外に出るなり見えたのは荷台にてんこ盛りの本だった。引いてきたロバがぐったりしているのは気のせいではあるまい。ご苦労様とロバを撫でてやって、ルルはマイヤーと本を運び出し始めた。

「どの辺に置きますかー！」

「とりあえずカウンターの奥の空いてるスペースに！」

「分かりましたー！」

力が必要なので喋る声にも力が入っている。顔を真っ赤にして本を運び、それを何度も繰り返す。さすがに息が切れてくる頃になってようやく運び終わった。積まれた本を見つめて、汗を拭いながらもルルは目を輝かせた。

「店長！ この本あとであたしが買ってもいいですか！」

ずっと探していた本が混じっているのである。読みたくてたまらなかった本だ。

「あ。欲しい本あったの？」

「はい！ 買ってもいいですか！？」

「いいよ。あとでね」

マイヤーは苦笑している。彼女の本好きの度合いを知っているからだ。給料の六分の一ほどは店に還元している、と言ってもいいくらいである。ルルは一人暮らしで、そこから通っているのだが、自室はもの凄い状態なのだ。以前、壁際は本棚で埋まっており、床はたわんできているのでちょっと困っているという話をマイヤーにしたとき、こういう客がいるから古本屋は成り立つんだよなあとしみじみ呟かれたことがある。

その言葉の示すとおり、ここの店員になつてからルルの本コレクションは相当増えた。新しく本棚を二つ増やしたくらいである。買う量が倍増したのだから仕方ない。何せほしかったシリーズがセツトで買えるのだ。店員割引もしてくれるのだから、収集癖もあるルルが買わないわけがない。そのうち自室の床が抜けるかもしれないと、心配もしているが、そんな心配は本を目の前にと真つ先に頭から抜ける。

今もそうだ。嬉々として買い取った本を検分し始めた彼女に苦笑しながら、マイヤーは客の応対に行った。店に出す状態のチェックはルルの役目だ。彼女のチェックは細かいし、買う側の目になって見るので確実である。任せておけば大丈夫だと思ってくれているらしい。マイヤーの意をありがたく受け取り、ルルは思う存分検品を始めた。表紙の状態はどうだろう。汚れは、傷みは、破れなんてあったら言語道断だ。ましてページの欠落など許せない。表紙が外れているのも論外だ。

本を見つめるルルの目は怖いくらいに真剣だ。シミ一つ見逃さないと気迫で語っている。

一章・新しい本見つけた！・1（後書き）

本好きを舐めたらあきませんでー（舐めません）

## 一章・新しい本見つけた！・2

ページをめくり、汚れ、シミ、破れ、欠落、切り取り、落書きなどをチェックしていく。読み込んで手垢がついている箇所はエプロンのポケットから紙やすりを取り出して少しこすって綺麗にする。持ち主の保存方法によってはいたずら書きだけでなく線引きもしてあったりするので油断はできない。消しゴムで消せるようなものなら即座に消すが、そうでないペン書きはどうしようもできないので、目を皿のようにして見る。

一冊の本の表紙が日に焼けて色が落ちていた。日が入る部屋に置かれていたようだ。本に日光は大敵である。同じく湿気にも気をつけなくてはいけない。

とても綺麗な表紙だったろうに、見る影もなくなっていて悲しい。これでかなりの値段下降だ。次の一冊は湿気ていた。ページがぺらぺら、がびがびになっている。めくりにくいし文字がにじんで読みづらい。これも値段下降の理由になる。酷ければ売り物にもならない。幸いというか、これはそこまで酷くないのだが、かなり安くしないと売れないだろう。持ち主は保存には気を使わなかったらしい。状態を見ていると大体の性格や生活環境もうつすらと見えてくる。

この本の持ち主だった人は、かなりがさつだ。

葉巻やパイプの匂いがしないだけまだマシとも言える。マイヤーはかなり買い叩いただろう。これではまともな値段ではとても売れない。

しかし、本の内容は多岐に渡り、研究書かと思えば娯楽小説だったり（ヘルルの欲しい本はこのジャンルだった）風刺物があると思えば歴史書がこっちにあったり、カレンハイル帝国の観光マップがあったりと、起伏に富んでいて面白い。引越という話だったし、家族の本をまとめて買い取ったのかもしれない。人の数だけ本の趣味はあるものだ。

どれにせよ、状態はあまり良くなかった。一家で頓着しなかったと見える。

状態を確かめて、その中でも手をかけないで店に出せそうなものはよけておく。手をかけなければ店に出せそうにないもの、どうやっても捨て値でないと売り物にはならないもの、なにをしても売り物にはならないもの、と分けていく。

ルルが分けたあと、マイヤーが目を通して値段を決めるのだ。

エプロンのポケットから布を出して表紙の汚れを拭う。どんなに綺麗に見えても手垢やホコリで汚れているものだ。そうやって手入れをしていると、マイヤーが戻ってきた。

「仕分けできたかい？」

「はい。こんな感じで分けてみました」

「あ、ありがとう。じゃあ、あとはおじさんがやるから」

山が四種類出来ている。あとはマイヤーの仕事だ。一応ルルにも本の値付けはできるが、専門的なものの値付けはまだできない。そこまでの知識は経験を積むしかないだろう。

長く勤めていれば自然と身につくものなので、ルルはあまり気にせず接客と店番に戻った。いつものように客を案内し、会計をし、時に怪しい拳動の客をチェックし、時間が過ぎていく。

それがルルの日常だ。

\*\*\*

一リーフ半（一月半）後。

「ルルーっ！」

アルバイト店員の名を叫んで『古書の家』に駆け込んできたのはテトだった。

「あ、テト。いらっしやい。こんにちは」

「こんにちは！ 本買う！ 売ってくれ！ 取ってくれてあるか？」

勢い込んで身を乗り出すようにしている。どうやらうまく仕事が

見つかり、無事に帰って来られたようだ。見た限りでは怪我もない。駆け込んできたのだから元氣も有り余っているのだろう。彼はカウンターにちょうど本を買えるだけの百リンをぽんと置いた。

「取ってあるよ。冒険行ってきたんだね。お金あるってことはうまくいったんだ？」

カウンター奥の棚に入れておいた『エンケドラスとエルビナの姫』を取り出し、ホコリを拭いてやってから手渡す。テトは嬉しそうに受け取って抱え込んでから、

「まあね。今回はゴ布林退治だったんだけどさ。それが」

言いかけて、彼は周りを見渡した。店内に客はいない。ちょうどすいている時間帯で、店主のマイヤーも昼食に出ている。店にいるのはルルだけだ。彼女は既にお昼も食べ終わっていて、本の手入れをしていたところだった。そんなに忙しくもない時間帯である。テトが何か話したそうだったので、ルルも先を促した。

「どしたの？　今なら大丈夫だよ、お客さんいないからそんなに忙しくないし」

促されて安心したのかテトも話し始める。

「それがさ、洞窟にゴ布林が住み着いてしまったから、何とかしてくれて依頼だったんだけど、行って見たらその洞窟が遺跡に繋がってたんだ！」

「へえ、珍しいね。で、潜ってみたの？」

本の手入れの手を止めずに相槌を打つ。古刻時代の遺跡だろうか。その時代の遺跡なら、無宗教の国ヒツサークにあるジグラット遺跡が有名だ。もっとも、ゴブリンの住処から繋がっているというのは珍しい。

「ゴ布林退治した後に、調査に潜ってみたよ。なんか危険な魔物とかいたら大変だからな。でも、大丈夫だった。昔の魔術師が使っていた住居が埋まったみたいでさ」

魔術師。その単語にルルの体がぴくつと反応する。一心に本の表紙の汚れを拭いていたのだが、顔を上げてテトを見る。瞳が、真剣



だ。

「……魔術師の、家？」

ボソリと呟く。テトが頷いた。

「そう。魔術師の家。魔術師の家だぞ？ 分かるよな」

魔術師。知識を溜め込む人種が多い。それは現代に限らず、古刻時代でも同様だ。そして、知識を溜め込むと言うことは、まずいろんな書物を読む、ということだ。

「どのくらい！？」

思わず目の色を変えて叫ぶ。主語を省略してしまっているが、同類のテトには通じているのだ。すなわち『どのくらいの量の本があった？ 珍しい本はあった？ 持ってきた？』と、訊きたいのだとテトはにやりと笑って店内の本が入った棚を指す。

「このくらいの本棚が三つ」

成人男性の背丈を少し越えるくらいの高さで、幅は大人が両腕を軽く広げたくらいだ。棚の数は六段で、これだけあったらかなりの量の本が収納できる。

「三つ！」

ぴよっとルルは背筋を伸ばす。彼女の心境を表すように、二本のおさががしつぽのごとく揺れた。彼女の嬉しそうな様子に、テトは少し沈痛な表情になって告げてきた。

「でもさ、保存状態が悪かったらしくて、ほとんど腐ってたんだよな」

「ええ！ もつたいたい！ なんで！？」

ルルは痛ましそうな表情になり、テトもまた沈痛な表情そのままで頷く。本が愛しくてたまらないのだろうが、まるで目の前で死人でも出たかのようである。

「本当にもつたいたなかった……きっと面白い本とかあっただろうに、背表紙も読めないくらい傷んでてさ、あれは真剣に悔しくてたまらなかったね」

「くう……！ そどこにあるの！？ あたし行ってくる！ 補修

が効くかもしれない！」

いてもたってもいられなくなり、ルルはこぶしを握り締めていた。今にもそこに駆け込んで行く気満々だ。店番のことも頭から飛んでいる。

「待て。話はまだ終わってない。あのな、傷んでたり腐ってたりしてたけど、大丈夫そうな本もあったんだ」

「持ってきた！？ 持ってきたよね、テト！」

確信しているルルだ。テトは自分のご同類、重度の本マニア。遺跡の中にあつた本なんていう、とても面白そうなものを持ってこないわけがない。遺跡の中で発見されたものは基本的に発見した人間に権利があるのだ。持ってきてても罪にはならない。そうでなくては冒険者なんて職業が成り立つわけもないのだから。

「はははー、持ってきたに決まってるだろ！」

テトは胸を張った。やはりルルと同レベルである。ただ、彼は落ち着いた場所で本を読むことが出来ればそれでいいので、その後は手放すことが多い。ルルなら自分のものにして離さない。

「見せて！」

「だめ。古刻語で書かれててさ、内容分らないんだよな。やっぱり古刻時代のものみたいで」

残念そうなテトに、ルルは手を差し出して断言した。

「あたし読める！ 見せて！」

実は彼女は古刻語が読める。一般生活には必要ないので公言はしていないかったのだ。

「だめ」

テトは苦笑を浮かべて残念そうに断ってきた。

「なんで！？」

「今、その本俺の手元にないから」

「え」

「ギルドに預けて解読を頼んだんだ。だから俺の手元にはない」

片手を上げてお手上げポーズを取る彼に、ルルはガツクリと肩を

落とした。テトは古刻語が読めないので専門家に頼んだのだ。

「翻訳してもらってから読もうと思ってたんだよ」

「ええー、ないのー？」

「ルル、古刻語読めたんだな。知ってたらお前に頼んだのになあ。翻訳代金取られずにすんだのに……」

悔しそうに呟いて、彼は懷を押さえている。どうやら翻訳代金にけっこう取られたようだ。稼いできたばかりなのに、本のこととなると豪快に金を使うあたり、本に関しては理性が薄い。知り合いに頼むのだったらタダだったのに、と、後悔している模様。

「今から返してくれって言っても代金は返ってこないよな……」

寂しく呟いている。貧乏冒険者のフトコロは厳しいのであろう。あまりにもガツクリしているので、かわいそうになってきて、ルルは思わず慰めた。

「まあ、ギルドの人なら、ちゃんと綺麗に清書して翻訳してくれると思うよ。読んだら見せてね」

「おう、貸してやるよ」

「約束ね」

「貸してやるから、次に本買うときちょっと代金まけてほしい」

「それは店長に交渉して」

それ以上の追求を笑顔でもってかわしておいて、ルルは断言した。店員にそこまでの権限はないし、彼女は商人根性を持っていたのである。

一章・新しい本見つけた！・2（後書き）

マニアの心、恐るべし。

## 一章・新しい本見つけた！・3

事件はその二ミール後（二日後）に起こった。

テトが翻訳を頼んでいたギルドの魔術師が行方不明になったのだ。しかも、その魔術師が使っていた部屋が凍りついてしまったとのこと。そして、部屋の中のあるとあらゆる物が凍っていたにもかかわらず、例の本だけが凍り付いていなかったと言う。

これは本に何かあるのではないか。大体、古い遺跡の中にあったもので、ほかの本が傷んでいたというのに、この本だけが無事だったと言うのはおかしいのではないか。

何らかの魔力が込められているのではないかと、嚴重な調査が行われることになった。本をギルドに持ち込んだ本人のテトも、話を聞かせてほしいと呼ばれ、いくつかの質問をされた。

拾った場所、保管されていたところの状況、持ってきたときに何か異常を感じたか、等々。

テトは正直に説明した。彼が持っていたときには異常は感じなかったのだ。中も見てみたが、古く語で書かれていたので読めず、すぐに閉じた。あとは本が傷まないように大事に持って帰ってきただけだ。冒険と一緒にした冒険者たちにも何か感じなかったかと尋ねてみたけれども、彼らも特に異常を感じてはおらず、同行した魔術師など、あの本そんなに特殊なものだったの？と目を丸くしていたくらいだし、本当に気がついていなかったのだろう。

数ミール様子を見てみたが、行方を絶った魔術師が戻ってくる様子はなかった。ほかに姿を消す要因はないのかとギルドの方もあちこち調べているようだ。見通しは明るくないらしい。

本は嚴重にしまいこまれてしまい、いつ戻ってくるかも分からない。読めるのはいつのことになるのだろうと、ルルとそんな話をしていた日の午後、再び事件は起きた。

行方不明になっていた魔術師が、大ヤケドを負った状態で発見さ

れたのだ。

しかも、問題の本がしまいこまれていた部屋の中で。

発見者の話によると、いきなり轟音が響き、鍵のかかった室内から炎が噴き出したのだという。火の気など何もない部屋で、まるで魔術が炸裂したかのような轟音だったらしい。しかし、当時その部屋には誰もいなかったのだ。魔術が暴発するような品物も置かれていなかった。

怪しいものといえば、例の本だけである。

室内の物は以前凍っていたときと同じように燃え尽きていたというのに、本だけは無傷。

そして、その本の横に魔術師が倒れていたらしい。幸い、魔法が間に合ったので命に別状はないとのことだが、意識はなく、うなされていているとの話だった。『カニ……』とか『イカ……！』とか『タコ怖い』とか。

何故海産物なのか本人に聞いたいたところだが、意識が戻らないとどうにもならない。怖い状況である。本に原因があると考えて不思議はない。魔術師ギルドでは因果関係を突き止めるために本格的に本の調査を開始したようだ。

「で、いつ読めるの」

昼食を取ってから、いつものように店に来たテトを捕まえて、ルルは無然と問いかけた。人が大怪我をしたことも気になるが、より以上に本が読めるかどうかが気になるのだ。

「俺が知るかよ……俺のほうこそ知りたいよ！俺の本！」

テトも無然と答える。彼のほうも魔術師ギルドにしょっちゅう呼び出されてうんざりしているのだ。本を持ち込んだのだからと事情の説明を求められているらしい。

何度呼び出されても、彼のほうも同じことしか答えられない。

遺跡の奥で拾った。ほかの本に比べて保存状態が良かったので持ち帰った。古く語だったから中身は読めなかった。持っている間に異常は感じなかった。ちらっと目を通したただけで後はギルドの人に

翻訳を頼んだ　と。

早く読みたいのに、どんな内容かも分からないまま、事情を聞かれるだけの毎日。

「ルルに預けて置けばよかった……」

がつくりとうなだれるテトに、あわてたのはマイヤーだった。ルルは立派にこの店を支えてくれている。彼女にもしものことがあつたら店としては死活問題になるくらいに、彼女の存在はなくてはならないものになっているのだ。

「止めてよテトくん！？ルルちゃんがケガした魔術師みたいなことになったら、ウチの店終わるでしょう！」

「あ、そうか、ひと一人ケガしてるんだ」

本に夢中で忘れていたが、ケガ人がいるのだ。何が原因かまではまだ分からないが、ケガ人が出ていることは変わらない。

「呪われてる本なんだよ、きっと」

「え、でも、俺、触って持って帰ってきましたけど、なんともないですよ？　パーティー組んでた連中も元気だし」

マイヤーは真剣そのものの表情でそんなことを言った。本を持って返ってきたテトが、意外そうな表情で言い返す。中年に両足を突っ込んでいるマイヤーが幻想物語のようなことを言い出したのが意外だったようだ。魔術や魔法、あげくに妖精や亜人種族が存在している、『呪い』などというものは、この世界のどこにも確認されていない現象、物語の中だけの話なのだ。夢と同義語なのである。真剣に口にしたところで魔法師のところに担ぎ込まれるのがオチだ。「そうだよ。本が原因なら、持ってきたテトたちがなんともないのも変だよ。なんでだろ？」

本が呪われているのならば、持って帰ってきたテトたちが真っ先に餌食になっていないだろうか。ルルはそう考えた。しかし、テトもほかの冒険者たちもピンピンしていることを知っている。テト以外の冒険者たちは気味悪がって隣町へと移っていったが、行きつけの古本屋があるテトはこの街を動く気など毛頭ないらしい。

おそらくはルルの存在も理由の一つだろう。同じくらいの本好き、本マニア。いわば同士。深いところまで話し合える仲間を持つというのはとても幸せなことである。

そこにほかの理由があるかどうかは、テトにしか分からないことなのだが。

「読みたいな……テト、返してもらえないの？ あたし、読んであげるよ？」

テトの心境よりも本の中身が気になるので、ルルはまっすぐの彼の目を見た。持ち主はあくまでもテトなのだ。彼がギルドに返却を求めればなんとかなるのではないか。

彼女の言葉を聞いて青ざめたのはマイヤーだ。

「やめなさい、ルルちゃん。大ケガどころか死んだりしたらどうするんだ」

「店長、本と言うのは人のために書かれるものなんですよ？ 人に害なす本なんて存在しません」

ルルは平然としている。自分の信念に自信を持っているのだ。本に罪はないのだと。

「いや、だって、魔術の本って結構危ないものもあるって聞くじゃないか。ほら『リンドブルムの魔本』なんて人の生き血を吸うって伝説があるだろう？」

マイヤーは真顔で子供たちが道端でウワサする話の一つを例に上げる。いわゆる、誰が言い出したかも分からない話。嘘か本当かも分からない話というやつだ。

「あれはただのおとぎ話です。現物確かめた人いないじゃないですか」

「確かめた人は皆死んでいるからだよ」

マイヤーは心底から信じているようだった。純粹といえば純粹な人なのである。そのおかげで思春期の双子の娘から『おとうさんの下着と一緒に洗濯しないで』とか言われて、必要以上に傷ついているらしいのだが。



「なんで死んでるって分かるんですか？ それも誰かが確かめたんですか。大体、当事者がどこの誰かも分からないのに死んでるって、変な話でしょう」

ルルの正論に、マイヤーも短い間考え込んで、彼女と同じ結論に達したようだ。渋い果実をかじったときのような渋面で頷く。

「……そういえば、そうだね」

「そうですよ。ウワサなんてあてにならないんです。本に危険なものなんてありません」

「でも、今回は本当に人がケガをしているよ？」

その一点にすぎるように、マイヤーは話を続ける。どうしてもルルにあきらめてほしいらしい。彼女の身を心配していると同時に、彼女に何かあったら『古書の家』にも滅亡の危機が訪れかねないと危惧しているのだ。ルルがいない『古書の家』は、ほかの店に接客に劣る可能性が出てくる。

「本のせいとは限りません。ほかの原因かもしれないでしょう？ 決め付けるのは早いですよ」

すぎるかのようなマイヤーの意見をばっさり切って捨て、ルルはテトの袖を引いた。

「そういうわけで本、引き取ってきてよ。あたしが読んでみるから」  
「何がそういうわけなのか分からんけど、言っではみるよ。でも期待するなよ？」

「なんで。あんたの持ってきた本じゃない。所有権はテトにあるでしょ」

「そうだけどさ。ギルドは目の色変えて調べようとしているからなあ」

テトはあまり気乗りしないように見えた。おそらく、『危険かもしれない本』という事で知人を巻き込みたくないという意識が働いているのだろう。

もし本当に本が呪われていて、ルルがそれに巻き込まれたのなら、テトはとてつもない後悔を背負い込むことになりかねない。

ルルはそこまで感じ取ったわけではないが、テトが気分的に奪還に乗り気でないことは理解した。なので、一番効果的な言葉を口にする。

「返してもらったら翻訳料も返ってくるかもよ」

「行ってくる」

案の定、テトは即答した。ルルも心に学習する。赤貧冒険者には金額のことを口に出すのが一番だ。貧乏テトは次に買おうともくろんでいた本を棚に戻して店を出て行った。彼の後姿を見送って、ルルは満足げに頷き、仕事に戻る。

「ルルちゃん、テトくんの動かし方を心得ている……」

マイヤーがそんなことを言って苦笑していたことを、テトは知らない。多分、知らないほうが幸せな人生を送れることだろう……。

肩を落としたテトが戻ってきたのは、そろそろ日が暮れるかという時刻だった。消沈した彼の様子から、本は戻ってこなかったのだと予想はできた。しかし、ルルは見逃さなかった。

「テト」

「なんだよ」

「フトコロが妙に膨らんでいるように見えるけど、どうしてかなー？」

指摘に、彼は身を硬くした。表情は明確に強張っている。それでも彼はどうにか笑みを浮かべようと努力しているようだ。

「ななな、なんのことかな」

……どもっている意味がないと、本人は気がついているのかどうか。ルルは軽く息をついて彼を眺めてやった。法廷に立つ糾弾者のような気分で。

言葉を口にはしない。この場合、無言の追及こそ自白を促すだろうから。

容疑者はしばらく黙秘権を行使していたが、呼吸を十繰り返す頃には耐え切れなくなっていたようだ。

「……あのな、ダメだったんだよ」  
「ルルから視線を逸らして小さく言う。  
「行ったら、いきなり偉い人が出てきたんだ……」

出迎えた人物はエルフ族で、しかもギルドのトップに近い導師だった。彼は名をアルジャー・ゲオと名乗り、テトの申し出は受け入れられないと苦い表情で答えたのだ。

あの本はテトが発見し、所有権はテトにある。自分の所有している品を返してくれないのはおかしい、という理由で返してもらえないのか説明してくれと訴えると、アルジャーは苦い表情を更に渋くして答えた。

更に行方不明者が出たのです、と。

聞いた瞬間テトは目を点にした。点にするしかないだろう。

また行方不明者が出たのだという事実は、驚愕に値する。マイヤーが口にした『呪いの本』という単語が、零下の冷たさを持って脳裏に飛来した。

アルジャーは淡々と事実の説明をしてくれた。

今回行方不明になったのは魔術師二人。一人は序導師。これは見習い、魔術師を経て、それなりの功績を持つ魔術師に与えられる位だ。要は中級くらいの実力はあると見て正しい。

もう一人はまだ見習いで、魔術を扱えはするものの、一般人に毛が生えたくらいの実力しかない。序導師の補助的役割 要は雑用係 一緒に部屋に入っていた。彼らは兄弟弟子で、ともにアルジャーに師事していた。これが見習い魔術師一人だけなら、勉強か修行がイヤになって逃げ出したと思えるのだが（実際、その見習いには脱走の前科があるらしい。もつとも、すぐにバレ、あつけない戻ってきたとの話だ）序導師の位を持つ魔術師も一緒だったことで、脱走の可能性は低くなる。兄弟子と一緒に逃避行なんてお寒いことではない証拠に、本の周りには直前まで彼らがいた痕跡が残っ

ていた。散らばった書類、彼らの私物……そして、部屋のドアには鍵がかかっており、さらに外には警備していた者もいたのだ。

警備は彼ら二人が部屋を出るところを見ていない。それどころか不審な音も声も聞いていなかった。

魔術師二人は閉め切った部屋から消えたのだ。

本当のことなのか、と、テトは思い、その旨を正直に口にした。

アルジャードの返答も困惑して疲れきったものだった。消えたのはアルジャードの弟子なのだ。導師としても困りきっているのが目に見えたので、テトも強くは申し出られなくなった。真剣に呪いの本なのかと疑い始めたというのもある。本が原因ではない可能性もあるが、本が原因でないと考えづらい。

密室のような室内で魔術師たちが消え、残ったのは彼らの私物と怪しい本。

疑うなという方が無理な話だ。

ギルドでは本を封印することを検討し始めたとアルジャードは言った。その場合、ギルドが本を引き取るという形になるので、テトには正当な報酬が支払われるとも。

赤貧テトが反応しないわけがなかった。

一応、それでも食い下がることはした。本を手放すことに迷いもあつたからだ。ケガ人に加えて行方不明者が計三人。危険な本なのかもしれないが、内容がどんなものかも知らないのだ。

古刻語で書かれていたので題名すらテトには読めなかった。本好きとして、心残りは山盛り大盛りでんこ盛りである。せめて題名がどんなもので、あらずしも理解でき、自分好みの内容ではないと言ふのなら、手放すのも一瞬で覚悟が出来たのだろうが。

テトに収集癖はない。本自体を手元に置いておきたいとは思わないのだ。そもそも、宿暮らしで大量の本を手元においておくことが不可能なのだから。

本の内容を知りたいと彼は要求したのだが、アルジャードは更に困惑を深くして返答した。直接調べたのが自分ではないのでなんと

もお答えできませんと。

上に立つものとして責任者はアルジャーードだったらしいが、実際に研究をしていたのは下の人間だったらしい。それも至極当たり前の話だ。

普通、何のコネもない冒険者が持ち込んできたものを、いきなり導師が調べることは、まず、ない。下っ端の魔術師が調べ、そこで判明しなかったら実力が上の者、と順序だてて調べていくのが流れだろう。今回も例に洩れず、下っ端の魔術師が調べて行方不明になり、いきなり戻ってきたと思えば大怪我を負って意識不明。もともと実力のある魔術師が助手と一緒に調べようとして、また行方不明になったのだ。

やはり本に何かあるのか。何よりケガ人が出ていることが怖い。内容を知らないまま手放すことは苦痛に近いが、ケガをしたり行方不明になるよりはマシだろう。

テトはそう判断した。本はアレだけではないのだ。ギルドに売り渡したお金で、もっと魅力的な本を買えばいい……。

アルジャーードに説明されるまま、テトは書類にサインした。

一章・新しい本見つけた！・3（後書き）

あーあ、サインしちゃった（他人事のようにw）

## 一章・新しい本見つけた！・4

「で？」

ルルは自分が微笑んでいると自覚している。多分、目は笑っていないだろうことも。

「そのお金をもらってきた、と？」

微笑をそのままにテトのフトコロを指す。お財布の入っているであろう、ぽっこりと膨らんでいるその場所を。

いわくつきかもしれない本だ。魔術具と変わらないくらいの価値をギルドはつけたのだろう。となると、金額は相当な額になる。テトなら数年は余裕で暮らせるかもしれない、百万リンに近い金額を「テト」

にこやかに、あくまでも微笑んで、ルルはカウンターの脇のハタキを手を取った。友好的に見えなくもない笑顔だったので、テトは油断していたようだ。

彼女の目が笑っていないことを、まっすぐ目を見て会話をしていたら理解できていたはずだが、罪悪感のようなものを感じていたために彼は彼女の目を見ることをしなかった。

よって、ルルが振りかざしたハタキは、マトモにテトの顔面に炸裂したのである。

「あんたアホでしょ！」

「わぶ！ やめろ！ なにすんだよ！？」

「本を封印するって言われておとなしく譲ったのがアホだって言うてんの！」

「なんでアホだ！？ いいだろ、危ない本かもしれないし！ 人が消えたりケガしてるんだぞ！」

「危ない本とは限らないでしょ！ ケガ人だって本と関係あるかどうかはまだ関連不明じゃない！」

身を乗り出してハタキを構えるルルの勢いに、テトはいたずらを

しかられた幼児のような表情で身を引く。

「俺は一応ルルのことも考えたんだぞ！ お前に何かあつたらマイヤーさんだつて困るし、俺も困る！」

「店長は分かるけど、何であんたが困るのよ？」  
「便宜<sup>べんぎ</sup>を図つてもらえない！」

そう断言したあたり、深い意味があるのかないのか。ルルには判断できなかったし、この状況で判断するつもりもなかった。今大事なのはナゾの本のことである。

「封印よ！ 保存じゃなくて、ふ・う・い・ん！ いい？ もう二度と読めなくなるのよ！」

ギルドに封印されてしまったら、一般人どころかギルドの人間ですら簡単には読めなくなるのだ。読書をするためにあちらから許可を取り、こちらから許可を取り……それでも読めない可能性が出てくる。

本は人に読んでもらうために存在するもの。それなのにそんな扱いを受けるなどかわいそうすぎる。

「せめて表紙だけでも拝みたかったのに……！ 中身がなんなのか分からないまま封印されるなんて酷すぎる！ そんなの耐えられない！ 本だつて可哀想！ 読んでもらうための本なのに、誰にも読まれないままこの先過ごすなんて！ 拷問よ！ 本だつて絶対にイヤだわ！」

ルルの意見は自分の考え方をそのまま口に出しているだけだ。それだけに熱い。彼女の背後に太陽のように燃え盛る正義感がみなぎっているかのようにも見える。しかし、彼女の背後で、マイヤーが必死で首を振っていることには気がついていないようだ。マイヤーはテトに彼女を止めてくれと訴えているつもりであつたのだが。

「はっ……そうか！ 封印つてことはギルドの人も読めないのか！ テトが気がついたのは、そんなことだった。所詮彼もルルと同じ穴の『むじな（・・・）』なのである。」

「そう！ ギルドの奥深くに厳重に封印されて、ページどころか表



紙もめくつてもらえない可哀想な本になっちゃうの！」

ようやく彼に理解の気配が見えたので、ルルは念押しの一言を叫んだ。読めない本。読めない本。

「なんてこったあ！」

劇中ならば効果音が入りそうな箇所だ、と、店に居たほかの客は感じただろう。多分、寸劇を見ているような気分陥ったはずだ。喜劇と変わりない即興寸劇。呪われている（かもしれない）本が喜劇の根本なのだが、しかし会話をしている本人たちはいたって真剣なのである。

「くそ！ サインするんじゃないかった！ 金返したら本返してもらえるかな？」

今頃封印という言葉の危険性を理解したテトに、ルルは悲痛に眉を寄せて説明した。

「多分無理ね……一度サインしちゃったし……もし返してもらえるとしても、倍返しは求められるかも。むこうは危険な本だって認識しているみたいだし」

一度正式に契約を交わした以上、やっぱり止めたから返してくれというのは通らない話だ。倍返しを求められても仕方のないことで、まして返還拒否ということもありえる。

大体、赤貧冒険者のテトに倍返しが出来るわけもない。ルルが金を貸すという選択肢もあるにはあるが、一攫千金の冒険者でもない一般人の彼女に、そこまでの資金があるわけもなく。定期的に本を買っているので、貯蓄はしているも、そんなに大層な金額を所持することもありえない。そもそも、ギルドが封印を決定したのならば、返還拒否の可能性が高くなる。

よって、倍返しをしても本を返してもらおうという案は却下される。残った案は、本の危険性が皆無であるということを経明することだけだ。古刻語を読めるルルが本を読めば済むことなのだが、現在、渦中の本はギルドの中。二人の手元にはないのである。

「ルル、古刻語読めるってことはギルドか学院に登録してるのか？」

登録してるのならそつちの関係から頼めないか？」

「え。う、ううん。してない」

「してないのか？　じゃあなんで古刻語読めるんだ？」

テトの指摘はもつともだ。普通、古刻語は魔術師か魔法師にしか読めない。魔術師、魔法師のどちらかであるということは、魔術ギルドか魔法学院に所属している必要がある。

「独学」

「え！　どうやって！」

「頑張ったの。この話はここで終わり！　古刻語が読めるかどうかは関係ないから！」

「いや、でも」

「関係ないの！」

あまり触れられたくない話なので、ルルは会話を逸らした。

「今大事なのは、どうやって本を取り返すか、でしょ？」

胸の内にあるのは本への愛情である。

そして、今の目的は不遇な本を救い出すこと。

現在の心境を表すとすれば、捕らわれの『おひめさま（ほん）』

を救い出す『おうじさま（ほんマニア）』なのである。幻想絵巻の主人公になった心境だ。

「ギルドに真つ正直に訴える方法は駄目か……じゃあ、どうすればいい？」

「封印させないためには本が安全だと認めさせないといけないよね」

「でも本が手元にないと駄目だろ？　手元に持つてくるにはギルドから持ち出さないとならない……ギルドから持ち出すには向こうが納得しないといけない。でもむこうは本が危険だと思ってる。本を安全だと認めさせるには……って堂々巡りじゃないか」

「そうでもないよ」

テトの悩みをルルは簡単に断ち切った。自信が花開いたかのように瞳を輝かせて彼に顔を寄せ、ほかの誰かに聞こえないように囁いた。

「忍び込んで本のところに行つて、あたしたちで調べるの」

「ちよつと待て」

「あ、本気で言ってるから」

制止しようとしたテトをあつさりと遮る。おそらく彼は本気かどうか問い質そうとしたのだろうが、ルルは先手を打って封じてしまった。

魔術師ギルドへ忍び込む。言うのは簡単だが、実行するのはとても難しくことだ。

テトは口をパクパクしている。魔術の心得がないので魔術師ギルドがとんでもないところに感じているのだろう。まあ確かにとんでもないところではある。警備のゴーレムが何体も、平気で歩いていけるような場所なのだから。

「……死ぬだろ、それは」

呆然とテトが口にする単語は、あながち間違っていない。侵入者と知れたら、どんな魔術が飛んでくるか分かったものでもないのだから。

ただし、それは侵入者だと思われたら、の話だ。

「だから、あたしも行くつて」

「は？」

「取引先の店員だよ、あたし。『古書の家』から来ました、買い取りの要請があつて、とか言えば問答無用で追い出されることも、攻撃されることもないつて」

ようするに、侵入者と思われなければいいのである。

「そついうわけで、今夜潜入するから、気合入れてね」

「今夜あ！？」

ルルの宣言にテトは悲鳴のような声を上げた。早すぎるとか言いたいのだろう。心の準備が欲しいのかもしれない。しかし、ルルはそんな必要はないと思つた。

本の無実を証明するためにはちんたら準備している暇はない。そうこつしているうちに封印されてしまったらもう手は届かなくなる。

迷いがどれだけの時間の無駄になるのか、彼女は知っている。ギルドはすでに本を封印することを決定した。時間をかけたらかけただけ、本の無実を証明する距離が遠のく。無実への距離がゼロになる前に、事を為しえなければならぬのだ。

「早い方がいいのよ。ギルドはもう封印を決定しちゃってるんだから」

言い切る彼女に、テトは思案しているようだった。魔術師ギルドが相当怖いらしい。魔術どころか魔法の心得のない彼には無理のないことだとも思う。ルルだって怖い。

だが、本を救うためにほかの方法はない。そもそもほかの手段を探している暇もない。放っておけば、読まれないで放置される哀れな本が増える。調査して、万が一危険な本だとすれば、そのときは自分の手で処分もやむを得ないとも、ルルは考えている。

一応、本当に危険な場合のことも考えていた。即座に本を破棄するだけの覚悟も必要だと。

まあ、『もし』『万が一』『百歩ゆずって』とかの形容詞がつくくらい、本の無実を信じてもいるのだが。

そこまでルルが考えたとき、テトも決心がついたようだ。

「よし、準備しておく。ルル、お前も覚悟しておけよ？ 本当に危ない本かもしれないから」

彼も似たような考えでいるようだ。危険な本だという可能性もあるのだと。

「覚悟はしておくけど、ないほうがいい覚悟だとも思うよ。本に悪いものなんてないって、あたしは信じてるから」

「俺もそう思いたいけどさ」

「うん。でも、まあ、考えておこうね。そのときはあたしたちで責任持って破棄してあげよう？ 本のために不幸になる人が出ちゃいけないと思うから」

「そうだな」

本を持ち込んだのはテトで、実際ルルは関係ないのだが、彼女は

すっかり所有者の気持ちで言い切った。本を思う気持ちでは、彼女とテトに差はないのだ。

基本的には本の無実を信じつつ、もしものときには刑を執行する覚悟を持ち、その二点を使命感にまで昇華させ、ルルはテトと手を組み合わせた。

ここに、『魔術師ギルド潜入、謎の本奪還・あるいは処分』コンピの共犯関係は成立したのである。

……などと、大仰に表現したものだだったが実際に入り込むのは簡単だった。

「『古書の家』から買い取りに来ました。あ、こっちの彼は手伝いです。本が多いとのことですので」

ルルが門番に説明しただけで通してくれたのである。彼女は出張買い取りにも来たことがあり、門番も知り合いだったのだ。

それに、魔術師という職についている人間は、宵っ張りまで研究に没頭していることが多く、その分朝が遅いことも多い。結果、夜遅くに資料が必要になることも多々あるので、ギルドもその点を考慮しているのだ。魔術師の中には、昼夜が逆転しているものも珍しくない。そういう魔術師が夜に買い取りや配達を依頼することもままあった。

テトが拍子抜けするくらい簡単なことだった。

「……簡単にいくもんだな」

あからさまにがっかりしている彼に、ルルは首をかしげた。

「何を想像してたの？」

「いや、堀登るとか、照明灯避けたりとか」

冒険小説とかでよくある、主人公がどこかの施設に潜入するとき、罠だらけの場所を危険ギリギリで突破するような展開を望んでいたらしい。本の読みすぎだ、と、キツパリと断言できるルルである。ギルドに照明灯なんてものは設置されていない。そんなものが設置されているのは、国家間の安全に気を使う飛空場くらいのもの

なのだ。

「照明灯なんてギルドにはないって。こんなところに侵入する人なんてほとんどいないだろうし。塀はあるけど、夜間は火炎の魔術が込められるっていう話を聞いたことあるから、ウツカリ登ると焦げるよ」

「そうか……登ると焦げるのか……」

告げられたテトはなんだか虚空を見つめて呟いている。どうもスパイ小説か何かと勘違いしているのかもしれない。照明灯に追いかけられたり、罠のある塀登りなどを体験してみたのか。運動神経の良いテトなら潜り抜けられるかもしれないが、ルルにはとてもじゃないが無理な話だ。

「照明灯は飛空場にならあると思うよ。今度行ってみたら？あたしは行かないけど」

「……見学になら行ってみたいけどなあ、忍び込んだら魔術か魔術具で射殺されそうだから行かない」

「そうだね。忍び込むのは危ないよ」

のうのうとそんな会話を交わしながら、ギルドに入り込んだ二人である。

一章・新しい本見つけた！・4（後書き）

やっとこ忍び込みましたw

## 一章・新しい本見つけた！・5

そのまま奥まで進む。おそらく、問題の本はギルドの偉い人、アルジャーロが出てきたのだから、偉い人しか行けないような場所に保管されているのではないかと予想していた。

下っ端ではとても行けそうにないところ。重大機密保管場所とかわかりやすい名称の部屋があれば良かったのだが、そんな部屋はなかった。魔術師ギルドの重鎮は、そこまで愚かではないようだ。おかげでそれらしい部屋を探すためには、手当たりしだいに探し回らない。

夜間だからだろうか、人の姿は廊下にはそれほど多くない。おそらく自室が研究室にこもっているのだろう。たまに警備なのか小間使いなのか、大小のゴーレムが動き回っているのが目に入る。擬似生命体で、魔術で作られるものだ。主に結晶などから作られることが多い。過去、生肉から作り出したら、擬似生命体ではなく、生き物に等しくなるのではないかと研究を重ねた人物もいたが、肉が腐ってただならぬ異臭を発してしまい、周囲からの苦情が殺到、やむなく研究を断念したと言う逸話もあることをルルは知っている。

ギルド内を歩きまわっているゴーレムは色から大きさから千差万別で、それを見ているだけでも実は結構楽しかったりする。今回は残念ながらそんな余裕はなく、資料閲覧室とは間逆の方向に行ったり来たりを繰り返して、そろそろ怪しまれるのではないかと心配になってきた頃、立派なゴーレムが二体立っている部屋を見つけた。

綺麗な虹色に光るゴーレムだ。大きさはテトより一ヤール（メートル）は大きい。頭が天井をこすりそうなくらいだ。重さを見ると、テトとルルを足して二乗してようやくつりあうかもしれない。ここまで巨大なゴーレムが、いかにも何かを守っていますといわんばかりに部屋の前から動かないのだ。中に何かがあるのは間違いない。これで誰かの護衛ゴーレムで、中にいたのはお偉いさんとかい



う話だったら、即座に転換して知らぬフリで他を探そうとまで決めて、ルルは足を踏み出した。

『ココは立ち入り禁止デス』

『タダちに退去して下サイ』

近寄るなり、二体のゴーレムは言葉を発した。ルルは思わず目を見張る。このゴーレムはかなりの実力を持った人物が作り出したものだろうと分かったからだ。彼女の知識の中でも、喋ることができないゴーレムというのはマレだ。実力のない人物が作ると、言語能力まで魔力が及ばないことが多い。よって、出来上がるのは、命令を聞きその通りに動くけれども応用のきかないゴーレム、となる。

ためしに問いかけてみた。

「あの、道に迷ったんだけど、研究棟にはどう行ったらいいの？」

『研究棟はココからまっすぐ進んで二つ目の角を右デス』

彼女の問いかけにゴーレムはよどみなく答え、指をさしてまで教えてくれた。案内機能までついている。きっちりとこちらの言動を受け止めている証拠だ。

言語を喋り、介するというだけで、製作者はかなりの実力があると判断できる。

「すごい。これ作った人、かなりの実力あるよ」

「え、そうなのか？」

テトには見当がつかないようだ。ルルは彼に説明するために一旦ゴーレムたちから離れた。

「だってあれ、喋ってるもん」

「普通は喋らないのか？ 幻想絵巻だと守護ゴーレムってけっこう喋るけど」

「普通程度の実力の人が作ると、言語能力まで魔力は回らないよ。ましてあそこのゴーレム、ちゃんと受け答えしてたよね？ 道案内までしてくれたし。かなり上等なゴーレムだよ」

「ルル、詳しいな。魔術師でもないのに」

「い、いっぱい本読んだからね」

上質なゴーレムは上質な製作者から生まれる。上質な製作者とは実力のある魔術師で、実力のある魔術師が作り上げたゴーレムが、弱いわけもない。

そんなゴーレムが守っている部屋。絶対に何かある。

「あそこか、本」

「まだ決めるのは早いよ。物じゃなくて人を守っている可能性もあるから」

「あ、そうか……自分の警護にゴーレムを作り出すってこともあるもんな」

「確かめてくる」

「え」

言うが早いのか、ルルはテトを置いてさっさとゴーレムに歩み寄った。ちよつとゴーレムに小突かれただけで、彼女は簡単に死ねるだろう。もつともルルに死ぬつもりはなく、彼女は簡単な問いかけを口にしたただけだ。

『ココは立ち入り禁止デス』

『タダちに退去して下サイ』

先ほど近寄ったときに使っていた警告を繰り返してくる。同じ相手に同じ警告をしてくるあたり、記憶能力はさほど重要視されて作られていないのだろう。

その辺に付け込む隙がある。彼女は矢継ぎ早に言葉を繰り返した。「ここには何かがあるの?」

『答えるコトはデキマセン』

「答えなくていいよ。教えてくれればいいの」

『教えるコトはデキマセン』

「教えてくれなくていいよ。喋ってくれればいいの」

『喋る……』

「話してくれればいいよ?」

『本デス』

「そつ、ありがとう」

確証を得たルルは、につこりとゴーレムに微笑みかけてテトのところに戻った。見ていただろう彼は目を丸くしている。何が起きたのか分からなかったらしい。

「なあ、何で教えてくれたんだ？」

「種明かし。実はゴーレムは単純な命令しか聞けません。何故なら脳みそのない擬似生命体だからです。記憶能力に魔力を注げばその欠点も改善されるんだけど、そこまで記憶能力を重要視してないみたいだったから、今みたいに早い質問に対応し切れなくて答えちゃったわけ。さすがにあれだけ質のいいゴーレムだと応用もきいたみたいだけど、それも三つまでだったね」

「ああ、そうか。理解できた。要するに、早く話しかけて混乱している間に聞き出したんだな」

「そういうこと」

「本当に詳しいなー、ルル。どんな本にそんなこと書いてあるんだ？ 俺も読んでみたい」

「え、ええと、アーカイブスに来る前に読んだ本だから！」

「なんであわてるんだ？」

「べべ、別になんでもないよ？」

どもりながらもルルは考えている。あの部屋に問題の本があることは間違いないだろう。今アレだけ問題になっているのだ、これで違う本ということはないはずだ。

一旦ゴーレムが守る出入り口から離れ、ぐるっと回って反対側の廊下で座り込む。本が置かれている部屋は分かったが、部屋への侵入方法が難問だ。何せ出入り口の前には強そうなゴーレムがいる。

あれを撃破して入るというのは最初から却下。勝つことが無理なのは確実だし、戦闘など起こしたら大騒ぎになって人が集まってくる。そうっと入って、そおっと出て行きたいのだ。さて、どうすれば侵入できるだろう。

「窓はない、よな？」

「うん。ないね」

周りを廊下で囲まれており、出入りできる場所はドアだけ。そんな場所だから保管場所に選ばれたのだろう。用意に侵入されないよう、何か変化が起こっても対処できるよう、無生物であるゴーレムに守らせているのもそういう理由のはずだ。

「テト、小突かれてみない？ 死んだフリして痙攣けいれんしたら誰か呼びに行…… かないか。ゴーレムって、あそこを守れて命令されているなら動かないものだし」

「それ以前に、アレにちよつと小突かれただけで俺は死ぬぞ」

ごつつんとされただけで死ぬる自信があると、テト。それももっともな話なので、ルルはそうだよなと頷いた。そこまでの無茶をさせる気は、さつきまではちよつとあったが、今はない。

作戦を考えなくてはいけなくなった。ドアに鍵がかかっている可能性もある。鍵を持っているのは当然偉い人だろうし、合鍵がそのあたりの部屋に転がっているとも思えない。

ここまでが順調すぎたのだ。ルルは寄りかかっている壁に手を添えた。この向こう側に本があると言うのに、中に入ることが難しい。壁をさすっているルルを見て、テトも案をひねり出す。

「壁壊すか」

「どうやって？」

「……つるはしで」

「無理」

一瞬でダメ出しである。つるはしなど使おうものなら、音がして即座に人が来る。大体、持ち込めるわけもない。

「あのゴーレムを何とかしないと入れない。ドアには多分鍵……これは魔術でも使えないと潜入は無理じゃないか？」

テトの呟きに、ルルは眉間にしわを寄せた。魔術。

本を救い出すためには、部屋に入らないといけない。

魔術。魔術師。魔術師ギルド。屈強なゴーレム。

「……合言葉」

「は？」

「ゴーレムって合言葉に反応するの。合言葉が分かれば通してもら  
えるはず……作った魔術師が設定するから……このギルドの権威  
はリロンさんだったけど、あの人はゴーレム作成というよりは火属  
性の魔術の権威で……ここで一番ゴーレム作成ができる人って確か  
導師のアルジャーードさんのはずだから……ってことは彼に関する言  
葉が合言葉……」

ぶつくさと呟くルルを、テトが目丸くして凝視している。

「ルル？」

「え、何？」

「詳しいな」

「あ！こ、これは別にたいしたことないよつ？アーカイブスに  
来る前にいたところでちよつといういろあつてね！ギルドの関係  
者と仲良く……仲良く……まあ、あんまり聞かないでくれる……？」

「おおお、おう！聞かない！聞かないぞ！」

据わった目で不穏に呟くと、何かを感じ取ったのか、テトはあわ  
てた様子で頷いてくれた。あまり思い出さくない過去なので、説  
明するのも嫌なルルである。

「ええと、そういうわけで、合言葉。アルジャーードさんに関する  
言葉だと思うんだよね」

「そついうもんなのか？」

「多分。全く関係ない言葉を使うほうがマレ。関連性が高い言葉を  
連呼すれば、そのうち合言葉にひっかかるんじゃないかな」

「手当たり次第って言わないか、それ？」

的を得たテトの言葉だ。そもそも深い知人というわけでもないの  
で、アルジャーードに関連する言葉というものが彼には思いつかない  
のだ。

かといって、手当たり次第に単語を叫ぶと、合言葉に辿り着く前  
にギルドの人間に見つかりそうである。時間がかかりすぎる。

ルルは少しの間考えた。できることはある。しかし彼女にとって  
それはやりたくないことの筆頭でもあった。ここで悩んで時間の経

過を許せば、ギルドの誰かに見つかり、外に出される可能性が高くなる。そうになると、本の無実も証明できなくなり、話題の本を読むこともできなくなる。

彼女は決心した。

「テト、ちよつと目をつぶって耳を塞いでてくれる？」

「へ？」

「あたしゴーレムを説得してくるから」

「は？」

「いいから、目つぶって耳塞いでて。見たら今度から取り置きしてあげない」

「分かった、見ない！」

彼は即座にルルに背を向けて耳を塞いだ。ありがたく思いながら彼女はゴーレムのところに行く。テトに聞こえないように口の中で声を発した。

「テトー、もういいよ。入れるから、こっち来て」

……テトが彼女に呼ばれたのは、それからすぐのことだった。

目を開けて彼女の声がしたほうに振り返れば、ゴーレムが足音を立てて部屋の出入り口から離れていくのが見えた。

「なにやったんだ？」

足早に近寄ってくるテトに、ルルは苦笑いするしかない。今は本当のことを彼に説明する気はないのだ。

「説得、かな」

「ゴーレムに？」

「中入る」

「お、おう」

あつさりとテトの疑問を流してのけ、ルルはドアノブに手を伸ばす。鍵もすでに開錠してあった。どうやってやったのかは、やはり彼にはまだ内緒だ。

頭の周囲に？マークを飛ばしているテトを連れ、室内に入ってド

アを閉める。暗い部屋だったが、二人が入ると壁際の明かりがぼんやりと灯った。人の気配に反応する魔術がかかっている魔術具なのだろう。明かりに照らされて、部屋の中央に置かれたテーブルが浮かび上がる。その上に、ヒモでぐるぐる巻きにされた本が置かれていた。

これが問題の本か。

「ああ！　なんて酷いことを！　表紙が傷むじゃない！」

ルルが叫んで駆け寄る。恐れもなくヒモをほどき、念願の本を手にとった。

「さあ、ナゾの本ちゃん、あなたの無実はあたしが晴らしてあげるからね！」

やっと出会えた本の表紙を指で撫でる。そのとき、気がついた。本の装丁。見たことがあるような、ないような。覚えがあるような気がするが、見た覚えもない気がする。おかしい既視感に首をかしげて題名を確認しようとしたときだった。

『助けて………！』

すがるような声がして、閃光が視界を埋めた。

一章・新しい本見つけた！・5（後書き）

ようやくあらすじの部分まで辿り着いたような気がします……；



## 二章・誰もが想像するが実現はしないこと・1

思わず目をつぶったとき、手の中から本の感触が消えた。直後に、靴越しに伝わっていた床の固い感触も消える。

何が起こったのか。目を開けると、そこは七色の煙が漂う見たことのない空間だった。どう見ても魔術師ギルドの一室ではない。直前まで確かに魔道具で照らされた部屋の中にいたはずなのだ。

ルルはテトを見た。彼もちゃんと横にいる。テトからもルルの姿は見えているようで、ルルと同じように呆然としているのが伝わってくる。

お互いの姿は確かにある。ただ、立っている場所だけが先ほどとは違っていた。靴越しの感触も不確かで、地面に立っているかもあやふやな感じがする。

「状況把握！ テト、本物？」

「お？ お、おう！ ルルこそ本物か？」

「あたしはあたしだよ。で、ここ、どこだろうね？」

「俺が知るかよ……こっちこそ知りたいわ」

状況を把握したいが、どう会話をしたら理解できるのかが分からない。回りを見渡しても手の届くようなところには何も無いように見える。うつすらと輝く七色の煙は一体なんなのか。匂いも何もしないけれども、有毒ガスだったりしたら吸っているのはまずい気もしてきた。

「この煙、なにかな」

「なんだろうな。煙草とも違うよな。匂いしないし」

テトと二人で首をかしげていると、

『助けて……』

また、声がした。ルルはテトと顔を見合わせ、それから周りをもう一度見回す。声がしたおかげで、自分たち以外の何者かが確実に存在していることが分かったのだ。よく目を凝らすと、七色の煙の

奥に、うつすらと光を放つ何かが見える。

「テト」

ルルはその光をまっすぐに指差した。ジェスチャーとしては『行つてきて』である。

「俺かよ」

明確に理解したらしいテトはなんだか嫌そうな顔をしている。わけの分からない空間でわけの分からない光に近付くのは、たとえ命知らずの冒険者でもイヤなのだろう。もともと、ルルとてテト一人で行かせるつもりはない。

「心配しなくてもちゃんとついていくつて。あたしもこんなわけの分からないところで一人になりたくないもん」

彼女の言葉にテトは苦笑し、それでも前に立って歩いてくれた。何があっても即座に対応できるように、腰の剣には油断なく手をかけている。

ちゃんと歩いているのか不安だったが、徐々に光に近付いてはいいた。近づくに連れて、光がちかちらと明滅していることに気がついた。あまり強い光ではない。

『助けて……』

三度目の声。光から聞こえているような気もする。七色の煙漂う中、ゆつくりと光に近付き、二人は足を止めた。光自体は白く輝いている。魔術の光かと思ったが、それにしても声がするのはおかしい。光を作り出した魔術師が更に魔術を重ねている可能性もあるのだが。

「誰だ？ 助けてつて、どういう意味だ？」

テトが油断なく辺りを窺いながら問いかける。魔術師ギルドの中なのだ、イタズラで変な魔術を使う魔術師がいてもおかしくない。

光が返事をするかのように明滅する。

『私を、助けて……』

弱く、呟くように、光は訴えてきた。やはり光から声がしている。確信してルルは光に向かってテトと同じようなことを問いかけた。

「助けてって、どうして？ 何から？ あなたは誰？」

彼女の問いかけに、弱く声が返る。

『私は“ ” 遙か昔に書かれた、この本、そこに宿った精霊……』  
聞くなり、テトがルルに視線を向けた。受けたルルも同じ心境である。一部聞き取れなかった部分もあったが、そこは問題ではない。重要なのは、今いる場所だ。光が発した言葉から、想像できた事柄。

「ひよつとしてここ、本の中！？」

声を揃えて彼女と彼は光に身を乗り出した。

『はい、そうです……』

微かに答える声をかき消す勢いで、ルルはテトと手を取り合った。今さっきまでしていた警戒も吹き飛んでいる。

「うわあ、体験してるよ俺たち！ 本の中だぞルルっ！」

「本の中だよテト！ 嘘みたい！ 本の中に入るなんて、幻想絵巻や小説ではありがちだけど、実体験できるなんて！」

「いやったー！」

状況を把握するなり困惑を通り越して大感激している。たくさん本を読んでいるからこそ、展開的にはそこらへんに転がっているような物語だと思うが、実際に体験するとなると話は別である。

しかも、ルルもテトも重度の本マニア。本の中に入るなんて、夢想することはあっても実現することなどないと思っていたので、手を叩きあつて喜んだ。

『あの……いいのですか？』

むしろ困惑したのは光のほうらしい。そんなことを訊いてきた。

「え？」

何を訊かれたのかが分からず、ルルは思わず光を見返した。

『前に来た人たちは出してくれと騒いだものですから……いいのですか？』

「あ」

「おお！」

指摘されて始めて気がついた二人である。元の世界に戻る云々より先に喜んでしまった。

「そつえばそうだった。帰れるのか？」

「どうだろ？ あれ？ 『前に来た人たち』 って…… ひょっとして魔術師ギルドの人の事？」

「あ、行方不明になった人たちか？」

光が発した『前に来た人たち』という単語に、そういえば密室で行方不明になっている二人がいることを思い出す。もしかして、もしかすると。

『そうです。私が助けを求めました…… 最初の人が残念な結果になりましたが……』

最初の人。行方不明になって、大ヤケドで見つかり、未だに意識が戻らない魔術師か。その人も、この光に呼ばれて本の中にやってきたのか。

しかし、大ヤケドを負って発見されたのは何故なのか。

「どういうこと？ 最初の人は何で怪我したの？ ひょっとしてこの本の中ってすごく危険なの？」

助けを求めるくらいだ。何かが起こっているのは間違いないだろう。問題は、その『何か』がルルたちの手に負えるものかどうかだ。テトは冒険者で荒事の経験も豊富だが、ルルはただの古本屋の店員。テトと違って剣も鎧も身に着けてはいない。つけているのは古本屋の制服のエプロンぐらいのものだ。大ヤケドを負うぐらいの荒事に向いている、とはとてもじゃないが言えない格好である。

説明を求める彼女の声に、光はちか、ちかりと光って話し始めた。

『この本は、恐ろしい怪物に喰われつつあるのです。怪物の名は『文字喰い』。古い本に取り付いて文字を喰らい、本をボロボロに腐食させてしまうのです。私と一緒に置いてあった本たちは年月で傷んだではありません。文字喰いに喰われてしまったのです。そうして、今、私の中に文字喰いが巣食っています。私はこのままでは

喰われ、ボロボロになってしまおうでしょう。そうならば私に蓄えられた知識が全て消えてしまいます。

私は本の精霊です。人に読まれることを望んでいます。読まれないまま朽ちるのは嫌なのです。それに、私が喰われれば文字喰いは他の本や書物に移ります。ここにはたくさんの書物の気配なかまがあります。文字が書かれたものがあるでしょう。文字喰いは嬉々として他に移るはずです。犠牲になるのは私だけではありません。なんとしても文字喰いを倒したいのです。そのためには、人の力が必要なのです。私には戦う力がありません。ホンを傷まないように保つ力しかないのです。強い人ならば文字喰いを倒してくれると信じ、呼びかけていました。

お願いです、文字喰いを倒してください。私を、書物なかまたちを助けてください……」

静かに語り、光は明滅している。

「……精霊さん」

ルルは真顔で言い放った。

「ウチの店来ない？ 本を傷まないようにする力があるんだよね？ あ、うち古本屋なんだけど。お仲間いっぱいいるよ。気が進まないならあたしの部屋でもいいし。うち、本溢れてるから」

「違っだろ！」

テトが声を上げた。

「俺だつて欲しい！ 俺の泊まってる宿にも来てくれないか！？ 量はないけど、質は負けないぞ！」

「え、テトずるい！ あたしが先でしょ！」

論点がずれていることに気がついたのは、またしても光に言われてからだった。

『あのう……そうではなくて……文字喰いを何とかしていただきたいのですが』

ためらいがちに言われ、そうだった、とルルは頷く。

本を喰らう怪物。そんなものを野放しにしておけない。本を愛し、大切にする者として断固として許すわけにはいかない。いつ『古書の家』が狙われるか、自分たちの本が狙われるか分からないのだ。これから出会うだろう面白い本を狙われるのも困る。

「まかして！ テトが頑張るから！」

「俺か！」

「だってあたし戦えないし」

「……だよな。俺だよな」

冒険者でもないルルに、怪物と闘えと言うのは無理な話だと分かっているようで、テトは力ない笑みを浮かべただけで、反論してこなかった。

「応援するから」

「あー、はい。危なくないところで応援しててくれ」

苦笑する彼に笑顔を返しておいて、ルルは光に向き直った。

「そういうわけで協力します。それで、具体的にはどうすればいいの？」

この七色の煙に包まれた空間のどこかに文字喰いがいるのだろうか。

『はい。文字喰いを倒してください。ヤツはこの本のどこかに潜んでいます。何処にいるかまでは私には感知できません。近付けば喰われてしまうのです。ヤツにとって私は邪魔な存在であり、しかも食事と変わらないのです……』

文字喰いの居場所に関しては、精霊に頼れないらしい。説明を聞いてテトは眉を寄せている。

「とにかく文字喰いを倒せばいいのか？ そうしたらここから出られる？」

『はい。ですが、気をつけてください。本の中の世界とはいえ、あなたがたは生身の人間です。怪我をしますし、意識をなくしたり、死んでしまったりしたら放り出されます……私はあなたたちの意識を思念で繋いで実体ごとこの世界に繋ぎとめていきますから、あなた

たちが気を失ったりすると接点がなくなり、問答無用でこの中から放り出されるのです」

「わー、怪我するんだ」

「あー、それでか、最初の魔術師が大ヤケドで見つかったのは」

本の中でケガをして、意識を失ったために放り出されたのだらう。幸い見つかったのが早かったので命の危険はなかったことを思い出した。しかし、未だに意識が戻らないということはよほどのダメージを受けたのか。魔法治療をした後でも意識が戻らないのはよほどだ。うわごとが海産物だったというのが心の底からのナゾだが、それが何らかのトラウマになっていて意識が戻らないのかもしれない。『それから、もうひとつ。魔術が使えるのなら気をつけてください。本に悪影響を及ぼすような魔術は全て外に放出されます。本を傷ませないように』

「あ、それは問題ない。俺、魔術使えないから。ルルも一般人だしな？」

「う、うん。問題ない、かな」

ルルは背中に汗を感じながら頷いた。

二章・誰もが想像するが実現はしないこと・1（後書き）

本マニア、おのれの欲望に正直すぎw



## 二章・誰もが想像するが実現はしないこと・2

「魔術が外に放出される、か……だから本が置いてあった部屋が凍ったり焼けたりしてたんだな」

「そ、そうだね」

何せ中に引き込まれたのが魔術師だ。魔術を使うエキスパートが、戦う術を無効化すべされると言うのはつらいだろう。はつきり言って、魔術を封じられた魔術師は役立たずだ。ごくマレに武器を持って戦うことが出来るエリートもいるが、そんな存在は本当にマレである。

「テト、頑張つてね」

「あー、まあ、頑張る」

おざなりな返答に聞こえるが、テトはやる気満々だ。瞳が輝いているのでよく分かる。彼の意気込みも分かるので、ルルは何も言わなかった。本を救うのは、二人にとって既に義務なのだ。

「あ、ところで文字喰いのいる場所って見当つかないの？ この本のどこかって言っていたけど」

「おそらく、話が進めばどこかに出現するかと思われます……ですから、本を読み進めるように進んでください。どこかで出会うと思います……」

精霊にも文字喰いがどこら辺にいるのかは感知できないようだ。近付けば食われるのだから当然といえば当然か。

ひたすら進んで、どこかで出会うのを待つしかないようである。

「そつか。本を読むようにね。そういえばこの本結構分厚かったと思うんだけど、総ページ何枚？」

ルルは、本を手にとったときのずしりと重い感触を覚えている。

精霊はキツパリと答えてくれた。

『三百枚ほどです』

「「分厚っ！」」

思わず叫んだ声にはテトの叫びも重なった。おそらく、同じこと

を考えている。

戻るまでどのくらいの日数がかかるのか、と。

「あたし明日も仕事があるのに……」

「文字喰いに会うまでにどのくらいかかるんだ……」

頭を抱えなくなっただが、抱えてもどうにもならない。それでも念のために聞いてみた。

「ねえ、精霊さん、一応確認しておくけど、あなたの力では戻せないの？ あたしたちを呼んだんだから、帰すこともできるんじゃないの？」

『すいません……文字喰いに巢食われる前ならばお帰しすることもできたのですが、ヤツがいる以上、私には人を引き込むのがやっとなのです……』

呼び込むことはできるが、文字喰いの力が邪魔をしていて帰すことはできないとのこと。一方通行なのだ。現実世界に帰るためには文字喰いを倒すか、気絶するか死ぬしかない。強引な究極の選択である。

ケガなどで気絶もしたくないし、無論のこと死にたくもないので、ルルたちが選べるのは文字喰いを倒す道だけだ。

「テト！ 頑張って！」

ルルは先ほどの応援とはうって変わって真剣に叫んだ。一刻も早く文字喰いを倒して元の世界に戻らなくては、明日の仕事に差し支える。仕事に差し支えるということは、給料に響き、果ては生活できなくなる。実家から遠くはなれて暮らすルルには死活問題だ。もちろんテトにとってもそうだが、彼は本を売り払った金でフトコ口が暖かいので、ルルよりは差し迫っていない。

「はいはい。じゃ、行くぞ」

『お願いします……お氣をつけて』

煙が引いていくにつれ、精霊の光も遠くなっていく。いざ本の世界、と言ったところか。プロローグが終わり、ここから本編が始まると考えると正しいかもしれない。

「……なあ」

煙が引いていくのを眺めていると、テトが声をかけてきた。

「これ、こういう内容の本だったりしてな」

「え。ああ、文字喰いって言う怪物を倒すお話ってこと？」

「そうそう。だったらさ、ありがちだよな。幻想絵巻でも良くあるだろ、怪物退治の話って」

「そうだね。本としては内容浅いね、確かに」

たくさんの本を読んでいるだけに、辛口批評である。読めば読むほどに似た内容の本を見るとがっかりしてしまうのは、性<sup>さが</sup>だろうか。「斬新な物語じゃないよな。誰が書いたんだろ、この本。俺としては、もう少し頑張りましょうって感じだ」

「でも、物語じゃないよ。ケガするし、死ぬかもしれないし。実際一人大ケガしてるから。本のせいって言うか、そうじゃないって言うかは難しいところだけど」

思い出すのはケガをした魔術師。強引に引つ張り込まれ、あげく魔術を無効化され、結局ケガをして放り出された人に、心の中で同情の祈りを捧げていると、視界が急変した。

場面転換をしたようで、二人は草原のような場所に立っている。

景色はまだ揺らいでいて安定しておらず、じっくり見ると草の判別もつかなかった。『緑色の草のような何か』にしか見えない。

「さ、俺たちも頑張るか」

「うん。文字喰い退治して、ちゃんと帰らないといけないね。あたしがいないと店長泣くことになりそうだから」

マイヤーひとりであの膨大な書物の管理は難しいだろう。まして、ルルがいなければ買い取りに出かけることも満足にできない。彼女が来るまでは奥さんが手伝っていたのだが、奥さんは本のことに詳しくないので接客が難しいし、娘たちはそもそも古本屋に関心が無い。ここ一トーム、あの店はマイヤーが買い取りに行き、ルルの接客で運営されているようなものだった。

「だな。俺が手伝わないと、マイヤーさん寂しいだろうし」

「本目当てでしょ。たまに店長の持つてる珍しい本借りてるの、知ってるよ」

「ななな、なんのことかな」

動揺するテトに、さらに追求をしてやろうかと口を開いたルルの視界の端に、何かが映った。気を取られてそっちに視線を向けると、揺らいでいた景色が固定されており、何かの入り口らしい門のような建築物が見える。門の両脇からは高く厚い壁が続いており、街なのかどうかまではちよつと判別できなかった。

「あそこに行けばいいのかな？」

「行ってみないと話進まないよな、きつと」

物語の始まりはいつも行動からだ。テトはルルを守ろうと思ってくれているのか、彼女の先に立って歩き出そうとし……ふと止まる。「どしたの？」

「いや……」

呟いて、彼は自分の体を見直し、それからルルを見つめた。

「ど、どしたの？」

「いやほら、格好変わってないなと思って」

「え」

「お約束で、格好も話に適した装備とか服に変わるかなーっと思っただ」

「ああ、なるほど」

言われて確かにと納得した。異世界に迷い込むと言う話も、それなりに読んだことがある。

「でも、そのままっていう話もあるよ。ほら『異世界に迷い込んだ』感を出すために」

「そっちもアリか。ま、使い慣れた武器のほうがいいし」

「そうだよ。文字喰いと戦うんだから、へんな武器よりいつもの自分の剣のほうがいいでしょ」

「でも、どんな武器とか売ってるか、ちよつと気にならないか？」

「……ここが街で、中で売ってたら見てみればいいじゃない」

「そうか。そうだな」

楽しむ気でんこ盛りで門に歩み寄った。二人が門につくなり、音を立てて勝手に開いていく。開いた門の奥には小さな家屋が連なっているのが見えた。その奥には巨大なお城が見え、通りにはちらほらと人が歩いているのも見える。ここは王城の城下町らしい。ちなみに、門を動かしているような人影はない。

「自動？」

「ということは、魔道式？ 原動力に魔石使ってる？ あたしたちの世界と変わらないね、それじゃ」

ルルは背伸びをして門の周りを見てみたが、魔石が内蔵されているのならば、当然こんなところからでは確認できない。

「つまんねえ！ もっと違う感じが良かった！」

テトは文句を言っている。ルルもちよつとだけ同感だった。せつかく本の中の世界に入り込んだというのに、現実世界とまるきり同じ構造なら確かにつまらない。どうせなら、全く違う世界を味わいたい。

異世界に来た不安より、期待と楽しみの方が大きいのだ。本の中なので浮かれているのだろう。

「中は違つかもしれないよ」

「よし、行こう」

ルルの指摘に、テトは即座に頷いた。門を通り、中に入る。見た感じではアーカイブスほどではないにせよ、そこそこに大きな町のようなのに、活気は薄かった。

町の中央らしい場所には露店がいくつか出ていたが、そこもやはり活気はない。人の姿は見えるが、誰も元気がないのだ。うつむき、悩みの深そうな表情で歩いている。

これは何かあるに違いない。文字喰いに関係したのかもしいので、ルルは露店店主のひとりに声をかけてみた。

「すいません、あの、この町で何かあったんですか？ みんな元気がないようなんですけど」

「ああ、悪いドラゴンがこの国のお姫様をさらってしまったんだ。この国は今、悲しみの最中なのさ」

ルルたちの素性も聞かずに、聞かれたらこう答えると決められているかのように、店主はすらすらと答えてくれた。そうして、言うことは言ったといわんばかりに仕事に戻る。

「……これはアレだ。城に行くと姫を助けてくれって言われるぞ、きつと」

「アレね。勇者よ、よくぞ参ったとか言われて、ドラゴンを倒してくれたら姫と結婚させてやるとかいうタイプね」

「幻想絵巻の定番だよな」

「うん。王道」

子供向けの絵巻物でよくある物語の一例だ。物語の始まりは、大抵お城からなので、これもそうなのではないかと予想して、とりあえず城に向かってみることにした。目立つ建物なので迷うこともない。取り留めのない話をしながら歩く。

「ああいう話ってさ、助けてくれっていうわりに援助しないよな。」

姫を連れさられて困ってるんだろ？ 普通はできる限りの援助をするもんじゃないか？

「そうだね。国の軍隊出したりしないもんね。貧乏なのかも」

「貧乏……身にしてみる言葉だ……」

赤貧冒険者がしみじみと呟いたあたりで城に着いた。大きな城門の左右に、槍を持ち、鎧を身にまとった、これぞ衛兵というような人間が立っている。常識的に考えて、一般市民が王族にいきなり面会を求めて通るはずもないし、簡単に王城に入れるわけもない。少なくとも、ルルたちの世界ではそうだ。

それでも、話しかけないと進まないだろうと見越し、声をかけてみる。

「あのう、ドラゴンにお姫様がさらわれたと聞いて、何かお力にならないかと思ってまいりました。王様に謁見願えますか？」

エプロン姿の街娘が王に謁見を願い出るなど、平和なコルトロー

グでもありえない申し出だ。まして、剣を下げた冒険者が横にいる。どう考えても一笑に付されるだろう。

普通なら。

「おお！ 腕に自信がありが！ 少々待たれよ！」

しかし、物語の中では通るようである。衛兵の一人が走って城内に消えていき、もう一人に待つようにと促された。

「……大抵、アッサリ面会できるんだよな」

「まあ、ドラゴン退治できる勇者と思われるんじゃない？」

「無理。いくらなんでも俺一人じゃ無理だ」

「うーん。でもほら、あたしたちの世界のドラゴンとは違うかもしれないよ」

ルルたちの世界にもドラゴンはある。火を吹いたり氷を吐いたり、種によっていろいろと違うが、どれにしたってたった一人で立ち向かえる相手ではない。

「ドラゴンはドラゴンだろ。どんな話だって強敵だぞ」

どこのどんな物語でも、ドラゴンが一番弱い敵だったなんて聞いた事はない。大概一番の強敵だ。テトの言い分ももつともなので、ルルは曖昧に笑っただけだった。

もし戦闘になっても、彼女は役にはたてないだろうから。

そのうち、衛兵が顔を輝かせて戻ってきた。

「お待たせいたしました。王がお会いになられるそうです。こちらへどうぞ。ご案内いたします」

重要人物扱いである。百歩ゆずってテトが百戦錬磨の勇者に見えたとしても、ルルは町娘以外の何者でもない。

「ワラにもすがるって気分なのかも」

小さく声に出すと、横でテトが笑みを浮かべた。広い廊下を歩き、イメージする王城の謁見の間そのものといった場所に出ると、部屋の両脇にはずらりと兵士が並び、少し高い場所の大きな椅子に、王冠をかぶり、立派な口ひげとあごひげをたくわえ、赤いマントを羽織っている初老の男性が座っていた。

## 二章・誰もが想像するが実現はしないこと・2（後書き）

お姫様救出なお話になるのか！？（ヒネリがないぞー）



## 二章・誰もが想像するが実現はしないこと・3

隣の椅子には着飾った若い女性が座っている。ルルは見るなり横のテトに囁いた。

「姫が若くて可愛くても、絵巻の王様って初老だよ。絶対口ひげとあごひげで、赤い服かマント着てるし」

「謎だ。あと、王妃は何故か若いよな」

王の横の椅子に座っている女性はおそらく王妃だろう。確かに若くて美しい。王に比べると、年の二十は違っているのではないかと感じるくらいだ。ヘタをすると、娘の姫と変わらないくらいに見えるのではないだろうか。

「後妻？ あと、可能性としては……連れ子」

「昔話か？ 『リンゴ姫』とかの」

子供るときによく聞いた、継母からもらったリンゴを食べて眠りに落ち、素敵な王子様のキスで起きて、めでたし、めでたし、な話をたとえに出し、テトは苦笑している。

「聞いてみようか、後妻ですかっ」

「多分答えてもらえないんじゃないか？」

そんな会話を小さく交わしていても、謁見の間の誰もが不審に思っている様子はない。王も平然と声をかけてきた。

「よくぞ参った、勇者よ！」

「お約束なセリフ出たぞ」

「しい」

「姫が悪しきドラゴンにさらわれて、はやーアーク（＝一週間）！ わしと王妃は夜も眠れぬ毎日を過ごしておる。どうか、どうか姫を救い出してもらえぬか！ 褒美ならば何でもやろう！ 姫と結婚したいと言つのならばかなえよう！ だからどうか娘を救い出してくれ！」

眠れない毎日を過ごしているらしい王様は、ふくふくつやつやの

血色よろしい顔を二人に必死で向けている。言葉と声音と表情は切羽詰っているのだが、顔色はとても良かった。

子供向けの絵巻なのかもしれない。顔色悪く恐ろしい形相の王様を表現したら、それだけで幼い子供なら泣くだろう。

「あ、はい。分かりました。尽力いたします」

さらっとテトは引き受けた。彼はおそらくこの場面を導入部だと思っているのだ。対応にも抵抗がない。

「そうか！　引き受けてくれるか！　悪しきドラゴンは北の山奥に潜んでいる！　どうか姫を頼むぞ！」

「はい」

力の抜け切った返答だったが、王は気にしていなかった。そのまま謁見の間を辞し、二人は長い廊下を門に向かって歩く。王の態度を思い出して、ルルは乾いた微笑を浮かべた。

「褒美ならなんでも、姫と結婚したいならさせる、かあ。絵巻の王様、ギャンブラーだよ。普通の父親ならこの馬の骨とも分らない男に『娘と結婚させてやる』なんて言わないよね。あと、ドラゴンから助けて勇者に嫁に出すって、なんか矛盾してない？　姫、厄介払い？　いき遅れだったとか？」

「俺はドラゴンがなんで姫をさらうのが気になる。喰うわけでもないし、ドラゴンが嫁にするわけでもないのに、さらう理由が分からない」

「それはね、悪者の王道だから。お姫様はさらっておかないと」

「おお、なるほど……って納得していいのか、それ」

城の外に出、城下町を歩きながら、二人は楽しそうに会話を続けた。

「ドラゴンのいる場所分かってるなら、軍隊を組織して退治すりゃいいのにな」

「軍隊動かしたら国費がかかっちゃうでしょ。そうなると国民に増税を強いることになるから、娘の命より税金なのかも。国庫を枯らしたくない、とか。ただ単にケチだったりするかもしれないし」

「……絵巻の世界なのにそう考えると泣けてくるな。何一つ幻想的じゃないぞ。むしろ夢がない。世知辛い」

「あ、でも貧乏な国の可能性もあるよ。娘を助けにも行けないくらい」

「城、立派だったぞ」

「……そうだね」

城は立派だったし、歩いている人たちも身なりはいい。国の財政が悪いとは思えない。絵巻の王様、実はケチ説が有力かもしれない。露店を通り過ぎて、ちゃんとした商店が並んでいる区画に出た。どんな商品が売られているのか覗いてみたくて何件か覗いてみたが、一様に住民の表情が暗く、かえって気が重くなった。テトが見る限りさほどいい武器なども扱っていなかったようだ。彼が持っている剣のほうがよほど上物だったらしい。

そもそも、通貨が違っていた。リンではない。手持ちのリンでは買い物すらままならないことに気がついて、二人は苦笑いをして店を出ることになった。姫が心配して夜も眠れないといった王様は、援助の『え』の字も言い出さなかったのだ。

「あれって、期待してないって取れるよな」

「あたしたち、どうせ途中で倒れるだろうって思われてる？」

「世知辛い」

「そう考えると、お姫様のことも実はどうでもいいのかなーとか思っちゃうね」

「夢がないぞー」

反・幻想物語的な会話をしながら、城下町からも出る。たいした準備もできなかったが、先立つものがないので仕方ない。

目指すは北。悪いドラゴンの住む山である。

「悪者って、大抵北にいるよな。何でだ？」

「そういえば、今まで読んだ本の中で、南にいる悪者って見たことないかも」

ルルは想像してみた。南国の光溢れる開放的な海辺で、お姫様と

戯れている悪いドラゴン……どうひっくり返しても悪役には思えない光景になる。北の、寒く厳しい環境で立てこもっている方が悪役っぽいことは間違いない。悪役にはイメージが大事だと、彼女は痛感した。

たまに湧いて出てくる小さな怪物をテトに小突き倒してもらい、北へ向かう。やはり架空の物語の中だろうか、怪物は見たこともないものが多かった。気絶するようなことにもならず、かすり傷すら負わなかったテトである。彼が強いのか、怪物が弱いのか……おそらくは双方だろうとルルは思った。貧乏くさそうに見えてもテトは結構強いのだ。珍しい怪物が多かったので、見物気分で戦闘を重ねていたが、それも回数を重ねると飽きてきた。

そろそろ何か新しい展開が欲しいと思い始めた頃、ちょうど良く村が見えてきた。計ったかのようなのである。

休憩もかねて、寄ってみることにした。どうやら農村のようで、家畜が放牧されているのが窺える。

「あ、あなたたち！」

ところが、村に入るなり近くにいた住民らしき人物に驚かれた。

「外を歩いてきたのか！？」

「え、そうですけど」

徒歩で来ることがそれほど珍しいことなのだろうか、きよんとするルルに、住民は感心したようだった。

「悪い魔法使いが魔物を強くしているのに、よく歩いてこれたな！  
よっぽど強いんだな、あなたたち！」

「は？」

先に聞いたドラゴンだけでなく、魔法使いとやらもいるのか。

「え、ええと。どういうことが教えてもらえます？ あたしたち、この辺りには不慣れなもので」

実際にはこの辺りではなくこの世界そのものに不慣れなのだが、そこまで説明しなくてもいいだろう。

「なんだ、知らないで歩いてたのか？　よく無事でいられたなあ。いや、おれもそんなに詳しいことは知らないから、村長に聞いたほうがいいだろう。村長の家は村で一番大きな家だよ、ほら、あそこに見えているのがそうだ」

指をさして教えてくれたほうには、確かに大きな家がある。しかし、意味深なことを口にしておきながら『詳しいことは知らない』というのも不思議なものだ。もっとも、重大なことを説明するのは王様、領主、村長……その地区で一番偉い人、というのもお約束である。会話をしていると、ルルの腕をテトがつついた。こそつと囁いてくる。

「なあ、ドラゴン退治の話じゃないのか、これ？」

「あたしも単純な退治話だと思ってたんだけど……とにかく行ってみよ？」

住民に礼を言つて別れ、村長の家に向かってみることにした。幻想絵巻の王道、ドラゴン退治だけではないのかもしれない。ひよつとしたら、数々の困難を乗り越えてドラゴンまで辿りつく話なのか。そうだとすれば、これはまだまだ序盤の序盤だろう。

文字喰いに辿り着くまで一体どのくらいの時間がかかるのか、予想もできなくなってきた。

教えられた家は、見えていたくらい近かったのですぐついた。ドアをノックしようと手を上げたとき、ちょうどドアが開く。

「あ」

中から出てきた人物を危うく叩くところだったので、ルルはあわてて手を引いた。

「ご、ごめんなさい！」

「いえ、大丈夫です……よ！？」

大丈夫と口にした人物は、ルルを見て驚いたようで、硬直している。魔術師風の青年だった。長い黒髪に黒い瞳の落ち着いた雰囲気。青年である。テトとルルより年上だろう。彼の背後で、銀髪に緑の瞳の、どこことなく小動物を連想させる魔術師風の少年が、こちら

も目を見開いている。少年のほうはルルより年下に見えた。彼らの視線はルルとテトの全身を眺めている。どこか汚れてもしているのだろうか、一瞬不安になったルルの手を、青年がつかんだ。

「あの！　もしかして！」

「はは、はい！？」

勢いに押され、ルルは身を引く。なんだか怖い。

「あなたたちも本の精霊に引き込まれたではありませんか！？」

「え」

本の精霊。その単語にルルはハツとする。精霊の存在を知っているということは、本の中の住民ではないはず。彼らが二人を眺めていたのは、農村らしいこの村の住民には見えない服装だったからだろう。

思い出してみれば、魔術師が二人行方不明になっていた。もしかして彼らは当人か。確認したいが、村長の家のドアを塞ぐのも常識としてまずいので、そのまま場所を家の脇にずらし、改めて問いかける。

「ええと、あの、あなたたち、魔術師ギルドの人ですか？」

「そうです！」

長髪の青年が声を上げる。彼の隣で少年も首をネンザしそうな勢いで頷いていた。やはり当人なのだ。本の研究をしようとして姿を消した魔術師。

「良かった、助けが来た！」

少年がテトを見て嬉しそうに声を出す。

「いや、助けていうか……」

せつかくの喜びように水を差すのも悪いが、テトたちは助けの手ではない。彼らの同類だ。

「あたしたちも引つ張り込まれたんです。出るには文字喰いって怪物倒さないといけないって、説明されませんでした？」

小首を傾げて問うと、魔術師二人は肩を落とした。

「聞いています……」

「でも、ぼくらは魔術師だから……」

うなだれる彼らの状況を察し、ルルは苦笑した。魔術師が本領を發揮できないこの世界で、彼らが無事に脱出できる可能性は低い。本の精霊も引き込む相手を選べばいいものを、とも思ったが、本が置かれていたのが魔術師ギルドだったのだから、仕方がないといえは仕方がない。

「今までよく無事でいられたね」

見たところ、二人ともケガはなさそうだ。

「逃げ回っていましたから」

青年はキツパリと言いつつ、命に代えられないので正しい選択だろう。

二章・誰もが想像するが実現はしないこと・3（後書き）

ツッコミ開始（笑）そして行方不明の二人を発見。



## 二章・誰もが想像するが実現はしないこと・4

「あの、お二人はどうやってここまで？」

「あ、こつちの彼が戦士なので、頑張ってもらいました」

何セルルは町娘。戦えるような武器など何も持っていないし、戦闘技術も持っていない。

「頑張った。でもそんなに強い怪物はいなかったぞ。頑張ればあんなたちでもどうにかできるだろ」

テトの言葉は確かに真実だ。それでも魔術師二人には辛い言葉だったようで、青年の方が重い声音で言ってきた。

「ご一緒させていただけませんか。私たちだけではとても脱出できそうにありませんので」

「置いてかないでほしいな……ぼくら、怪物と戦う自信ないよ」

テトは困ったように頭をかき、ルルのほうを見てきた。どうする？ と目が語っている。置いて行くのは寝覚めが悪くなりそうで気が引けるのだろう。ルルとしても置いていくのはかわいそうな気がする。

しかし、魔術師。この世界ではものの役にも立たない。結局頑張るのはテトになる。

「テト、どうしたい？」

「んー」

もう一度頭をかいで、彼は魔術師二人に視線を向けた。

「魔術以外に何かできるか？」

「いえ、特には……私はもっぱら研究一辺倒ですから」

「……できない。だってギルドに入っただばかりだし」

魔術しかできない、らしい。

「……なんか武器振り回すくらいは、させるぞ」

テトは半眼でそう告げた。戦士、魔術師、魔術師、町娘（論外）……バランスが悪いにもほどがある。ルルは苦笑した。これではテ

トばかりが苦勞することになる。せめてもう一人くらい武器を持って戦ってくれる人間が欲しいと思うのは、決して贅沢ではないはずだ。

「う、はい」

「が、頑張るよ」

魔術師二人はひきつりつつ、頷いた。断ると置いていかれると感じたのかもしれない。

同行者が二人増えたが、自己紹介もしていなかったことを思い出し、改めて名乗りあう。

「私はニズ・ミングウェイといいます」

「ぼくはオルト・トリングスだよ」

青年はニズ・ミングウェイ、少年はオルト・トリングスと名乗った。ニズのほうは序導師、オルトはまだ見習い魔術師だという。どちらも冒険に出た経験はほとんどなく、当然武器を持ったこともないらしい。

「あたしはルル・ホートントで、こっちはテト・ペタヘイト」

「よろしく」

「よろしくお願いします」

挨拶をかわして、それからニズはルルに視線を向けた。

「あの、どこかでお会いしたことがないでしょうか？ ルルさんのお名前に聞き覚えがあるような気がするのですが」

「え！ な、ないと思うけどっ？」

焦りながらもルルはそう返した。彼女とニズに面識はない、はずだ。ニズは少し考え込んでいたが、思い当たらなかったのか、ルルに関する話はそこで終わった。

とりあえず、何か武器を手に入れないてはならないのだが、通貨を持っていないのでルルたちは買い物もできない。

ところが、ニズはこの世界の通貨を持っていた。そう大金ではないようだったが。

「どこで稼いだんだ？」

「稼いだのではないのですよ。村長から依頼を受けたら、前金をくれたのです」

「依頼？」

テトの疑問に、ニズは暗い表情で答えた。

「悪い魔法使いを退治してくれと頼まれましたね」

さきほど住民に聞いた悪い魔法使いとやらが、ここに出てきた。

「退治……『魔法』使いを？」

ルルは心底から疑問を感じていた。住民から聞いたときも感じていたことだが、ルルたちの世界では『魔法』というものは『魔術』のように攻撃的なものではない。医療をかねた治癒術だ。したがって、魔法という単語から連想するのは、人畜無害な印象でしかない。魔法師というのは、医師でもあるのだ。悪い魔法使いといわれても、どうにも実感できないのである。

「あ、この世界の魔法使いというのは我々のところの魔法師とは違うようですよ。どちらかというと、魔術師と同位と考えた方がいいのでは」

「ちなみに、ぼくらの世界での魔法師をこっちでは僧侶って呼ぶみたいだよ」

ルルたちより若干先にこちらに来ていたので、ニズとオルトは少しだけ情報を持っているらしい。ルルは頷いた。

「世界が違つと形容も違つてくる……面白いよね、テト！ やつと違つと場所が見られたよ！」

「そーだな！」

「何で喜ぶの……？」

オルトの声はとりあえず無視して、話題は悪い魔法使い退治のところに戻る。

「村長からの要請でしたが、私たちではどうにもならないと思いついて、一旦断ろうとしたのですよ。しかし、何度断つても話が戻るのです。引き受けるまで延々と続けましたよ……」

繰り返される会話でとても疲れたとニズは言う。オルトもうんざ

りした表情で頷いていた。

「ひよつとして、本の中だから『断る』って選択肢がない、のかも」  
ふと気がついてルルは言う。一般的な本の中には選択肢などない。  
話が決まっについて、最初から最後までそのまま続くのだ。

「あー、じゃあ、俺たちも城で断ってたら、王様に延々と同じ話されたのか？」

「そうかもね」

あのときは何も考えずに即座に引き受けてしまった。やっぱりで  
きませんと答えていたらどうなったのか、今更ながらにちよつと惜  
しい。テトも同じ考えらしく、残念そうに唸っている。そこへ、

「あの、城ってなに？」

オルトが不思議そうに言ってきた。ルルは首を傾げて問い返す。

「お城、あつたでしょ？」

「え、どこに？」

互いに首をかしげた。かみ合わない会話に、疑問が湧く。

「ひよつとして、ニズさんとオルトくん、お城に行つてないの？」

「城なんてあつたのですか？ 私たちはこの村の近くの草原に現れ  
て、それからしばらく怪物に追いつけ回されて、逃げ回っているう  
ちに村に辿り着いたので」

出発地点がルルたちとは違うようだ。魔術師にはかなり過酷な出  
だだったのではないだろうか。

「変ね。話の出だしが違つて、おかしくない？ あたしたちはお  
城の近くに出て、さらわれたお姫様を助け出すためにドラゴンを倒  
してくれて、王様に頼まれたの」

「ドラゴン！？ 本気で戦う気！？」

オルトは真剣に怖気づいているようだ。確かに強敵である。ルル  
たちの世界でも怪物の王とまで称される存在なのだ。

「いや、でも俺たちの目的は文字喰いだろ。無理に戦うこともない  
よな」

「うん。このメンバーでは絶対無理だと思うし」

戦士と魔術師二人に町娘。これでドラゴンに挑むなど、はつきりと正気の沙汰ではない。

「それより重大なのは、この本、なんだか変だよね。ドラゴン退治に魔法使い退治でしょ。あたしは最初にドラゴン退治を受けてから、違う事件に巻き込まれて、解決していくうちにドラゴンまで辿り着くのかなって思っていたんだけど、ニズさんたち、最初の地点からあたしたちと違うし」

「ですね。おかしいです。始まりがひとつではないということでしょうか？」

そんな本、ありえない。少なくともルルは読んだことがない。

「うわ、この本どんな内容なんだ？　すげえ読んでみたい！」

「絶対文字喰いやっつけて帰って、この本読もうね！」

「おう！」

今まで見たこともない本に出会ったようだ。これはなんとしてでも無事に帰って本を読まなくては。

「あの、何故嬉しそうなのですか。ここは怪しむところでは？」

「なに言ってるんだ？　面白いところだろ！」

「そう、喜ぶところなの！」

面白そうな本に出会ったのだから、喜ばうという理屈。本マニアのルルとテトにしか通じない理屈だろう。現に、ニズとオルトは理解できないといった様子で困惑している。

マニアと常人の間には、深く流れる早い川のようなミゾがあるのだ。

「……それはともかく、これからどうしたらいいでしょうか？」

「うん。帰りたいよ……無事に」

魔術師コンビの声は元気がない。同僚が大ケガをして放り出されたのを知っているのだから、余計に怖いのだろう。

「とりあえず、武器だな。あとは……どっちがいいか」

武器を購入してから、ドラゴン退治に赴くか魔法使い退治に出かけるか。相手をするならどっちがマシか。

「それ、選択しなくても魔法使いでしょ」

ルルはあっけらかんと断言した。ドラゴンとは化け物だが、魔法使いは人間だろう。ドラゴンの方に文字喰いがあると限ったわけでもないし、魔法使い退治に行ってもいいはずだ。

魔法使いがいる場所も魔術師コンビが知っていた。村長は丁寧に説明してくれたらしい。

「場所が分かってるならさあ……」

「うん、テト、言いたいことは分かっているから」

勇士を募るなり大きな町に退治を頼むなりできたのでは、という話は置いて、村の雑貨屋に魔術師コンビの武器を探しに行ってみた。不慣れな武器に戸惑いながら、ニズは鉄の槍、オルトはトゲ鉄球つきのモーニングスターを選んだ。二人とも重さによるめいており、どう見ても不安だが、ないよりはマシだ。不慣れなのにモーニングスターなどというテクニクの要る武器を選んだオルトは、撲殺武器だときいて青くなっていた。あまり深く考えずに、当たったら痛そうだからという理由で選んだらしい。

「基本的には俺が前に出るから、俺に当てないように気をつけてくれ。くれつぐれも！俺に当てないように！」

テトが強く念を押すのも無理はないことだろう。この分では誰もあてにはできないと考えているかもしれない。実際その通りなのでルルは苦笑しただけだった。

「ルルさんは何も買わないの？」

「ルルはいいんだよ。前に出てケガでもさせたら大変だろ」

「女性びいきですね、テトくん。それともルルさんだからですか？」

「ルルがケガしたら後で困る！」

「あ、ひょっとして二人って付き合ってる？恋人だったんだ」

「違う！俺のなじみの店の店員がルルなんだ！」

「出会いはそれですか。いやあ、青春ですねえ」

「違うってえの！」

……男たちの会話がもれ聞こえていたが、ルルは知らんフリをし

た。頬が熱く感じるのは気のせいだと思う。今はとにかく、文字喰いを倒すことが先決なのだから。

二章・誰もが想像するが実現はしないこと・4（後書き）

青春……（遠い目）まだまだ続きます。



## 二章・誰もが想像するが実現はしないこと・5

四人に増えた一行は、村の西にあると言う魔法使いの館へ足を進めた。途中、やはり怪物に襲われたが、テトの相手にもならない。おかげで武器に不慣れな魔術師二人が戦うこともなかった。草原を行くと、小さな林が見え、村長から聞いた話ではその中に魔術師の館があると言った。特に迷うこともなんの障害もなく、館にたどりつく。

やたらと大きな館だ。一人で住むには大きすぎるが、怪物を改造しているという話なので、研究機器などを考えると広さはいくらあってもいいのかもしれない。

テトが先頭に立ってドアノックを動かした。何度か打ち付けてみるが、中からの返答はない。ややあつて、きしみ音を立ててドアが開いた。誰かが開けたわけでもなく、中にも人の姿は見えない。やはり魔石を使った魔道式なのだろうかとルルは考えた。それにしては何の変哲もない普通のドアに見える。ニズがちようつがいのところを覗いていたので、ルルも真似をして覗いてみたが、そこも普通のちようつがいにしか見えなかった。別にどこかにコードが見えているわけでも、魔道式の機械が埋め込まれているわけでもない。

「どういう原理なのかな？」

「さあ……さすが本の中といいましうか、まったく分からない構造です」

中に入ると、ドアは勝手に閉まった。内側から見ても、手で開け閉めするドアにしか見えない。

「これは描写力がない内容と見なすべきなのか？」

「うーん、幻想絵巻と考えるなら魔術と考えてもいいんじゃない？」

「でも、分からないものを全部魔術のせいにするのはある意味禁止手だろ？」

「それはそうだけど」

ドアの開け閉めで一通り議論してみたが、結論は出なかった。魔術とも魔道式とも断言できなかったからである。本を書いた作者に直接聞いてみたいところだが、古刻時代まで遡ることは不可能なのでナゾのままだ。

「テトさん、ルルさん、それはいいから魔法使いを探そうよ。文字喰いもいるかもしれないし」

一番年下のオルトに言われたので、仕方なく魔法使いを探すことにした。悪いことを考える存在というものは、物語では大抵地下室をこしらえ、そこで実験をしているものである。そこらへんを熟知しているルルの意見で、四人は地下室を探して回った。ここが怪しいとドアを開けてみれば、生活感のない台所が現れたり、これまた使っている様子のない娯楽室があったり。

何故使った様子がないかというと、テーブルに置いてあったチェスのコマの配置が間違っているとニズが指摘したからだ。作者にはチェスの知識がなかったのかもしれない。

次々とドアを開けていき、地下室を見つけないまま一階の最後の部屋になった。テトがドアに耳を当て、室内の気配と音を確認する。ここにも人の気配はないようで、テトはあっさりとドアに手をかけて開けようとした。わずかに音がして、ドアは開かない。鍵がかかっているのだ。

「開けてくれ」

魔術師二人に魔術で開けてくれと指示する。練習がてら見習いのオルトがつつかえながら呪文を唱えた。さすがにこれは本に害をなす魔術ではないので放出はされないはずだ。

鍵穴の部分から小さな音がしたので、やはりこのくらいの魔術は無効化されないようだ。ルルは実感した。

テトがドアを引き開ける。

そしてそのまま硬直した。

「どしたの、テト？」

彼の背後から声をかけてみるが、返答はない。怪物がいるという

感じにも見えなかった。もし、中に怪物がいるというのなら、冒険者であるテトは迷いもせずに剣を抜いているはず。

「テト？」

「あ、ああ。ちょっとびっくりした」

「どしたの？」

「いや、ええと……人が倒れてる」

「え？」

彼の発言にルルはいぶかしげに眉を寄せた。人が倒れている？

テトは少し迷って、それからドアを彼の背後の三人にも室内が見えるように大きく引き開けた。

まず見えたのは、液体だった。

床に広がる、黒っぽく見える液体。生臭い匂いが鼻をついた。一般人ならまず嗅ぐことのない匂いだ。そして、その広がっている液体を視線で辿っていくと、床に倒れている人影にぶつかった。

息を呑む。思わずルルはテトの背にすがるように隠れた。さばど間をおかずに、オルトもテトにつかまっている。

「おい！ 二人でつかまるな！ 重い！」

「だだだ、だって、死体だよ、テトさん！」

「分かってる！ ルルはいいけど、お前は離れる！」

「性差別！？」

「やかましい！ 男にしがみつかれても嬉しくもなんともないわっ！」

重いだけだと叫んでテトはオルトを振り払った。ルルはそのままである。なにやら意味があるのかなのか。

「ねえ、あれ、本物？」

テトの背に庇われながら、ルルは倒れている人影を指した。長いローブを着た人物は、ピクリともしていない。うつ伏せで倒れているので顔色も判断できないが、見える場所の肌の色から、生きている人間には見えなかった。

「死んでるっぽいよね？」

「そうだな。結構……時間経ってるようにも見えるけど」

「死斑がでていますね。かなり時間が経っていますよ」

あっさりとニズが断言した。その隣でオルトが何言ってるんだろうこの人と言いたげに怯えている。

「実は私、推理小説が大好きでして」

さらっとニズは言ってるのける。推理小説が好きで、そういう知識も持ち合わせているらしい。

「あ、ニズさんも本好きなんだね。仲間仲間」

「そんな話してる場合じゃないと思うよっ!？」

オルトの叫びを背に、テトが室内に足を踏み入れる。ルルもおっかなびつくり続いた。死体は怖い、どうせ本のことだし、この状況でテトから離れるほうが怖いのだ。魔術師二人も同じ心境なのかついてくる。

「あ」

ルルの背後でオルトの声がした。かつんと音がしたところを聞くと、つまづいたか、何かを蹴飛ばしたか。

次の瞬間。

「人殺しーっ!」

突然女性の声が響き渡った。背後からだ。驚いて振り返ると、さっきまで自分たちのほかには誰もいなかったはずなのに、ドアのところに女性が立っていた。

「……誰っ?」「……」

声を揃えて疑問を口にする。女性はオルトを指差してまた叫んだ。「人殺し!」

一体何のことやら分からずに、ルルは少年を見た。少年は固まっている。血のついた短剣を手に。

「何してるのオルトくんっ!？」

目を見張るルルである。ちよっと目を離れたスキにこの少年は何を拾ったのか。

「え、え? だってこれ蹴飛ばしちゃって……」

あわてたオルトが言い訳するが、ルルは目を丸くするしかできない。この状況でそんなものを拾うなんて、そんなマヌケなことをする人間がいるとは。

「お約束なことするなよっ!？」

「そうですね! どうしていかにも凶器な短剣を拾うのですか!」  
テトもニズも同じことを感じているようだ。

「ええ? ばくが悪いの!？」

悪い、とルルは断言できる。どう見ても殺人現場っぽい場所で、凶器だと主張しているような短剣を無造作に拾うなんて、迂闊すぎる。

わたし怪しい人なのです。犯人かもしれません。どうぞ疑ってくださいと述べているのと一緒にだ。

「ああ、もう……とにかくその短剣を元の場所に戻しなさい。現状維持は基本です。殺人かもしれない場所を荒らしてはいけませんよ」  
「え、だって、皆勝手に入っちゃってるけど、いいの、ニズ先輩?」  
「いいのです。荒らしてはいないでしょう?」

「そ、そうかなあ……」

どこか納得していないようだったが、オルトはニズの言葉に従って短剣を床に戻した。そのままニズは殺人現場での行動の基本を教え始めた。黙っていられないようだ。その間も女性は叫んでいる。恐ろしくて逃げ出すともなく、ひたすら叫んで人を集めようとしているようだ。殺人犯だと指差しておいて逃げないのは、ある意味度胸がある。

「ところで、あの人、誰だろうね?」

「さあ?」

ルルの問いかけにテトは肩をすくめた。すっかり傍観の体勢だ。一階はすべて見て回ったのだが、女性は一体どこから湧いてきたのだろう。

この女性が悪い魔法使いには、ちょっと見えない。倒れて死んでいる人物の方が悪い魔法使いに見える。

「あたしたち、悪い魔法使い退治に来たんだよね？」

「そのつもりだったんだけどな。なんで死体に遭遇してるんだろう？」

視線を下ろすと、倒れている人物が目に入る。長いローブを着ており、魔法使いと言われれば『ああ、そうかも』という格好である。テトがかがんで死体の顔を覗き込んだ。うつ伏せで見にくいようだが、それでも確認できたようで、首をかしげている。

「まあ、絵巻に出てくる悪い魔法使いって顔してるな。鼻長くて曲がつてるし、顔になんかぶつぶつあるし」

「じゃあ、この人が悪い魔法使い？ でも、何でこんなことになってるの？」

「なんでだろうな……俺、この本、子供向けの幻想絵巻だと思ってただけど」

「うん。あたしも」

ドラゴンにさらわれたお姫様、悪い魔法使い。これらから導き出される本の内容……子供向けの幻想絵巻としか思えなかったのだが、どうも違うようだ。

本マニア二人が顔を見合わせたとき、誰かが走ってくる足音がした。ドアのところにいる女性がホッとした表情を浮かべている。何故彼女が逃げないのかも、分からない。

「なんで血なまぐさい事件が起きてるんだ？」

「うん。推理小説な展開だね。ドアに鍵もかかってたし……密室？」

「あーそうかもな……ところで、推理小説なら走ってくるのは官憲か？」

「あたしは探偵に一票」

「じゃあ俺は官憲で。さらにオルトが犯人扱いされるに三千票」

「あはは。あたしはオルトくんが犯人と確定されるに五千票」

乾いた笑みを浮かべているルルたちに、ニズが振り返り、真顔で言い切った。

「あ、私もオルトが犯人と断定されるに一万票かけます」

「ぼく、確実に犯人扱い!？」

推理小説を読んだことがないらしく、オルトは青くなっている。賭けにならない賭けを言い出した三人は、おびえている少年にはつきりと頷いてやった。

「ぼくじゃないよ!？」

「知ってる」

「うん」

「わかっていますよ」

穏やかになだめるように、推理小説読み込み三人は言い切る。

「でも、怪しまれるようなことしているから」

オルトが見る間に泣き出しそうな表情になったので、先輩のニズが慰めだした。

その様子を苦笑して見つめながら、ルルは内心で首をかしげる。

悪いドラゴンにさらわれた姫君。

怪物を改造する悪い魔法使い。

そして、血なまぐさいこの室内。

……一体この本はどんな内容の本なのだろう？

## 二章・誰もが想像するが実現はしないこと・5（後書き）

半分終了して、折り返し地点です。ここからさらにシッコミがつ！  
！（え）



### 三章・貫きぬくのだどこまでも・1

どこから現れた女性の悲鳴に導かれるようにして、こちらもまたどこから湧いて出たのか、あまり特徴のない男性が四人と、ぱりつとした身なりのキザな印象の男と、いかにも頼りなさそうな少年が部屋の中に入ってきた。

「引き分けかもね、テト」

「かもな」

テトは来るのが官憲だと言った。ルルは探偵だと言った。どちらも正解だったようだ。四人の男は官憲の制服のような同じ衣服を身にまとっていたし、キザな男は十人中七人が『あ、探偵?』と言い出しそうな雰囲気だったからだ。ちなみに、ルルの予想では頼りなさそうな少年は、探偵助手。

どちらにせよ、子供向けの幻想絵巻ではない。絵巻では死体の描写などありえないのだ。

チラリと視線をやると、動かない魔法使いらしい男の姿。よく考えると、この男が怪物を改造していたというのなら、むしろ放っておいてもいいのではないかとも思った。悪い魔法使いの退治を引き受けたのだから。

それに。

「あのさ、これ、そもそも殺人とは限らないよね?」

ルルの疑問に、推理小説マニア・ニズが乗ってきた。

「あ、そうですね。自殺という可能性もありますね」

「うん。ドアに鍵がかかってたし、凶器らしい短剣も室内でしょ?」

「あとは傷の具合ですか。自分で刺せる角度や場所かどうか」

「ニズさん、そこまで考え付くことは、相当いろんな本読み込んでるでしょ?」

「ええ、まあ。それなりに」

「今度おすすめ貸して? あたしも貸してあげるから」

殺人なのか自殺なのか。官憲らしい男たちが調べている横で、そんな会話をしている自分が、なんだか不思議だ。血の匂いも先程よりは感じない。これは慣れなのか、それともほかの要因なのか。

官憲らしい男二人が一行を見張り、残りの二人と探偵っぽい男が現場を調べ、助手のような少年が女性を椅子に座らせてなだめている。

その様子を眺めて、テトがボソリと呟いた。

「探偵には必ず助手か、それっぽい存在がいるよな。なんでだ？」  
即座にニズが答える。

「『うわあ、なんて凄い推理なのだ』と驚く役が必要だからですよ。場が盛り上がりますし、探偵のやる気が上がり、自尊心も満たされます。そして、読者の共感も得られる、と」

「あ、ならあたし『事件が起こるところにたまたま都合よくいる』っていうのにも突っ込みたいな」

「それはたまたま事件に遭遇する例ですね。依頼されて調べに出る例もありますよ。昔はそっちが王道だったようですが、近年は『たまたま遭遇』が多いですね」

そんな会話をしていると、官憲たち（？）が死体をひっくり返した。傷を確認するようだ。あまり死体を眺めたくないのに、ルルは視線を逸らした。いくら本の中といっても、それなりに気持ちが悪い。視線の先に、たまたまオルトがおり、この状況がかなり怖いのか、少年は蒼白になっていた。状況を直視できないと表情が語っている。さつき、思わず血のついた短剣を拾ったこともシヨックだったのだろう。オルトはかなり気が弱いらしい。最初出会ったときの印象、小動物っぽいというのはあながち外れていなかったようだ。「オルトくん、大丈夫？」

「う、ううん。あまり大丈夫じゃない、かも」

びるびる震えている。小動物っぽい。思わず頭を撫でてあげたくなり、弟がいたらこんな感じなのかもとチラッと思った。同時に、故郷の妹のことを少し思い出す。

ルルの妹は、オルトよりもっとずっとしつかりしているのだが。故郷を思い出したルルの横で、テトと二ズが会話を続けている。

「ローブの胸部分に傷があるってことは、指したのは胸か……自分でも刺せる場所だな」

「傷の角度が問題ですね。凶器らしい短剣は少し離れた場所に落ちていたようですが、即死でなければ放り投げる事が可能です」

他殺か自殺かで盛り上がっている。それでも死体に近寄らないのはやはり抵抗があるのか、官憲に怒られるからか。

「そこも気になるけど、あたしはあの人たちがどこから出てきたのかも気になる」

女性を始め、官憲、探偵、助手。ルルたちが館の中を探ったときは姿もなく、気配もなかった。二階から降りてきたにしては、音がなかった。女性一人ならともかく、男が六人も連れ立って歩いて、少しも音を立てないのはおかしい。

「お話の展開に脈絡がなさ過ぎだと思わない？」

「……ないな。メチャクチャだ」

ルルの指摘にテトも同意してくれた。彼も同じことを感じているのかもしれない。ルルも彼も、たくさんの本を読んで、いろいろな知識を持っていけれども、この本の内容が予想できないのだ。

最初は幻想絵巻だと思っていた。悪いドラゴン。悪い魔法使い。

さらわれたお姫様。困っている村人。

しかし、一転して血なまぐさい事件が起こり、悪い魔法使いっぽい男が死んでいる。自殺か、他殺か。

他殺なら、犯人は？

幻想絵巻で推理小説。珍しい展開だが、脈絡もない。

「大体さ、幻想絵巻ならわざわざ武器使わなくても殺人なんて簡単でしょ。殺傷能力の高い魔術を使えば、どこからでも狙い打ちできるんだもん」

「ああ、俺らの世界でもたまにあるな、そういう殺人事件」

ルルたちの世界では、ごくマレに、魔術を使った殺人事件も起こ

る。その場合疑われるのは魔術師に限られるので、ある意味犯人も分かりやすい。

「で、魔術で犯行に及んでないってことは、犯人は魔術を使えない。あるいは、これは自殺」

「その二つ、か？ でも魔術師が自殺するときにはわざわざ短剣使うか？ ニズならもし自殺するときはどうする？」

「私なら魔術でラクになる方を選びますね。刺しどころによつては即死しないでしょう。魔術なら強いものを使えば簡単に即死ですから」

「だろ？ 俺としては、これは他者による殺人だと思う」

「んー、そつか。そう考えると他殺のセンが強いね」

確かにそう考えると納得できる。それが一番効果的かどうかは置いておいて、とにかくラクになる手段を持っているのならば、真っ先にそれを使うのが人間心理だ。

「怖い話しないでよ、三人とも……」

ひきつってオルトが言ってくる。三人の会話が怖かったようだ。

「何を怯えているのですか、オルト。ただの推理ですよ？」

「それが怖いって！ 真顔で言ってるし！」

少年が叫んだとき、不意に押し殺した笑い声が起こった。

「なかなか鋭い意見ですね、君たち。素人とは思えませんよ」

探偵らしき男が、強気な微笑を浮かべて話しかけてきた。こちらを観察するかのような視線だ。感じ取ってルルは苦笑した。

確かに怪しい四人組みだろう。どう見ても戦士なテト、どう見ても町娘なルル、どう見ても魔術師なくせに鉄の槍を背負っているニズと、トゲ鉄球のモーニングスターを下げているオルト。

どこをどうひっくり返しても関連性がない。冒険者としてもパーティー編成に問題がありすぎる。そもそも一般市民のルルが入っていることがおかしい。

そんなおかしい四人組を、

「殺人事件だと言うのなら、間違いなくお前たちが犯人だろう！

怪しすぎる！」

官憲が指摘してきた。動じず、しれつとニズが言い返す。

「私たちが来たときには死んでいましたよ。そもそも、全く知らない人物ですし」

「ならば何故この館に来た！」

「村人を困らせている悪い魔法使いの退治を頼まりましたので」

「そら見る！　やはりお前たちが犯人だ！」

「聞きました？」

ニズは何故だか嬉しそうににやりとした。

「官憲に犯人だと疑われていますよ？　いやあ、自分がこんな立場に立つなんて、想像しかしたことがなかったですよ」

こんな立場になったら、と、想像することはあったようだ。気持ちは分かる。ルルも昔は探偵助手に憧れたものだ。今は、犯人の言い訳や行動に、あたしならこう言う、こうする、と想像することが多い。

「うんうん、分かるよ、ニズさん」

「官憲が能無しっていうのもお約束だよな！」

テトも妙に嬉しそうにそんなことを言う。

「なんで喜んでるのさ……」

オルトだけが沈んだ表情だ。マニアな会話についてこれていないのが、ひどく寂しそうにも見える。元の世界に帰ったら、彼におすめの本を貸してあげようとルルは思った。一人でも本を好きな人が増えてくれたら嬉しいのだ。蛇の道に引っ張り込む本マニアといったところか。

そのオルトを指差して、椅子に座っている女性が叫んだ。

「わたし、見ました！　あの人、あの人が血のついた短剣を持っていたんです！　あの人が犯人です！」

女性の証言に、官憲たちは我が意を得たりと勝ち誇った表情になる。

「そーら見る！　やっぱりお前らが犯人だ！　お前が主犯だろう！」

「ぼぼぼ、ぼくは違うよ！ 短剣蹴っ飛ばしたんで、なんだろうと思っただけで！」

「お約束で迂闊なことをするから疑われるのですよ？ オルト」

「助けてくれないのニズ先輩！？」

泣き声になりつつあるオルトの声に、ルルはもう一度苦笑する。

オルトが犯人ではないことは一緒に行動していたルルたちが一番よく知っているし、少し考えれば分かることなのだ。

「あのね、おじさん」

接客するときの愛嬌ある笑顔で、彼女は声を出した。

「死斑出てるよね？ 死んでからかなりの時間が経っているってことでしょ？ それくらいは分かるよね？」

「そ、それがどうした」

「オルトくん、あ、彼のことね。彼が短剣を持っているのをあの女性が見たのはついさっきでしょ。あたしたちが来たのもついさっきで、ついさっき来たばかりのあたしたちがあの人を殺したんなら、死斑が出ているのはおかしいって思わない？」

「ぬ、う、そ、それは……」

ルルの指摘に官憲の男たちは一瞬言葉を失ったが、ニズとオルトを見て再び勝ち誇ったような顔になった。

「魔法でなんとかごまかしたんだろう！ そこに魔法使いがいるではないか！」

ルルはにこやかな表情のまま、同行者に振り返った。

「忘れてた。推理小説の官憲って、よく道理とか理屈を捻じ曲げるとだったね」

「そうだな。だから探偵の推理が目立つんだ」

「推理小説の官憲は大概が能無し……テトくんの認識は正しいです」  
「落ち着いてないで何とかしてよーっ！」

オルトだけが焦っている。犯人扱いされているのは四人全員なのだが、オルト以外はどこか当事者だと思えていないようだ。直接死体に触ってもいないし、凶器にも触れていないからだろっか。やは

りどこかで、ここは本の中の世界で、現実ではないと考えているのかもしれないと、ルルは思った。本当に死体がある部屋の中に入っていたら、冒険者で修羅場を潜り抜けているテト以外は、きっとこんなに冷静にはいられないだろう。

そんな四人を眺めていた探偵が、また、押し殺して笑った。

面白い人たちですね、と前置きしてから、探偵は言い切る。

「彼らは犯人ではありませんよ」

それはもう、キツパリとした確信に満ちた声だった。どこでそう判断したのか、聞いてみたいルルである。自分たちは怪しすぎる。死体のある現場におり、内の一人は凶器を手に行っていたところを目撃され、残りの三人は死体と同室にいるというのに、のん気に会話をしていた。

これを怪しまずに何を怪しめと言うのだろう。

しかし、同時に彼女は自分たちが犯人ではないことも知っている。

そもそも、これが自殺なのか他殺なのかの判断もついていない。

そのあたり、探偵の意見はどうなのだろう。じっと見守ると、探偵は椅子に座っている女性に視線を向けた。

単なる目撃者だと思っていた、女性。

### 三章・貫きぬくのだどこまでも・1（後書き）

ツッコミ、始まりますよ。



### 三章・貫きぬくのだどこまでも・2

女性に向かって、探偵は言った。

「これは殺人事件です。あなたが殺したんですね？　そして、その少年に罪をかぶせようとした」

ルルは、自分の目が点になったことを自覚した。この展開は、ありえない。

推理とか捜査とか、そんな展開の何もかもをすっ飛ばしている。

探偵はかまわずに語り始めていた。

「貴女は、魔法使いと恋仲だった。そうですね？　結婚も間近で幸せな日々の中、彼のしていることを知った……怪物を改造し、人々を苦しめていることを。そして、貴女は彼を止めた。おそらくは何度も。しかし彼は聞いてくれなかった。思い悩んだ末に貴女は自分の手で彼を止めようとした……」

まるで女性本人のようにトクトクと語った。探偵が語り終わるとほぼ同時に、女性が椅子から立ち上がる。

「殺すつもりじゃなかったんです！　ただ……わたしは、彼を止めたくて……」

うめくように女性が吐き出した言葉に、目が点をすっ飛ばしたルルである。開いた口が塞がらないとはまさにこのことか。捜査どころか証拠もなく、誰かから証言を聞いたわけでもないのに、探偵は女性を犯人だと断定し、そして女性は即座に自供した。

早すぎる。脈絡がないにも程がある。脳裏に突っ込みたい言葉が次々によぎっていくのも感じている。ルルの心境を知らない探偵は、ありえないことにトリックの披露まで始めた。

「貴女は彼を刺したことで恐ろしくなっただけ去った。しかし、貴女に刺された彼はまだ生きていたのですよ。貴女が去ったあとに立ち上がり、ドアに鍵をかけ……落ちた短剣を拾おうとして力尽きたのです」

室内にいた人物が鍵をかけていたのなら、確かに、密室のトリックは解明できる。他にもいろいろと必要なことが抜けているだけで、密室それ自体は解明できる。

「そうか！ それでなんだね、鍵がかかったのは！」

素直に感心しているのは、推理小説を読んだ経験がないオルトと、登場人物である官憲、助手だ。

ルル他二名は遠い目になっていた。

口には出していないが、テトもニズも自分と同じことを感じているだろうとルルは確信している。

すなわち　なにこの浅い展開、と。本の中の世界でルルたちの常識が通じないといえばそうなのかもしれない。けれど、ルルから見ただけならこの展開はありえなさすぎる。トリックも浅ければ、話の展開も無理がある。

逆に言えば、無理しかない。

彼女の視線にも気付かず、女性と探偵は会話を続けている。

「どうして…… どうして彼はそんなことを？ 助けを呼べば、助かったかもしれないのに」

「貴女を愛していたからですよ。密室にして、あわよくば自殺に見せかけようとしたのでしょう。非道な実験を繰り返す魔法使いでも、貴女への愛は本物だったのです……」

隣でテトが体をかきむしっている。ルルはぼんやりと窓の外を眺めながら、そういえばテトは恋愛小説が苦手だったなあと思いついた。体が痒くなるので読めないと言っていたことがある。あれは本当のことだったようだ。

さらに横では、ニズがうつむいて何か呟いていた。耳をすますと数を数えているのが聞こえてくる。どうやら、床の節目を数えているらしい。

いろいろと耐えている彼らの横で、オルトだけが目を潤ませている。感受性が豊かなのか、濡れ衣を着せられかけたことも忘れて感動している。

女性が顔を覆った。低い嗚咽が続く。官憲たちも同情のまなざしで女性を見守り、助手も鼻をすすっていた。

「いや、いいのかそれで。悪い魔法使いだろ。人に迷惑かけまくってた男だろ。大体外見からして悪い魔法使いそのもので、やってることも悪い魔法使いなのに、どこを好きになっただ。どこが良かったんだ。なんで純愛を貫いたような話になってるんだ。どうして誰も突っ込まないんだ。探偵だって結論早すぎるだろ。推理や捜査はどうなった。物的証拠はどうした。女もなんで即座に自白するんだ」

小声でテトが呟くのを聞き、やっぱり同じことを考えていたと苦笑するルルだ。

確かに、納得はできない。でもここで迂闊に探偵たちに突っ込んだら、もっとややこしいことになりそうなので、それもできない。

「推理ものとしては、とんでもなく駄作ですね……」

ニズはそんな感想を呻いている。

「え、そうなの？」

オルトだけが平和だ。

なまぬるく状況を見守っていると、官憲が女性を連れ出した。探偵と助手がその様子を見送っていた 完。

「……ええと、終わったみたいだから、行こっか？」

なんとか立ち直り、ルルは男性陣に声をかけた。

「そーだな……」

「ええ、行きましょう……」

「どしたの、みんな？」

脱力しきったルルたちを、分かっているオルトの声がさらに脱力させる。説明してあげる気力もないルルは、先をいくテトの背について歩き出した。

悪い魔法使いは愛に死んだのだ。それでいい。

これ以上かかわりたくない。全身を覆う脱力感に負けないうちに、館を脱出するべきだ。

それでも　ひとつだけ我慢できずにルルは呟いた。

「止めるって……短剣持って会いに行った時点で殺す気満々だよな……」

「ルル。もういい。突っ込むな。忘れよう」

ある意味での悪夢な館を、未練もなく後にした。

魔法使い退治を頼まれた村には戻らないことにした。倒したのは自分たちではないし、何よりも忘れない。報酬も自分たちの世界とは違うお金で、持って帰れるとも限らない。よって、全て忘れて爽やかにドラゴン退治に向かおうと、四人の意見は見事に一致した。

湧いて出てくる怪物をテトに殴ってもらい、たまにニズとオルトに代わってもらったりしながら、ルルたちは北へと足を進めた。どのくらい歩いているのか分からないが、地形は草原からゴツゴツとした岩肌に変わりつつある。相当な距離を歩いているようにも感じ、それほど歩いていないような気もする。体に疲れがあまりないのだ。無理は禁物と時折休憩を交えながら進み、幾度目かの休憩をしたときだった。

「きゃあああああつ」

『絹を裂くような』悲鳴というのはこのことか。女性の悲鳴が耳を突いた。ルルは思わずテトの顔を見る。ゴツゴツとした岩場で足場が悪く、ここで怪物と戦闘になるのはなるべく避けたいところ。

今までもテトは足場に苦労しながら怪物を倒していた。怪物そのものに苦戦はしておらず、あくまでも足場が悪いことに困っていたのである。

しかし、何か悲鳴を上げるような状況に陥っている、女性。

だが、ここは本の中の世界で現実でもない。

助けるべきかどうか、非常に悩むところだ。

ルルの視線を感じ取って、テトは肩をすくめた。あまり乗り気ではないらしい。ルルはちよっと考えた。

本の中の世界。悲鳴。女性。自分たちの目的。

文字喰い。

「……ひょっとして、文字喰いに襲われてたりするかもしれない、よね？」

「あ」

気が進まないと言っている場合ではない。もし文字喰いがいるのならば倒さなければ帰れないのだ。手がかりがありそうならば危険に飛び込む必要だってあるだろう。

「行くぞ！」

そのあたりの判断はテトが一番早かった。さすが現役冒険者だ。走り出した彼に遅れてルルも走り出す。悲鳴はそれほど遠くではなかったような気もするので、いくら足場が悪くても、テトの足ならさほど時間はかからないと思った。問題はついていくルルと魔術師二人。軽装なルルはともかく、魔術師二人は重たい武器を背負っている。一生懸命走っていても、どうしても遅れるようだ。

先行したルルたちが見たものは、怪物の群れではなかった。

地面に座り込んで、くすくすんと泣いていたのは、豪華で重たそうなドレスを身にまとった女の子だ。髪はカレンハイル帝国の貴族のように巻いてあり、一目見た印象だけで『お嬢様』と断言できそうな格好である。

少女のほかには何も見当たらない。彼女が悲鳴を上げたのは間違いないだろう。しかし、泣いている理由も判断できなかった。

「あのー、どうしたの？ 何があったの？」

ルルが声をかけると、少女は顔を上げた。年はルルより少し下くらいだろうか。『可憐』という言葉を実体化させて固めたような少女だった。端的に言えば、可愛い。

『蜂蜜色の髪、すみれ色の瞳、薔薇色の頬、紅を塗ったかのような小さな赤い唇』……とりあえず、ルルが思い出せた美少女のありきたりな表現はそのあたりか。

ただし、どこか浮世離れしたものも感じさせる。その雰囲気之余

計に少女を『世間知らず』の『お嬢様』に見せていると感じた。

「助けてくださるの？」

『祈るように』手を合わせ、少女は『鈴を鳴らしたかのような』か細い声で言う。

「え？」

「わたくしを助けてくださるのね！ ああ、騎士様！」

少女は、ルルをよけて、テトに視線を向けていた。周囲の警戒をしていたテトは、言われている意味が分からないのか、剣に手をかけたまま固まっていた。

騎士様。風来坊な冒険者のテトに一番縁遠い単語だろう。理解した瞬間、ルルは笑い出しそうになった。どう見ても貧乏な冒険者しか見えないテトを、どこまでの勘違いをしたら騎士に見えるのか。少なくとも、ルルには無理だ。テトを騎士だと誤解するには、一般常識をも喪失するくらい、重度の記憶喪失にならないと無理だと思った。笑いをこらえていると、ニスとオルトが追いついてきた。

「テトくん、ルルさん、こちらの女性はどなたです？」

「何があつたの？」

状況が分からない二人に、ルルは手を振って分からないと合図した。口を開くと本当に笑い出しそうだったのだ。

少女はテトから視線を離さず『すぎるように』見ている。非常に庇護欲をかきたてる様子だ。守ってあげたいと思わせる何かを放出している。

テトには通じていないようだったが。

「ちょ、ちよつと待て。何か勘違いしてないか？」

「いいえ。何一つ勘違いなどしておりませんわ。わたくしの騎士様『きらきらと輝く』瞳で、少女はテトを見つめ、視線を受けている。テトは二の句が告げずに絶句している。恋愛小説が苦手な彼が、どこまで耐えられるだろうとルルは思った。

瞬間、テトは機械的な動きでルルに振り返った。脂汗を流しそうな表情が、助けてくれと語っている。やはり耐えられないようだ。

彼の視線を追い、少女は『にこやか』にルルに笑いかけてきた。  
「まあ、従者の方ですわね。さすがは騎士様。三人も従者をお持ち  
ですね」

従者扱いされた。要は召使い。少女にとって、テト以外はとうで  
もいい人物だと断言されたようなものだ。町娘、魔術師、魔術師  
三人のどこを見て従者と思ったのか、ちよつと聞いてみたい気も  
した。

「……次はあれかな。世間知らずのお嬢様と騎士の恋物語」

そんなことを言ってみる。ドラゴンとお姫様、悪い魔法使いと推  
理ときて、これ。この本の内容が真剣に気になる。

「俺は騎士じゃないぞ！」

分かりきったことをテトが叫んだ。恋物語と聞いて鳥肌が立った  
のか、二の腕をさすっている。

「世間知らずお嬢様と騎士なら、駆け落ちオチかな？なら悲恋が多  
いけど。心中とかするから」

さらりと聞き流してルルは呟く。

世間知らず同士の駆け落ちものというのは、悲恋が多い。主人公  
とヒロインが心中したり、心中したりするのだ。ルルが読んだ駆け  
落ちものはそういうオチが多かった。勿論、幸せに暮らしてめでた  
しめでたしという話も読んでいるのだが、今、彼女の頭の中にある  
のは心中ものの有名どころ。従者扱いされて少し腹が立ったとかで  
はなく、この本の内容が気になるからだ、と思う。意識せずに半眼  
になりながら、ルルはテトに言っただけだ。

「やったね、テト。主人公格みたいだよ」

「嬉しくない！　なんだよ心中って！」

「言葉のまま。この恋が報われないなら、せめて一緒に死のうつつで  
知らない？　『テリス皇子とリヒエン又皇女』とか有名だよ？」

一般にかなり有名な、血の繋がらない兄皇子と妹皇女の話为例に  
出すと、テトは悲鳴のような声を上げた。

「俺がそういうジャンル読めないの知ってるだろ！」

有名どころなら、読んだことがなくてもあらずじくくらいは知っていると  
思ったのだが、この様子では知らないらしい。テトの苦手意識は相当なものだ。



### 三章・貫きぬくのだどこまでも・2（後書き）

はい、トンドモ推理の次は恋愛ものらしいですよw

### 三章・貫きぬくのだどこまでも・3

「勘違いだ！俺はただの冒険者で騎士じゃない！」

「いいえ、あなたはわたくしの騎士様ですわ……わたくしの危機に  
颯爽と駆けつけてくださいましたもの」  
さっそう

心底からの彼の絶叫を、少女は『夢見る瞳』で流してのけた。駆けつけたのはルルも一緒に、最初に声をかけたのは彼女なのだが、同性だったせいか、少女の視界からは除外されたようだ。決して逃さないと言うように、少女は『星の宿るような』瞳を潤ませる。思春期の女の子が好む、恋物語のヒロインそのものの少女は、テトを見つめて『うつとりと』言った。

「わたくしを連れてどこまでも逃げてくださいます……！」

「ひい」

テトが喉の奥で呻くのを、確かに聞いたルルである。怪物にも怯えないテトが、年下の少女に真剣に怯えている。このままだと心中一直線なのだから、嫌がるのも無理はないのだが。

「すいません。何がどうなっているのかサッパリなのですが」

「うん。ぼくも分からない」

魔術師二人が置いてけぼりになっているので、ちょっと説明した。

「なんか、心中恋物語みたいよ？」

「え、なんで？」

「駆け落ちものって、最後に幸せな終わり方するものが少ないの。恋人たちが一緒に死んで終わりって言う話が多くって。さっき言った『テリス皇子とリヒエン又皇女』みたいな感じで」

「なるほど。『テリス皇子とリヒエン又皇女』の話は概要だけなら知っています。確か服毒するのではたね」

何故か話のスジより心中の方法を覚えているらしいニズは、推理小説好きがモロに出ていると言えよう。

「え、じゃあ、テトさん……その子と心中!？」

素直に信じ込んでオルトが声を上げた。

「勝手に決めるなッ！」

テトの叫びも考えてみたらもつともだ。本の中の世界で登場人物と心中なんて、笑えない。もし、ここにいたのが男で、ルルと一緒に死んでくれと言ってきたら、いくら本マニアの彼女でも拒否する。恋愛なら現実世界でしたい。たとえ、今は恋より本で、そもそも相手がなくても。

「オルト、代われ！」

「えっ、いやだよ！」

ルルがそんなことを考えている間に、男性陣の間では押し付け合いが始まっていた。

「ニズ！」

「丁重にお断りいたします。わたしは一従者ですので」

ニズも即答で拒否している。誰だって心中はイヤだろう。

「ルル、助けてくれ！」

さすがにルルに代わってくれとは言ってこないテトに、ルルは苦笑する。テトがきっぱりと拒否しても少女の方は聞く耳を持っていないので、話は平行線のままだ。まず少女の意識をテトから逸らすことが先決である。

テトが一緒でないとこの世界から出ることは難しいので、彼と心中されると困るのだ。

心の中で結論が出たので、ルルは助けてあげることにした。少女の横に座り込む。

「あのね、どうして逃げたいの？」

「え……」

連れて逃げてと言うだけの理由があるはずだ。まずはそれを知ることから始めないと、説得もままならない。

「逃げたい理由は何？ お父さんに無理矢理婚約でも押し付けられた？ それとも継母にいじめられてたりする？ おうちにものすごい借金があつて、成金のおじさんと結婚させられそうになってるの

？　もしかして兄弟と禁断の恋愛に落ちそうになった？　あとは、身内に虐待されてるとか？　ほかには、素敵な恋がしたくて家出てきた、とか？」

「ずらずらと原因になりそうな事例を述べてみる。このくらいならよどみなく言えるルルだ。少女は最初『きょんとした』表情で聞いていたが、全部聞いてから首を振った。

「いいえ、わたくしはそのような理由で家を出たいわけではないのですわ、従者の方」

「じゃあ、どうして？」

首をかしげるルルである。ほかの理由とはなんだろう。

少女は『悲しげに』瞳を潤ませて告げた。

「わたくし、このままでは盗まれてしまうのです　怪盗アレクセイに」

……　一拍置いて。

「恋愛ものかと思ったら怪盗もののっ！？」

「心中関係ないんじゃないか！？」

「それは、盗みではなくて誘拐というのでは？」

「かつこいい！　怪盗だって！」

それぞれの反応はバラバラだった。まっとうな感想を口にしたのは誰かというと、非常に判断が難しいくらいに。

三章・貫きぬくのだどこまでも・3（後書き）

真人間は誰だ！？（いないかもしれないw）

### 三章・貫きぬくのだどこまでも・4

一度咳払いをして、ルルは再び少女の顔を覗き込んだ。

「ええと、じゃあ、その怪盗に襲われて逃げていたの？」

「いいえ。予告の時間になる前に抜け出してきましたの」

律儀に予告してきた怪盗が現れる前に家を抜け出してきた、と、そういうことなのだろう。外には怪盗なんぞよりもっと怖い怪物が生息しているのだが、おそらく考え付きもしなかったに違いない。それこそ『世間知らずのお嬢様』だ。

「……じゃあ、さっきの悲鳴は？」

見える範囲に怪物の姿はない。怪盗どころか、人影もない。少女は一体何に悲鳴を上げたのか。『無邪気』に少女は答えてくれた。

「転んでしまいましたの」

ルルは全身から力が抜けていくのを感じた。脱力するというのはこういう感じなのかと、頭のどこかで考える。さきほどの『絹を裂くような』悲鳴は単に転んだだけなのだ。

文字喰いとも関係ない。足場の悪いところを、力を入れて走った疲れがどつと来た。乾いた微笑を浮かべたルルにかまわず、少女はやはりテトから視線を話さない。

「足をくじいてしまいましたわ」

地面に座り込んだまま『キラキラした』瞳で見上げているが、見つめられている当人は青ざめて顔を逸らしていた。目を合わせたら何かやられると言いたげである。ルルはちょっと考えた。自分たちは文字喰いを探している。そして、話に添って進まないと言文字喰いに会えない。ここで少女を放つていくのはおそらく話に反すること、文字喰いから遠ざかる可能性がある。

しかし、少女は足をくじいており、どうも一人で歩けなさそう。そうになると、誰かが背負ってあげることになる。テトは対・怪物要員だから手が塞がる少女を背負うことは却下。

そうすると、テトの次に体力がありそうな人間といえば……ルルかもしれない。女性とはいえ、部屋にこもって研究だけの魔術師と、体力仕事の古本屋で働いている彼女とでは、体力があるのは後者のほうだろう。多分、腕力も上かもしれない。

そこまで考えて、それでもルルはオルトに手招きした。

「オルトくん、彼女、背負ってあげて」

「え、なんでぼく？」

「テトの次に体力ありそうだから」

「じゃなくて、テトさんがおぶったほうがいいんじゃない？ どう見てもあの人、テトさんのことしか見てないよ？」

オルトの疑問ももっともだ。少女はテトしか見ていない。

「テトが背負うと問題あるでしょ。怪物と戦うの、テトしかないし。もし怪物に襲われて、オルトくんテト並に戦える？」

「ううん、無理」

「でしょ？ だから」

即戦力はテトのみ。ならば手が空いている者が少女を背負うべきである。だからといって、自分が背負うのはなんだか気が進まないルルだ。なんとなく、少女のことが気に食わないので。

「……ルルさん、ヤキモチやいてるだけなんじゃない？」

オルトに言われたことに、ルルは動揺しなかった。にこやかな営業スマイルを浮かべて、少年に答えただけである。

「テトはうちに店に来る常連客で、あたしの彼氏ではありません。そここのところ誤解しないようにね」

「はい！」

何故か、オルトは気を付けをして良い返事を返してきた。心なしか怯えているようにも感じたのは気のせいだろう、きっと気のせいだ。少年の動きがギクシャクしているのも、感じ方の差だ。

「ぼく、背負いますからどうぞ」

オルトが背を向けて少女の前にかがむ。しかし少女はテトに物説いたげな視線を向けていた。多分、どうしてあなたが背負ってくれ

ないのと言いたいのだ。テトは何も言わずにルルのところに逃げてきた。少女に対して何も言わないのは、何を言っても無駄だと感じているのかもしれない。

少女は『可愛らしく』頬を膨らませて不満の意を示している。ルルが邪魔をしたとでも言いたげだ。

「ごめんね、この中で怪物と直接戦えるの、この人だけだから。従者のヒトタチはあくまでも魔術師で手助けするだけなの。だからこの人の両手が塞がるのは困るのよ」

そう説明すると、少女は理解できたのか頷いた。型にはまった『世間知らずのお嬢様』だけあって、素直だ。オルトの背に細い手を伸ばしてふんわりとおぶさった。

「うわ、軽い」

少女を背負って立ち上がったオルトは、思わずといった様子で呟いた。非力な魔術師でもよろけず背負えているので、少女はかなり軽いようだ。

「それで、この人背負ったけど、これからどうする？」

「送るしかないだろ、家に」

テトは視線を逸らしたまま断言した。確かに少女を連れて歩くのは無理な話だ。『可憐なお嬢様』が、文字喰いを倒す旅についてくるなどできるわけもない。連れてあるけばその分余計な苦勞を背負い込みそうだ。少女当人はもちろん分かっているわけもなく『瞳を潤ませて』抗議してきた。

「そんな……連れて逃げてくださいまし、わたくしの騎士様！」

「デキマセン」

テトは棒読みで即答している。心の底からイヤなのだろう。

「わたくし……わたくし、怪盗に盗まれるのはいやです！」

「いえ、盗まれると言うより、誘拐ですよ？ 偶然ばったり会った

我々より、官憲に訴えた方がよろしいのでは」

「いいえ、官憲などあてになりませんわ。いつも逃げられてばかりですもの」



少女はゆるく否定の言葉を口にする。初めてテト以外の男と会話する気になったらしい。

「ああ、まあ、そうだな」

ぼんやりとテトが同意すると、少女は『花開くような』笑顔になった。彼が同意してくれたことが嬉しかったようだ。ちよつともやもやしたものを感じたが、ルルは分かっている様子。魔術師二人に説明した。

「推理小説の官憲と一緒に約束なの。例外はね、ライバルと認められた官憲くらいかな。それも出し抜かれるのがお約束だけど」

「はあ、なるほど。納得しました」

「従者の方々、何を話していらっしゃいますの？」

「あ、なんでもないの、気にしないで」

本の中の住民の少女には関係のない話だ。あわてて話を逸らす。

「それで、あなたのおうちはどこ？」

「わたくし、帰りません。連れて行ってくださいまし」

少女はテトを見て再度懇願してきた。

「デキマセン」

テトの反応は一緒である。どうあっても連れて行くわけにはいかないのだ。その点ではルルの意見も一緒だ。ならば説得あるのみ。

「あのね、この人、実はとても重要な旅の途中なの。魔術師が二人もつくくらいの旅なの。あたしは、その道案内でついてきているだけ」

男三人がいぶかしげな表情になったが、ルルはかまわず続けた。

「とても強い怪物を退治する旅の途中だから、あなたを連れて行くわけにはいかない。危険すぎるから」

何一つ嘘は言っていない。文字喰いを倒すために歩いているのは事実で、ついでにドラゴン退治も頼まれている。元の世界に戻るために『重要な旅』だし、『とても強い怪物』と戦う『かも』しれないので、どこも嘘ではない。

「ね？ だから一緒に連れて行けないけど、家まで送ってあげる。」

外は怪物でいっぱいだから、家に帰ったほうがいいよ」

「ですが……わたくし、怪盗に盗まれてしまいますわ」

「だから、窃盗ではなく、誘拐でしょう」

ニズが小さく事実を述べたが、少女は『不安げな』面持ちでテトを見つめていた。ルルはまた少し考えた。さきほどは駆け落ちものなのかと考えたが、怪盗が出てきたのなら、こちらが考えていたのとはまた違う話なのかもしれない。ひょっとして、流れのままに行けば、自分たちが怪盗と対峙することになるのではないだろうか。怪盗をやっつけてヒロインと結ばれる流れを想像したルルである。

それなら、テトではなく、ちゃんとした登場人物がいておかしくない。たとえば、少女に婚約者とか、怪盗を追いかけるかっこいい官憲とか。

とにもかくにも、少女を家に送ればわかる。ルルはテトに囁いた。

「テト、説得して。俺たちが怪盗を退けるから家に帰りなさいって」

「俺が？」

「あんたが一番なの。あの子にとって騎士様なんだから」

ルルが言うより、頼りにしている『騎士様』に言われた方がきめんだろう。テトは顔中で話しかけたくない、できれば逃げたいと語りながらも少女に話しかけてくれた。会話の内容はルルに言われたそのまま、彼の思考能力も少女に対すると停止しているようだ。

少女は彼の言葉に『輝くような』笑顔になった。安心したらしい。

「分かりましたわ。家はあちらの方向です」

途端に帰ると言い出した。ついてくると言わなくなったただけでも、もうけものだろう。これでテトのことをあきらめてくれれば最高だ。少女の案内で歩き始めて、しばらく。

雷が鳴り始めた。空もどんどん暗くなってくる。雨が降りそうで降らない。誰も雨よけになるようなものを持っていないので、足早に進んだ。

「あそこですわ」

少女が指差した先、大きな屋敷が見える。視界に認めた瞬間にル

ルは固まった。

「……ええと、あそこが、あなたのおうち、なの？」

自分の声が困惑しきっていることを感じながら、それでも口に出さずにはいらなかった。

### 三章・貫きぬくのだとこまでも・4（後書き）

ちて、どんなおうちでじゅっ...

### 三章・貫きぬくのだどこまでも・5

少女が指差した屋敷は大きく、とても重厚なものだ。歴史ある建物に見える。しかし、門は錆びつき、壁にはツタが這い、ちよつとヒビが入っていたりもして、お世辞にも人が住んでいるようには見えない。空が暗くなってきたというのに、窓に明かりも見えなかった。人間より幽霊が住んでいるというほうが似合っている。

「そうです」

少女は微塵の迷いなく頷いた。確かに少女の家なのだろう。ルルは少し遠い目になった。少女の身元を確認したくなったのだ。オルトが少女を背負ったときに軽いと言ったことを思い出した。もしかして幽霊だったりしないだろうか。

恋愛怪盗幽霊。どんな話だ一体。少なくとも、幻想絵巻や推理小説ではない。絶対にない。

テトが門に手をかけるのを眺めながら、ルルは軽い頭痛を感じた。錆びた門が大きくきしみながら開いていく。庭の様子が見えた。

……荒れている。手入れなど数年はされていないのではないか。

良家ならば庭師くらい雇って手入れをするはずだ。訪れた客が一番始めに目にする前庭ならなおさらのはず。

本当にここに人が住んでいるのかと疑問が噴出してくるのをこらえながら、屋敷まで歩いた。ドアノックも錆びている。

悪い魔法使いのところでもしたように、テトがドアノックを動かした。あそこも大きな屋敷だったが、ここまで朽ち果てた感じはしなかった。

「変ですわね。執事が出てきませんわ……」

ノックをしても誰も出てこず、ドアも勝手に開かなかった。少女も不思議そうだ。

「開けてもいいか？」

一応テトが確認する。少女は頷いたので、取っ手に手をかけて引

いた。ドアも錆びているのか、大きく音を立てる。

「お恥かしいですね。古い家で……」

「う、うん、すごいね、いろんな意味で」

少女が微笑んでくるのに、なんとか笑顔で返しながら、ルルは嫌な予感に襲われている、怪盗に狙われるくらいの家だから、由緒正しい立派なおうちのなるだろうと予想していたのに、大分違う場所に来たような気もしてきた。

「入るぞ」

テトを先頭に屋敷の中に入る。最後のニズが入ったところで、玄関ドアは大きな音を立てて閉まった。

即座に振り返って確認するルルだ。

「ニズさん、閉めた？」

「いえ、触ってもいませんが」

嫌な予感が、どんどん強くなる。

「魔道式なんじゃないのか？」

「それならいいんだけどね」

テトの言葉に胡乱<sup>うろん</sup>に返す。ルルの様子に彼も察したのか、似たような表情になった。さすが彼女と同じく本マニアなだけはある。最悪の予想を覆そうと、ルルは気合を入れるために頭を一度振って、声を張り上げた。

「すいませーん！ 娘さんを送ってきたんですけど、どなたかいらっしやいますかー！」

「いませんかー、せんかー、かー。声がこだまする。しばらく待つてみたけれども、返答はどこからもなかった。

「おかしいですね……誰もいないなんてこと、あるわけがありませんもの」

少女もようやくおかしいと思い始めたようで、オルトの背で不安げだ。

「家族で出かけ……ううん、あなたのこと探しに出てる、とか？」  
家出した娘を探すために、家族全員が不在と言うことはないだろ

う。万が一娘が戻ってきたときのことを考え、普通なら留守番もかねて誰かが残っている。そもそも、全員が不在なら玄関ドアに鍵の一つもかかっていそうなものだ。

ドアに鍵はかかっていなかった……。

「恋愛怪盗もの、だと思ってたけど……違ったし、するかも」

この屋敷の雰囲気からして。

「やな予感がするよな」

テトも呟き、玄関ドアに近寄った。さきほど、彼自身が開けたドアだ。手をかけて、開けようとし　開かなかった。

「はっはっは、開かないぞ」

「うわぁ」

ルルは思わず呻く。彼が言いたいことは分かる。そして自分の想像が当たっているのではないかと、嬉しくない確信が近付きつつある。

「いや、まだ、ほら、猟奇殺人とかの可能性も残ってないこともないよな、な？」

多少ひきつって、テトが声を上げた。言いたい心境も分かる。分かるが、逃避だ。

「どーかなー……ほぼ確実にアレかソレだと思うけど、あたし」

やけくそになって不穩に笑ったルルに、テトはさらにひきつった。やはり彼もこの状況から考えていることは一つなのだ。

「なに？　これからどうなるのさ？　猟奇殺人って、怖いんだけど！」

オルトが焦りの声を上げた。

「猟奇殺人……推理小説ですね、また」

ニズのほうは得意分野だと気にもしていないようだ。

「うつん、推理小説ではないと思うよ……」

ルルは乾いた笑みを浮かべている。テトもまた同じ。すでに確信

しつつあるのだ。

「はははー、動きたくないな」

「あははー、あたしもだけど、動かないと話進まないよね」

「奥にいったら何が起きるかなーははは」

「大体想像つくけどねーあははは」

もう笑うしかない。まさかこんな展開になるとは。

「別行動は絶対にダメだよ」

「それはダメだ。残ったやつからっていうのがお約束だろ」

「そうだよ。と、いうわけでニズさん、オルトくん、別行動は厳禁ね。これから手を繋いで歩くから。娘さん背負ってるオルトくんはあたしが服をつかんであげるから、絶対に！ はぐれないように」

暗く笑うルルと、同じような笑みを浮かべているテト。そんな本マニア二人に、ただならぬものを感じ取ったらしいオルトが、おそろおそろ声をかけてくる。

「ルルさん、テトさん……あの、これ、どういう話？」

ルルはテトと顔を見合わせ、深く息を吐いてから、彼と同時に口を開いた。

「……心霊もののホラーもの」

一瞬、時間が止まった。

「いやだあああああつ！ 帰るうううううつ！」

絶叫が玄関ホールを揺るがした。オルトはソッチ系がとても苦手らしい。

「なんですの？」

少女がビククリしている。

「いえ、なんでもありません。お気になさらず。ちょっと持病が出ただけですから」

すかさずニズが割って入ったが、表情がひきつっている。ニズも



得意分野ではないようだ。得意かどうかは置いておいて、本マニア二人は頭を抱えたい心境だった。

「恋愛怪盗からこうくるとは思わなかった……どんな本なんだこれ……」

「本当に脈絡ないよね……手当たり次第にてんこ盛りって感じ……」話のつながり方が異常だ。ありえないにもほどがある。こんな本など見たことがない。詰め込めばいいと言うものではないだろう。

「絶対帰って読もう……駄作間違い無しだろうけど読む……ウチの店買い取り金額最低ライン確定でも読む……」

ルルは心に誓った。何が何でも元の世界に戻ってこの本を読んでやる、と。全部読み終わってから、容赦なく突っ込んでやると固く誓う。

「じゃあ、サクサク進んでみようか！ 多分奥はもの凄いことになってると思うけどっ！」

「晴れやかに言わないでよルルさん！」

「はははは、進まないと帰れないぞオルト。ちゃちゃっとうこうな」「なんでそんなに明るく言うのさテトさん！」

「何を言っているのです、オルト。暗く言われたらそれこそ怖いじゃないませんか」

「確かにそうだけど、なんで落ち着いていられるのかなあニズ先輩は！」

泣き出しそうなオルトの服をつかんで、引きずるように奥を目指す。話を進めなければ文字喰いに遭遇できるかもしれないのだから仕方ない。うまくいけばここで文字喰いに遭遇できるかもしれないのだ。とにかく、屋敷の主である少女の父親の部屋を目指してみることにした。長い廊下を歩いていくと、途中の壁に赤い色がべったり張り付いているのを目撃した。生臭い匂いが廊下に充満している。

「血……！？」

少女が声を上げる。壁にこびりついている赤い液体は、引きずられるように床に続いており、廊下の奥へと消えていた。

「お父様！」

オルトの背で少女がもがいて飛び降りる、止める間もない。

「ねえ、足くじいてるって言ってなかったっけ？」

「言ってたような気がするな……」

「あの、放っておいていいの、あの人？」

とても足をくじいていいると思えない速さで少女は走っていった。

多分、そちらの方向に父親の部屋があるのだろう。このままにしておけないので、少女のあとを追いかける。

「単独行動する人から犠牲になるんだけど、あの子も犠牲になる話なのかなー」

「たまにヒロイン死ぬ話もあるからな」

「あ、そうなのですか？」

手を繋いで走っているの、あまり速くは走れない。こういう場合急いで走ると置いていかれる人物が出てきて、その人が犠牲になったりする可能性があるの、怖くて手を離すことができないルルである。テトもまた同じ心境らしく、しっかりと彼女の手をつかんで離さない。それに少し安心しながら走った。

「きゃああああっ」

廊下の先から、またもや『絹を裂くような』悲鳴が響いた。

「あ、間に合わなかったかも」

「祈りの準備しておいたほうがいいかもな」

かなり薄情な会話をテトと交わして、部屋まで辿り着く。少女はドアのところへあたり込んでいて、無事だった。どうやらヒロインは惨劇の目撃者となる流れのようである。少女は震えており、とても話を聞けそうにない。

とはいえ、部屋の中を見る勇氣はルルにもない。ちらりとテトを見ると、彼は小さく息をついて言った。

「一応、俺が確認してみるから」

「テトさん、勇者！」

「……代わるか、オルト？」

「絶対イヤデス」

ルルの目の前でテトが室内を覗き込む。最初、彼は小さく呻いた。室内はかなり酷いことになっているようだ。

「どんな感じ？」

覗く気はないが、様子は知りたいので問いかけてみる。

「かなりムゴイ」

返事は簡潔だった。あまり説明したくないのだろう。

「そっか。で、どっちっぽい？ 心霊？ ホラー？」

似たようなジャンルだが、非なるものなので対策と心構えも違ってくるのだ。

「今の時点ではなんともいえないな。これからだろ」

至極冷静な意見に、オルトが再び泣き出しそうになった。

「帰る、帰ろう、帰らないと、帰るとき、帰るんだ」

ぶつぶつと何か唱えだした。錯乱しているようである。

とにかく落ち着かせようと口を開いたときだった。

「……遅かったか」

唐突に声がした。即座にテトが反応して剣を抜き、体を向ける。

長く続く廊下から姿を現したのは、仮面をつけ、腰にレイピアを下げ、マントを羽織った男だった。

快活怪盗ロマンとかに出てくる『怪盗』そのものの印象だ。

「アレクセイ！」

少女が顔を上げた。恐怖にひきつっていた顔が、見る間に『怒りの』色を帯びる。

「あなたが……お父様を殺したのね！」

その言葉を聞いて、怪盗の姿を見て、ルルは愕然とした。

「まだ続いていたの、怪盗もの……！？」

恋愛怪盗で、心霊かホラーなお話。脈絡の全くない進行に、目を丸くするしかない。

この本は一体どんな本なのか。これからどうなるのか、本マニアでもサッパリ予測できない。

話が進むに身を任せるしかないのか。

果たして、文字喰いに辿り着くのはいつになるのだろうか？ 道のりは長くなりそうで、ルルは少しだけ頭痛を感じた。

### 三章・貫きぬくのだどこまでも・5（後書き）

本当にどんな本なんじゃー！。

#### 四章・貫くのもほどほどに・1

姿を現した怪盗アレクセイは、悲しげに息をつき、己を睨み付けている少女に顔を向けた。そして、心底からの言葉を口にした。

「間に合わなくてすまない」

「なにを……父を殺したのはあなたでしょう！」

緊迫した雰囲気が漂う。開かれたドアの向こうでは、少女の父親が無残な姿をさらしていた。

「信じて欲しい。わたしではない。わたしは、君を」

「白々しい嘘を！」

怒りと悲しみの入り混じった声だ。無残に殺された親を思う声だ。もつともな態度だ。

が。

「えーっと、ちょっと待って」

ルルはそこで少女と怪盗の間に割って入った。

「怪盗さん？」

「そうだが」

「即答してるし……ええと、どこから来たとかはこの際いいや。あの、なにか事情を知ってそうだけど、どういうことなのか教えてもらえる？　そうでないと、この子も納得できないと思うから」

とにかく事情を知ることが先決だ。恋愛怪盗心霊ホラーでもなんでも、これからなにが起るのかを予想するためには、怪盗の持つ情報がある。こちらより情報を持っているのならば、聞いておいて損はない。怪盗と向かい合ったルルのさらに前に、彼女を庇うようにテトが出た。剣を向けてはいないが、鞘に収めてもいない。何か起きる前に即座に動けるような油断ない様子で立っている。貧乏オーラが出ていても、そのあたりはちゃんと経験のある冒険者なのだ。

「ふむ、いいだろう」

テトの様子にも臆せず、怪盗は説明してくれた。

「ここは呪われた屋敷なのだ。住む者住む者がなんらかの理由で死んでいく。何故ならば、呪われた魂が住むからだ。全てを拒み、呪い、恐ろしい怨念を持つ魂。この屋敷でくらすことを奪われ、無残に殺された女性がその魂の正体だ。そして、その女性は若い女性から殺していく。若いときに殺された自分の痛みを、苦しみを思い知らせるように。だから、わたしは彼女を守るためにこの屋敷から連れ出そうとしていたのだ。もちろん、彼女の家族も避難させる予定でいた。幸せな家族が犠牲になる前に……」

説明しているうちに間に合わなかったことを悔いたのか、語尾に至るにつれ怪盗の声は悔しげに震えた。

「……ベタベタだ……」

怪盗の悔恨もどうでもよさそうにテトが呟くのが聞こえた。実はルルも同意見である。悠長に盗むだのなんだの言う前に、とつと説明すれば良かったのだ。この屋敷は呪われていて、実際に犠牲になっている人がいるとかなんとか。ルルたちの世界で呪いは物語の中の現象に過ぎないが、本の中ならば何でもありだ。呪いが実在する証拠でも何でも探せばいくらでも出てくるはずだろう。

そもそも、知っていたのなら、どうしてこの家族が住み着く前に言わなかったのか。家具やらなんやら運び込んで落ち着いたあとに、この家は呪われているから逃げろといわれても、簡単に引越せるわけもない。

「そんな、そんなこと信じられませんか！」

ルルの背後で少女が叫ぶ。至極もつともな反応だ。何も知らない住民からすれば難くせをつけられているとしか思えない。それを恐れて怪盗も行動を起こせなかったのかもしれないが、それにしても遅い。

ルルはため息をついた。間違いなくここは呪われた屋敷だろう。怪盗のいうとおり次々と人が死んでいくに違いない。ほかの部屋を探しても出てくるのは死体だけのはずだ。しかも、人間の力では

どうしようもないくらいの死にっぷりに違いない。

それがホラーのお約束だからである。

「分かった。信じる。で、どうすればここから出られるのか分かる？」

少女の嘆きも流して、ルルは怪盗に話しかけた。呪いの女性とやらに襲われるのはさすがにイヤだ。まして若い女から狙われると言うのなら、少女だけでなくルルも危ない。

すでに父親が殺されており、屋敷の中には他に生きている人はいないはずだ。最後の狙いがヒロインであるというのもまた、お約束。主人公たちがやってくる頃に事件がおきると言うのも、お約束。連発され、ルルの頭にもう一つのお約束がよぎった。怪盗もののパターンの一つ『幼い頃に無残に殺された両親の姿を目撃していた息子が、悪党に奪われた親の形見の財宝を、復讐を兼ねて集める』というやつ。そして、このホラーな展開から考えると。

「……まさかとは思うけど、その呪いの女って、怪盗さんのお母さんとか親戚だったりしない？」

「何故わたしの母だと分かった!？」

指摘に怪盗は動揺し、ルルは逆に頭を抱えなくなった。ここまでお約束だとは思わなかったのだ。呪いの女のことには詳しいのは、過去何か関係があったのではないかと。親族、近く考えれば母親、姉妹、あるいは従姉妹。

そう思っ て訊いてみたら、どんぴしゃだった。あまりにもお約束すぎて泣けてくる。

「……オチが読めてきたな」

テトも大体の内容を把握できたようだ。

「多分、屋敷が崩壊して終わるぞ」

「そうでなくても、主人公とヒロインが抱き合っ て屋敷を見上げて終わるよね。きっと」

「ってことは、心霊じゃなくてホラーだな」

「そうだね。ついでに言えば、えーと、怪盗さん？ この子の幼馴染



染みとかではアリマセンカ？」

「き、君は千里眼の持ち主か！？」

さらに動揺する怪盗に、ルルは乾いた笑みを浮かべた。

「あはははー、ソウカモネー」

ただ単に、本マニアがお約束の展開を予想しただけだ。ルルからすればたいしたことではない。ルルの横に、少女が一步踏み出した。

「まさか……あなたなの？」

さきほどまでの敵意はどこへやら。それもまた、お約束。恋愛ものの王道、幼馴染み。どこまでもグダグダである。少女の相手は婚約者ではなく、怪盗になった幼馴染みのようだ。とりあえず、駆け落ちものではなく、テトも相手から外れたのは確かだ。ちよつとホツとしたルルである。どうしてかは分からない。

『できれば君には知られなくなかった』『ずっと探していましたのに！』とかなんとか会話を始めた怪盗と少女から、一同は目を逸らした。恋愛ものが苦手なテトは、すでにかゆみを感じているのか首筋を掻いている。ニズは天井のシミを数えていた。オルトはあまり恥かしいと思っていないのか、不思議そうに話しかけてきた。

「ルルさん、すごいね。どのくらい本読んでるのさ？」

「うん、とつてもたくさん読んでるよ……」

オルトにそう答えて、ルルは何度目かの息をついた。さてこれからどうしたらいいだろう。怪盗と少女と一緒に屋敷から脱出する。

これが第一の目的だ。しかし、ホラーものだと主人公とヒロイン以外は死ね。

これが心霊ものだと、全員死ぬ可能性があつてさらに危険だ。まだホラーでよかったと思うべきか。どちらにせよ、危ないこと怖いことに変わりはない。

全員生きて脱出するには、とにかくまとまって行動する。別行動を取った瞬間に離れた人は殺される。それがホラーの王道、お約束なのだ。

お約束から逃れるためにまずすべきことは、乙女の夢がもつさ

り詰まったような会話をしている怪盗と少女を、どうにかして二人の世界から連れ出すことだった。

「えーっと、幼馴染みの再開はそれくらいにして、そろそろ脱出し  
ない？」

「え、でも、まだ母が……屋敷の者も」

少女は屋敷のほかの者が心配だという。状況を分かっているのに、先ほどの会話。分かっているのか本当にと、テトが小声で呟いているのは聞かなかったことにして、ルルは説得を開始した。

「多分無駄。探しても見つかるのは死体だけだと思う。時間取られてあたしたちまで危なくなるよ。なんたって相手は若い女から狙う  
って、怪盗さんが」

ルルの声を遮るように、廊下の奥から音がした。何かを引きずるような、そうでないような。とりあえず、二足歩行する人間が立てる音ではない。

なにが来るのか、考えなくても分かった。

「ルル、お約束だ」

「……うん、うふふ、忘れてた」

説明を始めると、現れる。これもまた、王道。理解しているテトは苦笑いし、ルルも似たような表情を浮かべ、ニズはひきつり、オルトは声もない。

「はい、走るよー、後ろは見ちゃダメね。あと、はぐれないで。はぐれたら確実にヤラれるからねー」

幼児に向かって説明するかのように言いながら、徐々に近寄ってくる音の逆方向へ、一同揃って走り出す。

「裏口へ！　そこからならば逃げ出せる！」

いつの間にやら少女を抱えて走っている怪盗が叫ぶ。

「いや、無駄だ！　向こうだってそれくらい考えてるだろ！」

先頭を走るテトが叫び返す。お約束として、こういう場合、戸口や窓の類は封じられているものだ。最初に入ってきたドアがいい例である。

「こういう場合はどうしたら助かるのですか!？」

「とにかく単独行動は不可だッ！」

「ほかにはっ!?! 怖い目に遭わない方法ないのっ!?!」

「待って、今考えてるからッ！」

走りながらルルは思い出そうと必死だ。まず真っ先にやってはいけないホラーでの行動は単独行動。次にメインメンバーから離れていちやつくこと。あとは、無謀に立ち向かおうとする。次に、ほかの人を見捨てて一人で逃げようとする。

まとまって行動すると、ちよっかいはかけられても殺されるまではいかないはず。一人でいるところを襲うのが恐怖の元だからだ。

先に行くテトの背に問いかける。

「この屋敷を出ちゃえば大丈夫だと思うんだけど、どう思う？」

「どうかな、最近はいもしつこいから、殺すまで追いかけてくるっていうのもあっただろ。読んでないか? 『レゴラジアの呪いのアパート』とか」

「あ、読んだ。そーか、アレは引越してもダメだったっけ」

一旦その部屋に住んだら、死ぬまで亡霊に追われ続ける話を思い出し、ルルは眉を寄せた。もしこれがその手のしつこいホラーだったら、どこまで逃げてても気を緩めたときにエライ目にあうだろう。

本の中の世界とはいえ、死んだらそれまでだ。

生きて帰ると決めているので、自力でどうにかするしかない。

「怪盗さん! そのところどうなの!?! 屋敷から出てもダメ!?!」

「君たちが何の話をしているのか分からないが、屋敷を出してしまえば母は追ってこない! こだわっているのはこの屋敷の中だけなのだ!」

「こだわる理由とか問い質したい気もするけど分かった! 脱出さえしなきゃいいのね!」

脱出さえしてしまえばいいと太鼓判を得たので、ルルは迷わず脱出する方を選んだ。亡霊と対決するにはどうしても魔術か魔法が必

要なのだ。だが、魔術は発動するか分からず、魔法師はいない。頼りのテトの剣は、確か魔術具ではなかったはずなので、亡霊には立ち向かえない。

「ところで、文字喰いはここにはいないのでしょうか？」

「その前に亡霊の母親から逃げないとどうにもならないだろ！」

暗く長い廊下を走り、さすがに息が切れてきたので一旦止まる。

少女を抱えていた怪盗は息を乱してもいなかった。こっちもある意味で化け物かもしれない。

「はー……とにかく、その辺の壁壊してでも外へ出るよ。文句は聞かないから」

一応屋敷の住民である少女に視線を向け、ルルは言い切った。

「助かる方法はそれだけだから、いいね!？」

「は、はい」

「あ、ここ壊したら外に出られる？」

「ああ、外に出る」

壊しても外に出られなかったら意味がないので聞いてみたが、壁一枚隔てて外らしい。

「そういうわけでニズさん、壊して」

「それはいいのですが、魔術が発動するかどうか分かりませんよ？」

ニズが壁に手を当てる　と、音がした。

「うわぁ！　来た、来たよ！」

#### 四章・貫くのもほどほどに・1（後書き）

執筆中、くる、きつと来るゝ と、頭の中で昔のホラー映画の  
テーマソングが回っておいりました（笑）

## 四章・貫くのもほどほどに・2

オルトが青ざめる。ニズは動揺を抑えて、呪文を唱え始めた。彼を守るような位置にテトが立つ。なんの魔力もない剣で亡霊に立ち向かえるわけもないのだが、それでもやらないよりはマシだと思っただのか。怪盗も少女を腕からおろし、腰にさしていたレイピアを抜いた。

レイピアを見て、ルルは重く息をつきたくなった。銀のレイピアだったのだ。亡霊の弱点をピンポイントで突つつくような武器である。テトが剣を振り回すよりよっぽど効率がいい。思わず、それをテトに貸してあげてと言いつづになり　暗い廊下に現れたものを見て、思考が止まった。

「げ」

テトは自分が呻くのを確かに感じた。最悪だ。背後で息を呑む気配がする。当たり前だ。

彼の同類本マニアが、唯一読まないジャンルの本が、視界に現れてしまった。

「い」

背後から、彼女の声が。

「いきやあああああああつー！」

いや、すでに絶叫だ。

ぎちぎちぎち。

彼女の悲鳴に合わせて亡霊だと思っていた相手は顎を鳴らした。

「亡霊じゃないよ！？」

オルトが驚きの声を上げ、ニズもおそらくは固まっているのだろう。詠唱が止まってしまっている。さすがに衝撃が大きかったのだ

ろ。テトでさえ驚いたのだから。

いたのは、虫だった。

巨大な、カミキリムシだった。

人の身長を軽く越え、六本足のくせに何故か二足歩行で、しかし猛烈な勢いでこちらへ向かってくる、虫。

「よりにもよってなんで虫だっ!？」

叫んでテトはルルに走り寄った。彼女は顔面蒼白で立ちすくんでいる。

「母は恨みのあまりにその身を虫の化身に変えてしまったのだ!」「強引すぎるだろその展開っ!」

解説してくれるのはありがたい気もするが、この状況ではどうでもいい。テトはとにかくルルの手をつかんで走り出す。残りの連中もあわててついてくるのが背中では聞こえる。母親の亡霊の化身、でかい虫の足音もついてきているが、これは要らないと思った。

「くそお、なんで虫なんだよ! ルル、大丈夫か!? しつかりしろ!」

叫ぶが、返答はない。ついて走ってはいるものの、多分彼女は茫然自失状態だ。

テトが恋愛ものを避けるように、ルルにも苦手を通り越し、決して目にしない本がある。

それが、虫もの。昆虫記とか、あるいは虫に襲われるパニックものとか、図鑑とか、なんでもいい。とにかく彼女は虫が出てくる本を嫌う。現実の虫は平気で叩き落すのに、話に出てくる虫はダメという、変な娘なのだ。

予想もしていなかったこともあり、彼女の受けた衝撃は最大のものだろう。

「ルルさん、虫が苦手なのですか?」

「ダメもダメだ。実際の虫は平気なのに、話に出てくる虫はダメなんだ。ルルはそういう本は絶対に読めない」

「はあ、想像力が立派なのですね」

「本物は大丈夫なのに、話に出てくるのはダメって、変じゃない？」  
オルトは心の底から不思議そうだった。言いたいことは分かるが、聞いている状況でもない。後ろからは微かな足音がついてきている。アレに捕まったら頭からカジられるのだろうか。それはとてつもなく痛いような気がした。気絶くらいで済むのならまだいい。本から出られる。しかし、頭をカジられると、気絶くらいではすまない気も、する。

燃え尽きているルルの手をつかんで走ってはいるが、このままではジリ貧だ。さきにこちらの体力が尽きる。特に、体力のない魔術師二人が真っ先に音を上げるはずだ。

ここは踏ん張りどころか。覚悟してテトはルルをニズのほうに押しやり、追跡者の前に出た。

「ああ、くそ！　いつか絶対魔術師になってやる！」  
絶叫と共に剣を抜く。

ぎちぎちぎちっ！　と虫（母親）も絶叫なのか顎を鳴らして前足を振り上げてきた。そのままテトを抱きしめるように捕まえようとしてくる。襲い来る前足を剣で薙ぎ払い、そのまま切り上げようとして、テトは即座に後ろに飛んだ。直前まで彼の頭が会った空間を、薙いだはずの前足が轟音をまとうて通り過ぎていく。

剣に手ごたえが伝わってこなかったから、おかしいと感じて咄嗟に身を引いて正解だった。この虫、ただの巨大な虫ではないのだ。怪盗が言っていたではないか。

『母が恨みのあまりに身を虫の化身に変えた』と。

ようするに、この虫は亡霊なのだ。そして、テトの剣は亡霊に効果のあるものではない。切れ味はやたらと良いが、魔術のかかっている武器ではないのだ。ホラー話のくせに、こんなところは現実と似通っているなんて泣きたくなくなる。

剣に補助の魔法をかけてくれる魔法師でもいれば、とも思っただいものねだりである。

虫の前足を避けながら、テトは怪盗に声を張り上げた。



「お前も手伝えよ！ 何のための銀のレイピアなんだ！？」

亡霊に対する武器を持つているのは怪盗だけだ。しかし、怪盗は葛藤しているようだった。ヤツにとっては虫でも母なのだ。

例えば足が六本、顎をぎちぎちいわせて、あまつさえ背中の中を羽で飛ばうとして天井に引っかかっている、母は母なのだろう。

「殺虫剤ないですかね？」

「熱湯はどうかね？」

「じゃあ台所でお湯を沸かしてきましょう。テトくん、もう少し頑張ってください」

「ちよつと時間かかるかもしれないけど」

魔術師二人はのん気にそんなことを言い出した。熱湯を待つほど気は長くないし、その前に命がなくなる気がしてきたテトである。背後のルルからはまだ反応はない。

「待つてられるか！ おい、そのレイピア貸せ！」

虫（母親）のスキを見て怪盗に走りより、その手からレイピアを強奪して駆け戻る。勢いのまま懷に飛び込み、レイピアを押し出した。

固いクッションを何枚かまとめて貫いたような感触が手に伝わる。確かな手ごたえを感じる前に、頭のとっぺんまで来るような嫌な予感が駆け抜けた。冒険者としての直感だったのか。テトはレイピアにこだわらず手を離し後方に飛び退った。

彼の目の前を前足が掠める。もう少し遅かったらゾツとする展開になっていたはずだ。

虫母は何か喋るかのように顎を鳴らし、それから壁の中に消えていった。残されたレイピアが床に落ちる。

「……逃げた、か？」

視界からもつとも苦手なものが消えて、ようやくルルは我に返った。正気に返るなり彼女は口を開く。

「逃げよう今すぐここから出るのもう今すぐホラ早く出るったら出

るの裏口はどこッ!？」

一息で言い切った彼女の剣幕に、少女と怪盗は目を丸くしながらもアッチだと指をさした。　すぐさまそちらのほうに足を向け、見えたドアから外に出る。

亡霊はテトの一撃でかなりのダメージを受けていたらしく、ドアを封じることでもできなかったようで、アッサリと脱出できた。

敷地内を出、何故かある小高い丘の上から屋敷を見下ろした。視線の先で屋敷の屋根が崩れた。

「……ああ……!」

少女が『泣き出しそうな』声を上げる。屋敷は崩壊の兆しを見せていた。

「母だ……最後の力で屋敷を……そこまで、あの屋敷にこだわるのか……」

怪盗も辛そうにそんなことを呟いている。

「テトさんルルさん、あれもお約束ってやつなの?」

「うん、そう」

「王道だ」

「なるほど……」

シリアスな空気を漂わせている怪盗たちの横で、本マニアたちに教えを乞っている魔術師たち。こちらには緊張感より脱力感が漂っている。

そんな微妙な空気に気がついていないのか、怪盗がこちらに顔を向け、ありがとうと言ってきた。

「おかげで、母も解放されただろう……」

「私からお礼を言わせてください。ありがとうございました」  
少女と怪盗はすっかり恋人同士のような印象である。

「あ、気にしないでいいから」

「そうそう。俺たち急ぐしな」

乾いた笑みでこたえて身を引くルルと、同じくテト。

「そつえば……重大な任務の最中だとおっしゃっていましたがもの

ね」

「そうなのか。それは悪いことをした」

「いえいえ、気にしないでいいから」

「そうそう。じゃ、俺たち急ぐから」

手を振って、ルルはテトと一緒にニズとオルトを引っ張ってその場を離れた。

怪盗と少女はいつまでも一同を見送っていた 完。

「何故そこまで急ぐのです？ まあ、アレに付き合いたくない気持ちも分かりますが」

「お礼くらいはもうちょつと言わせてあげてもいいような気がするけど」

ニズとオルトは亡霊から逃れた安心感からか、寛容な気持ちになっ  
ているらしい。ルルはそれどころではない。虫の一件もあるが。

「だって、突っ込みたくなるから。ね？ テト」

「ああ、そーだな……」

「え、何を？」

「どんなことをです？」

訊かれたので、心置きなく言葉を口にした。ここからならば怪盗と少女に聞こえないだろうし。

「あの子の家族を怪盗さんの母親が皆殺しにしたんだけど、いいの？ とか、家族を皆殺しにされても怪盗さんのこと好きでいられるの？ とか、母親が亡霊になってるの知ってて、あの子が危ないの知ってて、なんでのんきに盗むって予告なんかしてたの？ とか、家なくなっただけで、これからどうするのかー、あの子絶対生活能力ないよね、怪盗さんちゃんと弁償するかこれからの人生面倒見てあげるの？ とか、恨みが残るような壮絶な事件のあったような場所、調べないで住み着いたの？ とか、先に犠牲者出ていたっぱいのにも知らなかったの？ とか、なんで虫なの！？ とか」

一気に話して、静かに息を吐いた。無論、一番言いたかったのは、最後の一言だ。

「もろもろこんなことを言いたかったの」

「同じく」

テトも同意した。似たようなことを考えていたのは、さすがに同類といえよう。

「とりあえず、忘れようと思ってるんだけど、どう思っ？」

「忘れよう」

「忘れて正解だと思います」

「うんうん」

そして、ドラゴン退治に話は戻る。

四章・貫くのもほどほどに・2（後書き）

あ、戻るんだ（オイ）

#### 四章・貫くのもほどほどに・3

北へ。北へ。ひたすら北へ。いつの間にか空は真っ暗になっていた。視線の先にはとんがった頂上の山がある。どんな道筋を辿ればこんな場所に出るのか、実際に歩いているのに分からなかった。巧妙に場面転換が行われたらしい。気がついたらここにいたとしか表現のしようがなかった。暗い空に、時々雷光が走る。雨は降っていない。ひたすらに雷が鳴るだけである。

いかにもこの先に強くて悪い強敵がいそうな感じだ。

「分かりやすいよね」

「あー、迷わなくていいよな」

ここまでやられると、もはやそんな感想しか出てこない。山道を登っていくと、途中に大きな岩があり、そこに立派な剣が刺さっているのを目撃したときは、もはや突っ込む気力もなくなっていた。宝玉のはまった、いかにも特殊能力をもっていそうな剣だ。

「……王道、だよね、うん……使い古されてるけど」

使いまわされてカビが生えていそうな展開だ。

「なんつーか、ここまできたら、いつそ最後まで貫いてくれとか思うのは俺だけか？」

テトは遠く違う場所を見ているようだ。ニズは興味深そうに、オルトは目を輝かせて剣を調べている。研究好きの魔術師らしい態度だ。

「すごい！ 伝説の剣と違ってやつかな？」

「かもしれませんか。かなり立派な装飾が施されていますし。テトくん抜いてみてくれませんか？」

「はいはい……きつとドラゴンスレイヤーだよ。竜殺しの剣だよ。魔剣だよ。伝説の剣だよ。賭けてもいいぞ」

やる気なく返して、テトは豪奢に作りこまれた青い柄に手をかける。

「っ！」

触った瞬間に彼は小さく息を漏らした。

「どしたの？ 大丈夫？」

「ああ、ちよつとびりつとしたただだ。やっぱりただの剣じゃないな。ま、触れるだけマシか」

呟いて、彼は力を込めた。そのまま引き抜こうとしているようだが、剣は動かない。お約束として、ただ岩に刺さっているだけではないのだろう。

「力じゃダメっぽいね」

「そうだなー、ここはアレか。いっぱつ叫ぶしかないか」

呟いて、テトは棒読みでこう言った。

「俺は勇者だー、ドラゴンを倒し、姫を救うために力を貸してクレー」

とてもやる気がない。それでも剣は少し動いた。

「お？ んー、抜けそうで抜けないな」

「それじゃもう一押し」

ルルは剣に近寄って、両手を祈るように組み合わせ、剣に語りかけてみた。

「お願い、力を貸して。あなたの力がどうしても必要なの」

どこかで読んだようなセリフだけを見ると可憐なヒロインだが、かなり棒読みで感情もこもっていなかったので、ルルにヒロインの資格はなさそうだ。

それでも、剣は抜けた。あんなセリフでも認めてくれたようだ。いい加減極まりない。

「抜けるし」

「グダグダだな、本当に」

「あたしでももうちよつとひねるよ……どんな人が書いたの、この本」

「俺でももう少しまともなもの書けそうだな……」

文才がなくても、この展開よりはマトモなものがかけそうな気が

してきた。内容で判断するなら『古書の家』での買い取り価格は間違いなく最低だろう。お人よしのマイヤーだって買取に関することには厳しい。

「そろそろ文字喰いに会いたいね」

「真剣に帰りたくなってきたな」

脈絡のない内容のわりに、王道が続くので、食傷気味になってきた。さすがにここまで続くとイヤになってくる。

「ひよつとして……こんなに歪んだ内容なのは、文字喰いのせいなのではありませんか？」

ニズが指摘してきた。

「あ、そっか。文字喰いのせいで力を失ってるって精霊は言ってたし、文字を食うくらいだから、本の内容をメチャクチャにしている可能性もあるね。さすがニズ先輩！」

オルトが賛成している。確かにここまで脈絡のない内容はおかしい。文字喰いが本の内容を歪めているという仮説は、正しいかもしれない。

「許せないっ！」

ルルは猛然と立ち上がった。こぶしを握り締めてテトに顔を向ける。

「テト！ 絶対に見つけて倒すのよ！」

「おうっ！」

本好きとしては、面白いかもしれない本の内容を歪めるような怪物は宿敵、天敵。存在を許してはいけない。必ず滅ぼさなければいけない敵である。

「とつとドラゴン倒して文字喰いを見つけて倒すぞ！」

「うん！」

目の色を変えて山頂を目指すルルたちを、魔術師たちの声が追う。

「すごいね……本当に本、好きなんだ」

「まさしくマニアですね。すでに称号ですよ」

人が来るとは思えないのに、何故かちゃんと道がある急勾配の斜



面を、息を切らして登り、開けた場所に出たとき、ルルたちは息を呑んだ。

ドラゴンの巣だったのだろう。財宝好きの伝説を持つドラゴンらしく、辺りには黄金色に輝く山がいくつもあった。金色の山の中心に、赤い体皮のドラゴンが倒れている。方向をあげて暴れているものの、その場から逃れることができないようだ。

その、ドラゴンの巨体に大きな黒いドラゴンが喰いついている。目を見張り、よく見てみると、その黒が蠢いているのが分かった。中には青や赤の色も少し混じっている。

黒いドラゴンは、蠢く文字でできている！

「あれが、文字喰い？」

ドラゴンに喰いつき、巨体を崩していくのは、間違いなく文字の塊だった。硬いものを無理やり削り取るような異音をたてながら、ドラゴンを分解していくように喰らっていく。文字喰いが喰いつく箇所は黒く染まり、口腔にあたる場所から吸収されていった。

呆然とその様子を見ていて、ルルはほかのことに気がついた。ドラゴンと文字喰いの後ろに、何かが転がっている。

華奢な腕。断面は黒く染まっている。指先には可愛らしい指輪がはまっていた。

「あれ、お姫様！？」

ドラゴンにさらわれたはずのお姫様。文字喰いの犠牲になってしまったようだ。

今、ドラゴンも喰われようとしている。巨体はもう半分近くが文字喰いの口に収まり、ドラゴンの抵抗も弱くなってきた。

「テト！」

「おう！」

テトが走り出す。さっき手に入れたばかりの伝説の剣っぽいものを振りかぶり、迷わずに文字喰いに振り下ろした。切れ味の良さそうなの刃が文字喰いの黒い体に当たる瞬間、文字喰いの体を形成している文字が、刃に絡みついた。

削られる音を立てて刃が崩れていく。

「のわっ!？」

声を上げてテトが手を離す。文字喰いから伸びた文字は、鋭い刃だろうとかまわず喰らっていった。大きな力を持つだろう伝説の剣でも関係ないようだ。

「テトくん、離れてください!」

ニズが叫んで詠唱を始める。あわててオルトも詠唱し始めた。ルだけは難しい表情で状況を見守っている。

文字喰い。文字を喰らうもの。

大層強そうな剣でも食べている。傷を負った様子はない。刃が当たる前に喰らいついたのだろう。柄まで綺麗に食べてしまった。

「刃風弾!」

「烈氷球!」

ニズとオルトが同時に叫ぶ。早く唱え始めたニズと同時だったのは、オルトの唱えた呪文が初級のもので簡単だったからだ。

魔力が具現化した瞬間、音を立てて霧散した。そよ風と多少の湿気が残っただけだった。

「……ダメですね。風系ならいけるかと思ったのですが」

「氷でもダメかあ」

彼らは様子見で放ったのだろうが、属性に関係なく無効化されることはルルにも分かった。本の精霊の言ったとおり、本を傷つけるような魔術は例外なく無効化されるらしい。

#### 四章・貫くのもほどほどに・3（後書き）

やっと文字喰い登場！ ですが、どうやって倒すのか？

#### 四章・貫くのもほどほどに・4

「剣も魔術もダメなのか！ どうしろっていうんだよ！？」

テトが声を上げる。

確かに言いたいことはルルにも分かる。剣は喰われ、魔術は意味がない。これでどうやって文字喰いを倒せと言うのか。呼び込んだ精霊も、もう少し対抗する手段を考えてくれればいいものを。

物語ならば、この辺で空から光が差して、ナゾの声が弱点を教えてください、強い魔術を唱えてくれたり、強敵を弱体化してくれたりするものだ。

ルルは空を見上げてみた。暗いままで稲妻が走るだけだった。

助けは期待できない。それだけは理解できる。本の精霊は文字喰いに近付くこともできないと言っていた。本の中の生き物は文字喰いに近付くことすら命取りになるのだろう。

ふと、天啓のような考えがルルの脳裏をよぎった。本の精霊が自分たちを引きずり込んだ理由は？ 現実世界の人間でなければならぬ理由は何か？

もしかしたら。思いついたので実験してみることにした。

「テト、あんたの剣抜いて、切ってみて」

「え！？ いやだ！ 喰われるだろ！ 俺これがなくなったら戻ったときに仕事ができなくなるじゃないか！」

食いつづけるとテトは腰の剣を押さえた。戦士である彼にとって、剣は大事な相棒である。気持ちもよく分かるのだが、まさか生身で実験するわけにもいかない。

「いいから。もし喰われたとしても、あんた今フトコロあったかいから、新しい剣くらい買えるでしょ！」

本を魔術師ギルドに売っぱらったため、テトは結構な金額を手に入れている。剣の一本や二本余裕で買えるだろう。にっこりと笑いかけて、ルルは畳み掛けた。

「それに、戻れるかどうかはテトにかかってるよ？　あたしたちは、役に立てません」

「くっ」

確かにそうなので、テトも反論してこなかった、魔術師二人が役に立たないし、ルルは一般市民。冒険者のテトが頑張るしかないのだ。

彼も理解しているようなので、剣を引き抜いて走っていく。多分にヤケクソのようだ。

「うおおおおおっ！」

掛け声が捨て鉢にも聞こえた。文字喰いはドラゴンを喰うのに夢中らしく、ほとんど無防備だ。テトが剣を振り下ろす。

文字喰いは　喰らいついてこない。剣が切り裂いた場所の文字が蠢き、痛がっているようにも見える。

ルルは自分の予想が正しいと理解した。文字喰いは、現実世界の物を喰えないのだ。これこそ本の精霊が自分たちを引き寄せた理由なのだろう。

文字喰いは形容しがたい雄たけびを上げ動き出した。ドラゴンから離れ、形を変えながらテトに向かっていく。ドラゴンの形をしていた体がぐにやりと歪み、サイズはかなり大きい人型になった。狙う相手の形を取る習性でもあるのか。

「テト、そのまま斬って、斬って！　そいつ、現実世界の物を喰うことができないのよ！」

「なにい！？」

「見てて思ったの。文字喰いでしょ？　文字を食べるんでしょ？　ドラゴンもお姫様も本の中の存在で、突き詰めれば文字！　でも、あたしたちは違う。本の精霊が呼んだほかの存在で、文字じゃない！　精霊も、だからあたしたちを引き入れたんだよ！」

「なるほど！」

ルルの説明に魔術師二人が声を上げた。彼らは背中に背負った武器に手をかけ、一步を踏み出した。戦おうと思ったらしい。

が、次の瞬間、文字喰いが鈍重に振り下ろした腕が地面をへこませたのを見て、止まる。

「……喰われないだろうけど、殴られたら死ぬ、かな？」

オルトがルルを見る。ルルは頷いた。あの勢いで殴られたら。

「多分死ねるね……」

即死コース一直線だろうと思う。ニズが即座に武器から手を離れた。

「見学していきましょう。テトくん、頑張ってください」

「テトさん頑張ってたね！」

「そもそも、私とオルトの武器は途中で手に入れたものですから、喰われますよね」

「あ、そうか。そういえばそうだった。さすがニズ先輩」

「こんの役立たずーッ！」

テトの絶叫も無理はないだろう。孤立無援もいいところだ。

「ガンバレ男の子」

ルルも応援してあげようと声をかけたが、彼は嬉しそうではなかった。まあ、当然だろう。テトが必死で斬りつけると、文字が飛び散り、宙に溶ける。確実に攻撃は効果を發揮している。ちよつとずつ文字喰いは小さくなっていったが、あくまでもちよつとずつである。小さいナイフで大木を削っているかのようだ。ドラゴン並みの体軀を地味に削っていくのは気が遠くなりそうな作業で、しかも相手はおとなしく削られてもくれない。攻撃を避けながらなので、テトも大変だ。このままでは遠からず彼の体力が尽きるだろう。

そうなれば、ルルたちも戻れない。

ルルは眉間にしわを寄せた。帰れないと、これから先出会うはずの本たちも読めない。

『古書の家』にも帰れない。『アウローラ』にもまだ出会っていないと言うのに。

決心のときだ。皆で生きて帰るか、ここで死ぬか。考えるまでもない。ルルは死なせるのはイヤだったし、死ぬのも

イヤだった。

帰らなければならないのだ　どんな手段を使つてでも。

彼女は口を開いた。この上もなくイヤだったが、命には代えられないのだ。唇から流れ出す言葉を聞いたニズが驚いている。

「ルルさん、それは……あなた、魔法を使えるのですか!？」

そう、今彼女が唱えているのは『魔術』ではなく『魔法』だ。魔力を吸収し、拡散させて現象を起こす魔術ではなく、魔力を吸収し、固定することによって現象を確定する魔法である。

ニズの問いに仰天したのはオルトとテトだった。

「ええ!　ルルさん魔法使えるの!？」

「本当か!？　何で今まで教えてくれなかったんだ!？」

彼らの言葉を聞きながら、ルルは呪文を唱え終わった。集う魔力へ確定の言葉を口にする。

「祝福舞!」

柔らかい輝きが、文字喰いを包んだ。

「ルル!？　向こうを回復させてどうする」

テトの声は、爆発音と煙に掻き消された。魔術師二人が目丸くしているのをルルは感じ取った。無理もない反応だ。一般的に、魔法は回復と補助を司る。断じて煙や爆発が起こるようなものではない。分野違いでもそれくらいの知識はあるのだろう。

煙が晴れ、文字喰いの姿が露になった。人型の肩の辺りがこっそり抉られたようになっていた。

男三人には何が起こったのかわからないようだ。それも当然である。状況を理解しているのはルルだけだ。

彼女はかまわずに呪文を唱え始めた。それに今度はオルトが目丸くする。

「ルルさん??　魔術も使えるの!？」

次に彼女が口にしたのはれっきとした魔術の呪文だ。見習いでもその辺は理解できたのだろう。ニズなど言葉もない。それもそうだ。系統が両極である魔術と魔法を双方使いこなすことができるものな

どそうはいない。

しかも、ルルのような若さで双方を扱うことができるものなど、  
ほぼ存在していないはずだ。

「炸爆陣！」

解放の言葉が紡がれる。

……間があつた。普通、発動は瞬間だ。先ほどニスとオルトが魔術を使ったときには、瞬間で発動し、無効化していたが、ルルが使った魔術は発動さえしていないようにも見えた。その理由をよく知っている彼女は、呻く。

「うあ、まず……っ！ テト、離れて！」

「へ？」

「ニスさんとオルトくんは伏せる！」

「「え？」」

焦って指示を飛ばす彼女の剣幕に、反射的にテトは文字喰いから離れようと走った。咄嗟に距離を稼いだ瞬間、文字喰いの胸部分がぐつと縮まったように見えた。

「あああ、伏せてー！ーっ！」

ルルの悲鳴に、咄嗟に全員が伏せた、次の瞬間。

無音の衝撃が炸裂した。音が『しなかった』のではなく、『聞こえなかった』のだ。耳が聞こえなくなるくらいの衝撃が走り抜けるのを全員が感じていた。

衝撃が消えた後、しばらく起き上がれなかったくらいだ。辺りには土煙が湧き上がっており、ほとんど何も見えない。互いの姿さえ視認できないくらいだ。

「……ルル……何、したんだ……？」

一番頑丈なテトが起き上がったらしく、真っ先に訊いてくる。

「魔術……だけ……」

なんとか起き上がり、彼女も答えた。

「普通の魔術では……こうはなりませんよ……何をどうしてもするのですか……？」



「死ぬかと思った……」

魔術師組はぐったりと言ってくる。

「というか、お前が魔法も魔術も使えるなんて知らなかったぞ？  
凄いことなのに、なんで今まで言わなかったんだ？」

「……見てわかったでしょ」

テトの言い分ももつともだが、ルルとしても言いたくなかったのだ。  
魔術も魔法も使えない、などとは。

「？ 分らん」

立派に使っていたように見えるのだろう      彼から見れば。

「暴発するの」

「へ？」

「暴・発・するの！      魔法も魔術も！      あたしが使っと！」

#### 四章・貫くのもほどほどに・4（後書き）

ええ、ルルは暴発魔術師ですw  
まともに魔術・魔法が使いませんw

#### 四章・貫くのもほどほどに・5

沈黙が落ちた。煙が晴れ、互いの顔が見えるようになる。テトは案の定きよんとしていた。ニズは目を見開き、オルトはよく分かっていないような表情だ。

「暴発、ですか？」

「そう。魔法も魔術も使えないの。どうやっても暴発するから。マトモに発動しないのよ。見たでしょ、魔法なのに魔術みたいに発動して、魔術はとんでもない威力で発動するのを。あれ、狙ってやってるんじゃないの。暴発したの。まあ、だからこそ、この世界でも発動したんだろうけど……」

ニズとオルトの魔術は発動しなかったが、ルルの魔術はとんでもない形で、しかし一応発動した。それは暴発という形だったからか文字喰いのほうに視線をやると、上半身にあたる部分が消失していた。動きはかなり弱々しい。多大なダメージを与えたのは間違いない。

「け、結果は良かった、みたいだな」

あそこまでテトが一人で削るのは難しかっただろう。だからこそルルは暴走すると分かっている魔術を行使したのだ。

「もう一回あたしが暴発魔術使えばトドメさせそうだけど、もうしないからね？ 同時にあたしたちも死にそうな気がするし」

「うん。止めてくれ。俺、頑張るから」

「「頑張つて」ください」

ニズとオルトが口を揃えて言うのを聞いて、ルルはなんとなく腹が立った。こうなることは分かっていたのだが、目の前で言われるとムツとしてしまう。好きで暴発魔術・魔法を使うようになったわけではないのだ。彼女とて勉強を始めた幼い頃は、まともな魔術と魔法を行使していた。目指すものがあつたのだ。だが、今はそれも断念せざるを得なかった。

暴発するようではとても目指せない夢だからだ。文字喰いに走るテトを見送りながら、彼女は遠い目になった。過去を思い出すから、魔術も魔法も使いたくない。ルルは魔術も魔法も嫌いなのである。ニズが彼女を見て何か問いたそうな顔をしているが、取り合わなかった。

テトは地道に文字喰いを削っている。下半身しか残っていない文字喰いは、彼を踏み潰そうとよたよた動いている。弱っているので動きはかなり鈍く、彼の力なら避けるのは簡単らしいが、半分とは言っても、巨大だ。削りつくすのはまだ時間がかかりそうである。ひたすらに、持久戦。

なんととはなしに眺めながら、ルルは呟いた。

「物語の中でこんな最終戦も珍しいなあ」

「あ、そういうものですか？」

「うん。大抵さ、がーっと強い魔術とかが飛び交うものでしょ。最後の敵相手なら」

「見ているだけなので手持ち無沙汰だ。しゃがみこんで木の枝を拾った。」

「あ、そうだね。ぼくも冒険小説とかちよつと読むけど、最後の敵って仲間たちと力を合わせて大技を使って倒すよね」

「そうそう。オルトくんも本読むんだ？ おすすめある？」

「ええとね、ぼくが読んだ中で面白かったのは『ルーンサイクルの狼』シリーズ」

「ああ！ あれ面白いよね！」

「ルルさんのおすすめは？」

「最近読んだので面白かったのはねー『エンドリアルルールシュ』って本」

「会話をしながら山を作って、テトを除いた三人で山崩しゲームをし始める。」

「戦士と一対一で、しかもただ削っていくだけって、今まで読んだ物語でも見たことないから、珍しいと思う」

「仲間、見ているだけですしね。やれることがないので仕方ないといえはそうなのですが」

「現実の冒険者でもこんなことないんじゃないの？」

「時間かかりそう……あ、崩れちゃった」

「オルトの負けですね。まだやりますか？」

「五ファット並べなら負けないよ！」

なんともやる気のない最終戦闘である。戦っているのは戦士のテトだけで、ほかはヒマをもてあまして遊んでいる。眺めてもいないのはちよつと薄情かとルルも思ったが、テトがケガをすることはなさそうだとも思うので、放っておいた。

「お前らな、せめて応援しようとか思わないのかッ？」

寂しくなってきたのかテトがそんなことを叫んできた。

「俺がやられたらお前らも帰れないんだぞ！」

「え、でもルルさんがいてくれたら帰れそうない気がするよ？」

「ああ、確かにルルさんがいてくれたら帰れそうですね……巻き込まれて死ななければの話ですが」

神妙な顔で頷く魔術師二人に、何も言い返せないルル。

「あはは……テトガンバッテー」

「棒読みかよッ！」

叫んでテトは文字喰いに斬りつけていった。とても悔しかったようだ。猛烈な勢いで斬りつけていって、しばらく。

「なあ、誰かちよつと代わってくれ」

激情で動いて体力が尽きかけているようだ。

「テトくん、ちゃんと体力配分を考えて戦わないといけませんよ？」

「のんきに陣地取りやってる奴に言われたくない！」

「えっと、じゃああたしがトドメの一撃でも？」

本当はイヤだけれど、テトが疲れているようなので、ルルは拳手してみた。

「……それは最後の手段で……」

男三人に揃って却下された。先ほどの暴発は彼らの心に深い傷を

負わせたようだ。確かにルルもちよつとアレは死ぬかと思った。

「剣貸すから削ってくれ。俺もちよつと休みたい」

「え、でもぼくらがアレに蹴られたら避けられないよ!？」

「そうですね。死ねます」

「だいが動き鈍くなつてきてるから大丈夫だつて」

男同士で押し付けあつてゐる。体を動かすことが得意でない魔術師二人はイヤがつてゐるが、テトだって疲れていて休みたいのだから。

まあ、気持ちは分かる。一人で頑張つてゐたのだから、少しくらい休んでもバチは当たらないかもしれない。戦闘の最中でなければ。

ルルは目を丸くした。蠢く文字たちが鳥の形に変わろうとしてゐる。

文字喰いは逃げるつもりだ！

「わーっ！ 逃げる！ 逃げちゃう！ テト、文字喰いが飛んで逃げる！」

彼女の上げた声にテトもぎよつとして振り返つた。確かに文字喰いは変形しようとしている。ルルの暴発とテトの努力とで減つた体では力が足りないのか、最初見たときよりも変形には時間がかかつてゐた。

鳥の姿で飛ばれたらルルたちに追いかける術はない。また本の中をさまよう羽目になる。

「うわあつ、待て待て！」

テトが叫んで走り寄つた。無我夢中で剣を振るゐ始める。彼がここで頑張ってくれないと、それこそ逃げられる。

文字喰いのほうも必死なようで、テトが削る勢いに負けないように変形していく。

「まずいですね、逃げられます」

ニズが槍を手に走つた。オルトもまずいと感じたのか、ニズよりは迷い、それでもモーニングスターを手に文字喰いに走り寄る。

「は！」

「えい！」

威勢よく彼らが振るった武器は、文字喰いに当たるなり文字に引き込まれた。『伝説の剣』と同じように。

「あ」

「何やってんだっ!？」

見ていたルルもテトの叫びに同感だった。焦るあまりに、本の中で手に入れた武器だということを綺麗に忘れていたのだろう。

槍とモーニングスターを喰った文字喰いは、少し回復したようだ。変形し終わった翼を広げて飛ぶ体勢である。

飛ばれたら終わりだ。ルルも焦った。またあの脈絡のない本の世界をめぐるのはちよつと遠慮したい。

魔術か魔法を使うか。しかし暴発したらどの程度の規模になるか見当がつかない。あわてている精神状態で使うと、さっきよりさらに暴発の規模が大きくなるか小さくなるかのどちらかだろう。

「えーと、えつと」

ルルはあわてた。ただでさえ彼女の魔術や魔法は危ないのだ。せめて安定した精神で詠唱できるように時間を稼ぎたい。文字喰いの足止めをできるようなものがないかと、服を探る。

魔術具の一つでも携帯していればよかったのだが、あいにくと普通の古本屋店員のルルに、魔術具を持って歩くような習慣はなかった。冒険者でもないのに攻撃的な魔術具を持って歩くなど、ただの危険人物だろう。

仕事帰りに直接ギルドに行ったので、身につけているものといったらエプロンだけだ。

何かないか。なんでもいい、とにかく時間稼ぎを。

エプロンのポケットに何かの感触。

今にも飛び立とうとしている文字喰いに、ルルは片っ端から投げた。布が飛び、紙やすりが飛び、届かないで落ちる。

その中で、唯一、小さなものが文字喰いまで届いた。

一瞬、間があった。

声のような吼え声のようなものを上げて、文字喰いがのた打ち回り始める。飛んで逃げるところではない。苦痛を感じているのか、もはやルルたちには目もくれなかった。あまりの暴れっぷりに、巻き込まれてはたまらないとテトたちがルルの傍に逃げてくる。

「ルル、何投げたんだ？」

呆然とテトが問いかけてくる。同じように呆然と答える。

「し、仕事道具」

「って、何を？」

「……消しゴム……」

「……ああ……」

男三人はどこか遠くを見ているような目で納得したようだ。心境的にはルルも同じだった。まさかこんなものが役に立つとは。

古本屋店員三大アイテムのひとつ、消しゴム。

暴れていた文字喰いは完全に動かなくなっている。

「……最後のボス、消しゴムで死す……」

「最終兵器消しゴム……」

「伝説の消しゴム……」

「……トドメが、消しゴム……」

なんともいえない雰囲気漂う中で、文字喰いが溶けるように崩れていった。本当にトドメになったようである。後に残ったのは、角の削れて使い込まれた様子の、ちよつと汚れた消しゴムがひとつ。ルルは近寄って消しゴムを拾い上げた。何の変哲もない、ただの消しゴム。

しかし、文字喰いには絶大な効果を及ぼすものだったのだ。

伝説の剣より強い消しゴム。魔術より強かった消しゴム。最強の、消しゴム。

「……俺は一体何のために体力使ったんだ……」

「最初から分かっていたら苦労はなかったのですがね……」

「あはははは……はは、は」



なんと言つてよいのか分からないのだろう男たちの声を背に、ルは消しゴムをポケットに収めた。同じように布と紙やすりも捨てポケットにしまう。大事な仕事道具を本の中に置いていくわけにはいかない。

「まあ、倒せたみたいだし、良かったよね。これで帰れるでしょ」  
文字喰いを倒し、本の精霊の依頼は無事に果たせたのだ。

『ありがとうございます……』

聞き覚えのある声があった瞬間、周りの光景が一変した。

#### 四章・貫くのもほどほどに・5（後書き）

最終ボス戦、消化不良（酷いオチw）

## エピソード・理解、納得、苦笑い

見覚えのある七色の煙が漂う空間に、ちらちらと瞬く光が眼前に浮かんでいる。

本の精霊が姿を現したのだ。どこかで様子を見ていたと思わんばかりのタイミングの良さである。

「文字喰い、倒したみたいなんだけど……あれで良かったの、かな？」

消しゴムで。

ルルは小さく問いかける。アレで倒したといえるのか、正直言えば自分でも疑問だ。

「あのう……戦ったのテトさんで、倒したのルルさんだけど、ぼくたちも帰してもらえる？」

何の活躍もしていないとオルトがおずおずと問いかけた。

「はい、ちゃんとお帰しいたします。文字喰いの脅威はなくなりましたから……消化される前だったようで、文字たちも元に戻りましたし……登場人物以外の方に残られても困りますので」

細く精霊はそう言ってきた。ルルはちよつとだけ苦笑した。無事に帰してもらえるようである。要約すると『もう要らなくなったので帰れ』と言われているのだが、そのことに気がついてるのは彼女だけのようだ。慇懃無礼な精霊である。

「でも、たまたまルルで良かったよな。なんてったって消しゴム持ち歩いているヤツなんてそうはいないぞ」

テトは疲れた様子で、それでも笑っていた。やはり帰れることが嬉しいのだろう。

たまたま仕事帰りで、ルルのエプロンに消しゴムが入っていたから、文字喰いを逃さずに倒すことができた。消しゴムがなかったら確実に逃げられて、さらなる放浪を続けていたことだろう。

「うーん、でも、たまたまだったの？ あたしが消しゴムを持って

いたから引き込まれたってことはない？」

精霊が人を引き込む基準が分からなかった。魔術師だけが引き込まれているかと思いきや、テトも一緒だったのだから。

「はい、たまたまです。私は、私を読める人しか引き込めないものですから……」

古刻語で書かれた本。だから古刻語を読める人しか引き込めない。そう説明されてルルはテトを見た。本を持ち込んだのは彼なのに、彼一人のときに異常は起きなかった。古刻語が読めなかったからだ。「でも、あたしと一緒にテトが引き込まれたのは？ どうして？」  
『近くにいたからです……』

聞いてみれば謎もなかった。たまたま古刻語が読めるルルの近くにいたから、テトも引き込まれたのだ。偶然ではあるが、テトが一緒でなかったら文字喰いのところに辿り着く前に力尽きていただろう。何せルルは暴発魔術師であり、暴発魔法師。文字喰い以上に危険なのだ。

「テトがいなかったらここまで来られなかったよ。ありがとう」

「いや、こっちこそ。ルルがいなかったら文字喰い倒せなかっただろうし」

テトは暴発に巻き込まれたことを水に流してくれたようだった。

「それにしても、古刻語を読める人しか引き込めないとは。ヘタをする魔術師か魔法師しか引き込めなかったのでは……？」

ニズの呟きはもつともだ。魔術師か魔法師以外で古刻語を読める者など、それこそ学者などの専門家で、戦闘など論外の人物ばかりのはず。

「偶然でもテトさんがいてくれて良かったよね、ニズ先輩」

「ええ、本当に」

魔術師二人の実感がこもった会話に、ルルとテトは苦笑した。魔術を封じられた魔術師が、文字喰いに対抗できるわけがない。実際にニズとオルトのコンビだけだったら、途中で力尽きていたはずだと明確に想像できる。最初に大ケガで発見された魔術師のように。

しかし、本为天敵、本マニアの宿敵である文字喰いは倒れたのだ。本の世界の平和は守られたのである　暴発と消しゴムによって。  
「さ、これで本も大丈夫だよあなたね？　あたしたちを元の世界に戻してくれる？」

『はい、本当にありがとうございました。これで私は消えずに済みました……後世に知識を残していけます』

光が強くなる。文字喰いの影響から抜けて、精霊は完全に力を取り戻したようだ。

「……後世に、残すのか？　この本……」

テトの呟きがルルの耳を打つ。彼の言いたいことも分かる。最後まで本の内容が予想できなかったのだから、ルルも同感だ。話の破綻具合に内容の見当もつかないままだ。かなりのジャンルがごた混ぜだったが、あれは文字喰いが存在していたせいなのか。はたまた本の著者に力がないせいなのか。

「どんな内容でも、あたしは帰ったら読むよ」

「そうだな、俺も読みたい。というか、読む。こんな思いまでしたんだから、絶対読む。必ず翻訳してもらっぞ」

とんでもない目にあっただばかりだが、それでも読む気は満々だった。

スジガネ入りの本マニア、ここにあり。

本の中に入ったときと同じような感覚のあと、ぱっと視界が切り替わった。足元にはしっかりとした床の感触がある。

「！　人が湧いて出た！？」

「き、君たち、一体どこから！？」

「ああ！　ニズにオルト！？」

いろんな声が周りからした。きょとんとして周囲を見ると、数人の男性が立っている。その中の一人に、ルルは見覚えがあった。

「あ、あはは……やほー、アル兄……」

耳のとがったエルフ族の男性は、ルルの呼びかけにハツとした。

「その呼び方……髪と目の色……もしや、ルル嬢！」

「お久しぶりー……は、ハトームぶり、くらい？」

力なく笑うしかないルルだ。テトからアルジャーダの話は聞いていたが、本人に出会わないうちに事を運ぶつもりでいたのだ。

「え、ルルさん師匠せんせいと知り合い！？」

オルトが目を丸くしている。ニズも同様で、テトも同じく。

「何を言っているのです、彼女は私の師の娘で、類まれな才能の持ち主だった子　　というか、ルル嬢！　何故こんなところに！？」

「いやあの、なんというか、ほら、本の話聞いてちゃったから……放っておけなくて」

えへつと笑顔を浮かべると、アルジャーダは額を押さえた。多分、状況の把握に必死なのだと思う。真面目で、そのために損をするような人だと知っているから、余計に知られたくなかったのだが。

「ええと、アル兄？　この本、もう無害だから」

とりあえずこれだけは言っておかないといけない。ほかのことは二の次だ。とにかく本の精霊と文字喰いのことを説明した。これを説明しておかないと本が封印されてしまう。床には、ルルたちが部屋に入ったときにはなかった仰々しい魔術陣が描かれている。封印の儀式の寸前だったのかもしれない。ちなみに、壁は凍り付いていたり傷がついていたりした。おそらくニズとオルトが本の中で使った魔術が放出された影響だろう。

ケガ人が出たのは確かだが、それは本のせいではなく、文字喰いのせいだと言える。文字喰いさえいなければ精霊が人を引き込むことはなく、誰かがケガをすることもない。

「文字喰い……そんな怪物が存在するのですか……」

アルジャーダは本に目を向けた。ルルも見る。何の変哲もない古刻語の本に見えるこれに、精霊が宿っているのだ。

「本の精霊がいるんだよ、これは！　とても貴重な本でしょ？　封印なんてしたら勿体ないよ！」

ルルは本を抱きしめた。せっかく守り抜いた本、封印なんてされ

たくない。

「貴重な本であることは保証しますよ、師匠。何せ精霊が本の中に引き込むことができるのですから。古刻語を読める相手限定ですし、文字喰いが滅んだので、今後誰かが引き込まれることはないと思いますが」

ニズがそうフォローしてくれた。強引に引きずり込まれたとは言わない。

「本の中の世界を楽しめた、よね」

オルトは微妙な表情でなんとか言ってくれた。

「あー、文字喰いが滅んだ今は、ただの古刻語の本、ですよ」

テトがそう締めくくる。

「それより、ルル、アルジャーードさんとどういう関係なんだ？」

彼はそっちの方が気になるようだ。ルルはあわてた。あわてる理由は、ひとつ。知られたくないことがあるからだ。

「いやその、あたしは別にそんな」

「彼女の父親が私の師匠なのですよ。ルル嬢も類まれな資質を持っていたので、最年少の賢者になるだろうと思われていたのですが」

「『賢者あつ！？』」

その場の、ルルとアルジャーード以外の全員の声が驚きに重なった。

「あ！ 思い出しました！ ルルさんの苗字、ホートントでしたよね！？ テッサーラのカイルド長が確かホートント氏で、師匠の師匠で……ということは、ルルさんは天才の娘さん！」

ニズの声が耳を打つ。賢者。魔術と魔法の双方を扱うことのできる特別な存在・帝国辞書より　ルルの頭の中をそんな単語がよぎる。

ちよつと現実逃避をしたくなった彼女に、アルジャーードは沈痛な表情だ。

「ルル嬢……暴発は治りましたか？」

「……その話はまた今度！」

勘弁して欲しい彼女は自分に関する会話をそこで打ち切った。

「アル兄、ちよつと読んでみていい？」

強引に本に話題を移す。ひとまず封印は免れたようなので、少し安心した。本来の目的はこの本を読むことだったのだ。アルジャーロは彼女の気持ちを汲み取ったのか、軽く息をついて話題を変えてくれた。そんなエルフを見るテトの目がちよつと怖いのだが、ルルは気がついていない。

「開けて大丈夫なのですか？」

「多分大丈夫。読んでもいい？」

「私が読めますから貸してください。危険があるかどうか確かめたいですし」

「やだ。あたしが自分で読めます」

手を伸ばしたアルジャーロを拒み、ルルは自分で本の題名に目をやった。

「……題名は？」

かなり機嫌の悪くなったテトの声に、どうしたんだろうと首を傾げつつ、ルルは本から目を離さない。表紙に書かれた文字を目で追ひ、しばらく。

「……あー……もつのすごく納得……」

思わず、呟いた。題名を読んであらゆることに納得がいった。

「なんだよ、どういう内容なんだ？」

テトが覗き込んでくるが、彼には題名は分からないだろう。ルルは微笑んだ。多分自分の目は笑っていないだろうなと感じながら。彼女は分かりやすいように、ゆっくりと発声した。

「……『全ての本好きに送る　今年のベストセラー百五十選！

天曆二百四十四年度版・上巻』だって」

室内に、沈黙が落ちる。気持ちがかかるので、ルルは周囲をそつとしておいて、本をめくり、目次に目を通してみた。

『幻想絵巻ならこれを読め！』とか『推理小説ならこの本！』とか『読んでうつとりできる恋愛ものはこれがいい！』や『ゾツとしたいならこのホラーがおすすめ！』などのほか『子供に読ませたい絵



巻ならこちら！」などと各章のアオリ分が書かれている。

さらにページをめくってみた。

作者とタイトル、あらすじなどが簡単に紹介されている。流して読んでいくうちに、どこかで見たような内容が目に入った。

『ドラゴンにさらわれた姫君を、勇者が助けに行くという斬新な内容。荒削りだが好感の持てる文章。作者のこれから期待できると、いうもの。』

斬新。とてつもない違和感を与えるその単語だが、表紙の年号を思い出して納得した。天暦二百四十四年……今から五百年以上昔である。

使い古されたような内容が続いていたけれども、五百年以上昔なら、きつと斬新で、他にはない内容だったのだ、多分。

「確かに……五百年以上昔ならあんまり存在してない内容だったんだろうなあ……」

「なあルル、本当にそういう題名なのか、それ？」

「うん」

テトの疑問ももつともだが、ルルは書いてある題名をそのまま口にしただけだ。さらにページをめくってみると『良家の娘と恋仲になった怪盗の話』や『呪われた屋敷』とか『密室殺人』や『大きな（虫という単語が入っていたのだが、彼女は意識から飛ばした）に襲われる子供』など、身に覚えのある話が並んでいる。『イカ・カニ・タコ・三匹の争い』とか言うのもあった。最初の魔術師が出てくわした話はこれかもしれない。昔話のようなあらすじだったが、魔術師がうなされるほどの脅威な海産物になっていたようだ。ルルたちが出会うことはなかったが、ちよつと気になる。海産物相手にヤケドを負ったのも不思議だ。

「……本の中歩いてたときはいろいろ混ざってたのに……これ、全部別の話だよ」

どれひとつとして重なっている話はない。悪い魔法使いと密室殺人の話は別で、良家の娘と怪盗、呪われた屋敷、大きな もそれぞれ

れ別ものだ。

「なんで混ざってたんだろうね？　やっぱり文字喰いがいたからかな？」

本を閉じて、彼女は苦笑する。

「でも、今考えると混ざっていた方が面白かったかもしれない」

メチャクチャな世界で、次の展開の予想ができなくて振り回された。使い古された王道ばかりの話よりは、こんなメチャクチャな話のほうが面白かった　と、言えそうだ。

ただし、体験ではなくて読んでいたのなら、本を投げ捨てていた可能性もあるが。

「こんな昔に、誰がこんな本書いたんだろ」

苦笑しながら、ルルは本の著者名　正しくは編集者名を読んだ。  
そこには。

「……うそ」

「？　ルル？」

「これが……ひょっとして……『アウローラ』あっ！？」

「何いっ！？」

テトも絶叫する。

古刻語で編集者名に明記されているのは、アウローラという単語。絶叫して、その中でなんとなく思い出すのは、最初に本を目にした瞬間にどこかで見たような、と感じたことだった。『アウローラ』の外観、表紙の装丁などは知られている。ルルも話でだけ知っていた。

だから、『どこかで見たような』気がしたのだ。実際には見たことがなく、けれど知っている本『アウローラ』。

伝説の本は、古刻語で書かれ、本の精霊が宿る、五百年以上昔の本の紹介本だった。

それは誰も手元に置いておかenはずである。資料としてなら価値はあるが、本としてはあまり魅力を感じないから、だろう。

がくりと、ルルは膝から力が抜けるのを感じた。彼女と同じよう

にテトもへたり込んで床に手をついている。

「あの、お二人とも、大丈夫ですか？」

「テトさん！？ ルルさん！ どうしたの！？」

「……そつとしておきなさい、二人とも」

ルルの本マニアっぷりを理解しているアルジャードだけが、落ちて着いていた。

魔術師ギルドに不法侵入したことは、幸いにも、ルルが偉い人のアルジャードと知り合いであり、さらに本の謎を解いたことで不問になった。ニズとオルトとアルジャードに玄関まで送ってもらい、ルルはテトと二人で帰路についた。

「本、ギルドの図書室に置いてもらえるみたいで良かったね」

「そーだな……」

『アウローラ』は封印を免れた。精霊がいるということでもう少し研究はされるだろうし、伝説の本と名高い『アウローラ』かどうかの確認作業もある。装丁からして、あの本が『アウローラ』なのはまず間違いないだろう。それが済めば普通に図書室に置かれるとアルジャードが保証してくれた。

「内容分かってよかったけど……なんだろ、この虚脱感……」

古刻語の本だからと、期待しすぎていた感がいなめない。昔の本なのだ。流行り廃りは今現在とは違うのである。

「ところで、ルル。賢者目指してたのか？ だから古刻語読めたんだな？ ひよつとして忍び込んだときのゴーレムも魔術が何かでなんとかしたのか？」

ヤッパリ聞かれた、とルルは肩を落とす。答えたくないが、仕方ない。

「……そうだよ……」

「そうか……なあ、なんで賢者を目指すの止めたんだ？すごいエリートじゃないか」

「見て分かったでしょ。暴発するから」

彼女の説明に、テトはおそろおそろ、それでも尋ねてきた。

「……昔からそうなのか……？」

「昔はそうじゃなかったよ……ちょっと、ある馬鹿のせいでね、魔術と魔法が嫌いになっちゃったの。それから」

昔は学ぶのが楽しくてしようがなかった。

今は魔術も魔法も嫌いだ。そもそも、使うのが嫌いだ。

「何があつたんだ……？」

「賢者なら誰でもいいって言う変態男にプロポーズされまくったの」  
「へ」

「要するに、変態につきまとわれて、魔術も魔法も使うのがイヤになったの。分かった？」

「……ハイ」

多少据わった目で言うと、テトはおとなしく頷いた。さすがにそれ以上は聞いてこなかったたので、安心したルルである。そのまま、しばらく無言で帰り道を歩く。

「でも、まあ、面白かったね」

隣を歩くテトに、チラリと目をやる。

「お？ あ、おう」

「内容も分かったし、精霊の存在も知ったし」

ふ、とルルは微笑み、空を見上げた。柔らかく輝く月の姿がある。月を瞳に写しながら、ルルはこの上もなく怪しく笑った。

「考えてみて。精霊はあの本だけとは限らないでしょ。ほかにいるかもしれない。もし、ほかにもいたら今度は……！」

「は！ そうか！ 精霊は本を守ってくれるんだっただな！」

「そう！」

本を守ってくれる精霊を、自分の部屋に招くのだ！

「もう一人、いえ、あたしとテトと店の分で三人！ 見つけるの！」

「おう！」

同じように握りこぶしを空に突き上げ、二人は声を上げて笑った。

「うるせえぞ！」

途端にどこかの酔っ払いに怒鳴られ、揃って肩を跳ね上げ　それから吹き出した。抑えて笑いながら歩く。

テトは宿、ルルは借りている部屋。テトは彼女を家の近くまで送ってくれた。

「じゃあね」

「おう、また明日な」

ごく普通に挨拶して別れた。

明日、ルルはいつものように出勤して、テトはいつものように手伝いに来るのだろう。

彼が本を買い、たまに値切ろうとして、自分はそれをにこやかに断る日常に戻るのだ。

また、新しく面白そうな本を見つけるまで、そんな風に過ごすのだ。

アーカイブスにある、伝説の古本屋『古書の家』。お人好しでもアメとムチの使い方を心得ている、人脈の広いマイヤーおじさんが経営している古本屋。

訪れたとき、店主がいなくてもがっかりすることはない。きっと、店の中に詳しい、ぶつとい三つ編みのそばかす少女がいるのだから。店先に、手伝っている貧乏くさい冒険者の少年もいるかもしれない。

時々、魔術師の青年と少年も立ち寄るようになったはず。エルフの青年も来るようになっただろう。

アーカイブスの古本屋は、明日もきつとにぎやかだ。

この上もないくらい本が好きな少女と少年が、伝説の店を支えているのだから。

## エピソード・理解、納得、苦笑い（後書き）

これにてアーカイブスの本マニアは完結です。アホ話にお付き合いありがとうございました。ほんまにあほな話でしたね；

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0674e/>

---

アーカイブスの本マニア

2010年10月8日14時36分発行